

798-167

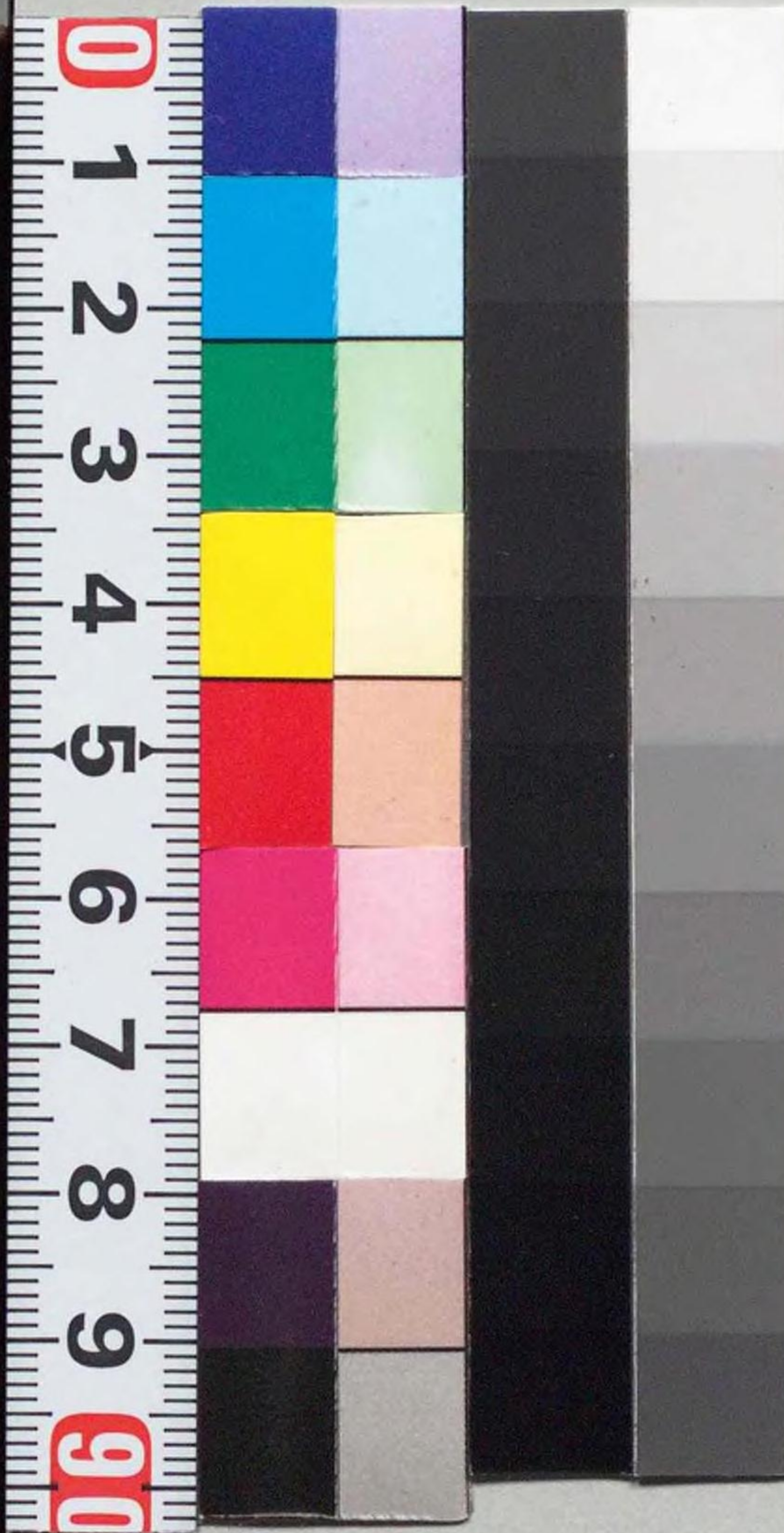


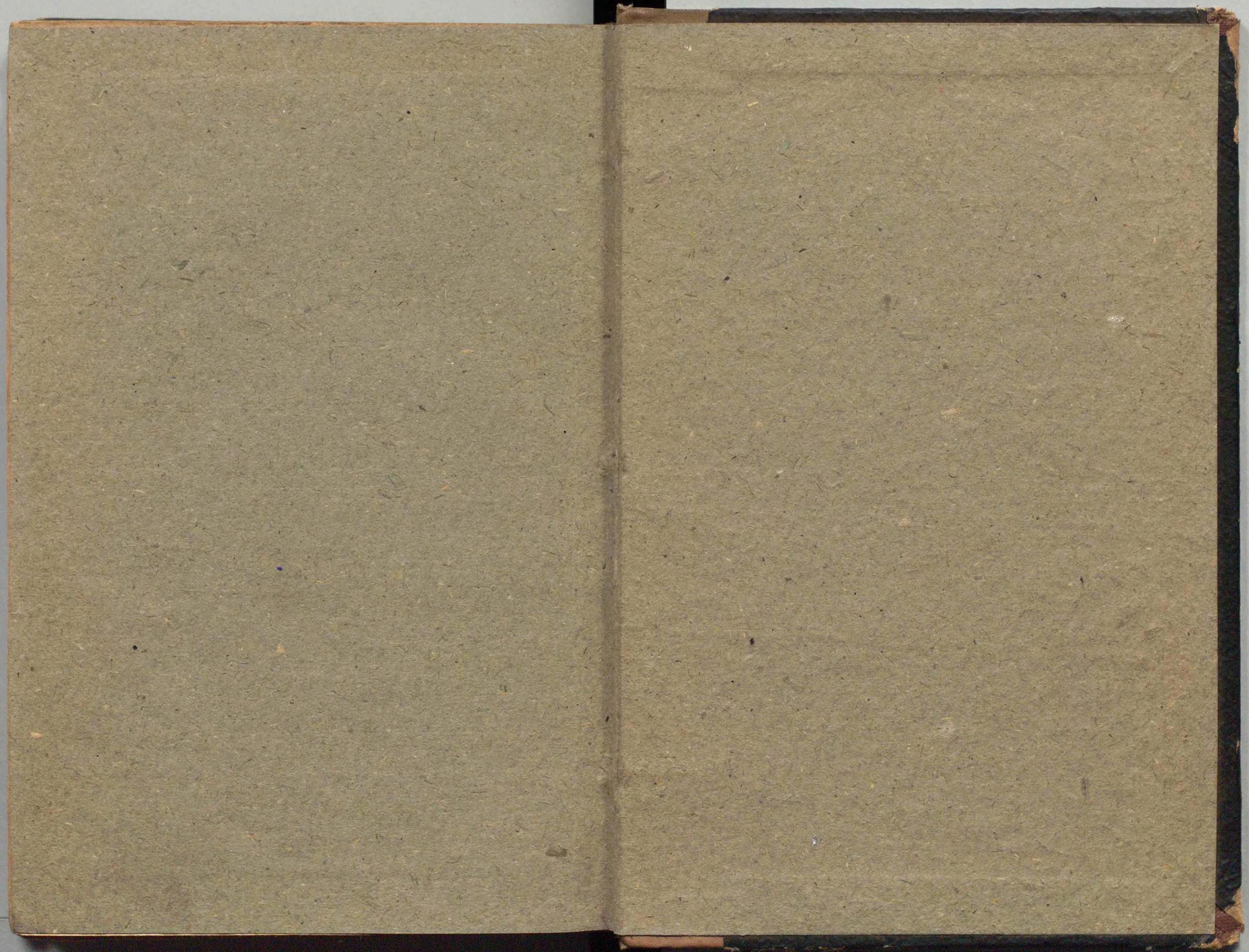
1200501607578

798

167

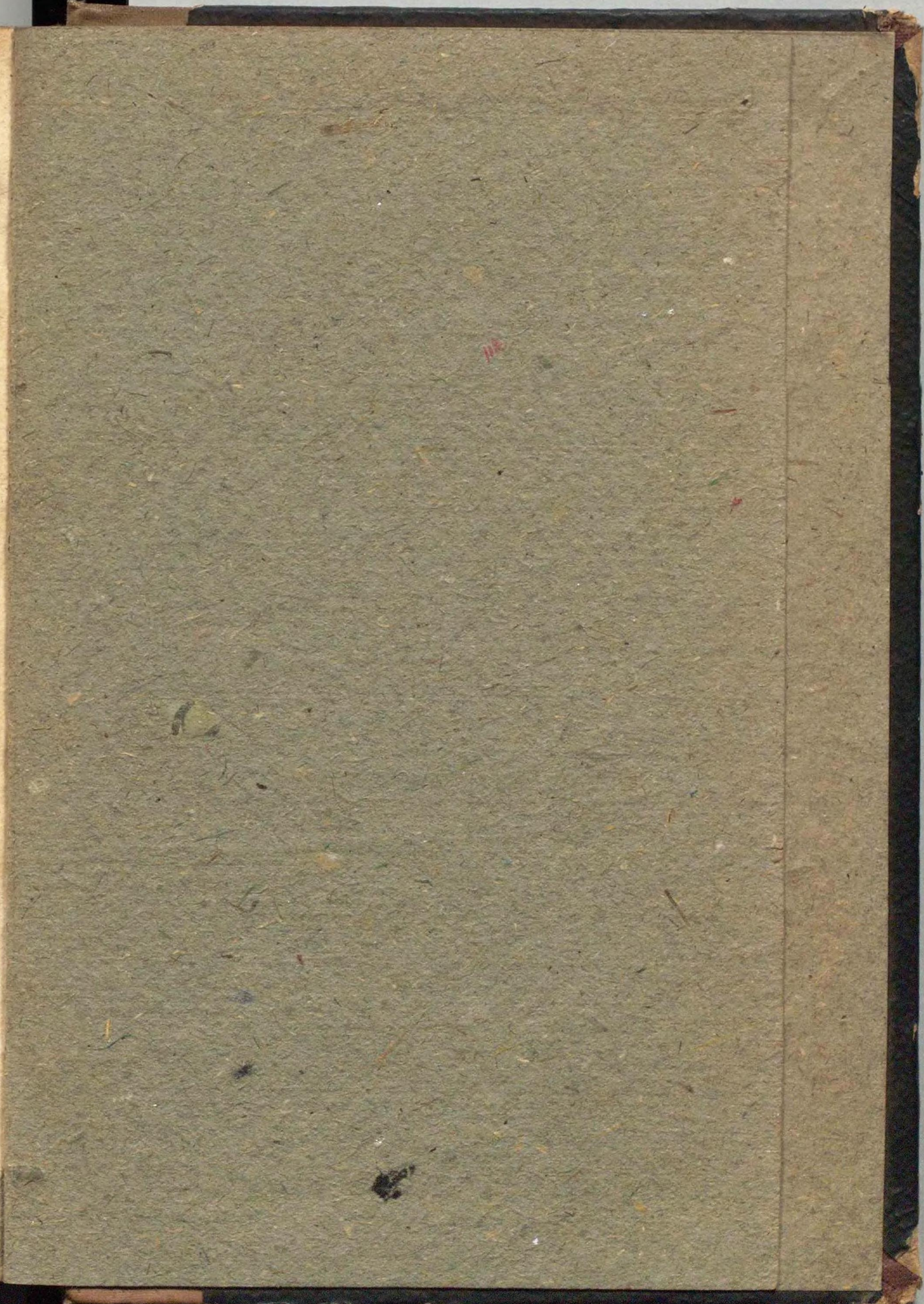
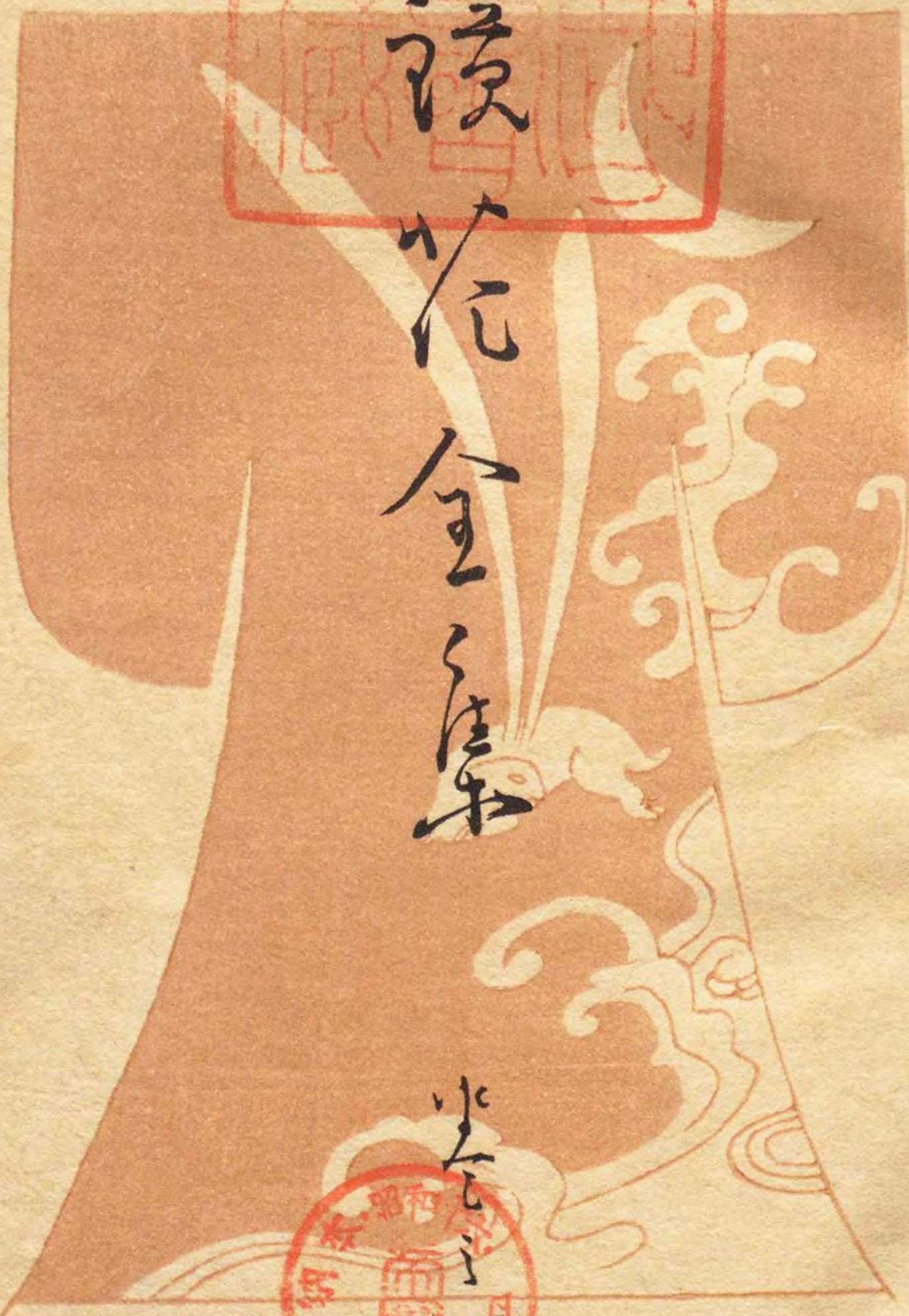
〇
複
写







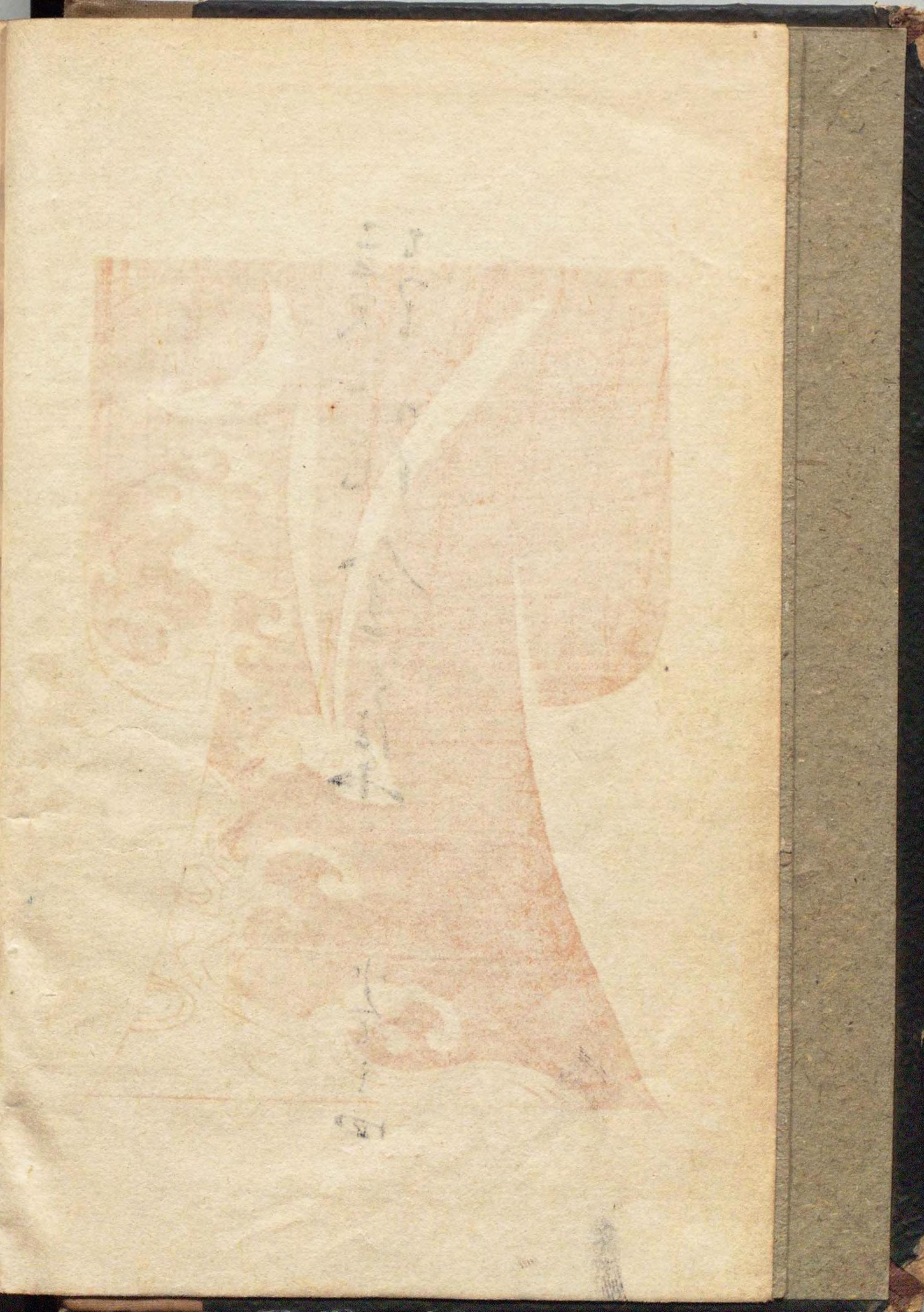
續
元
金
集



798
167

目次

辰巳巻談	(明治三十一年二月)	一
蛇くひ	(明治三十一年三月)	一七
山僧	(明治三十一年四月)	二五
笈摺草紙	(明治三十一年四月)	二四
黒百合	(明治三十一年五月)	二七
星あかり	(明治三十一年八月)	三七
鶯花徑	(明治三十一年九月)	三七
通夜物語	(明治三十一年九月)	四五



梟物語	(明治三十一年十一月)	五四七
五本松	(明治三十一年十二月)	六三九
繪日傘	(明治三十一年十二月)	六四九
立春	(明治三十二年一月)	六八一
三尺角	(明治三十二年一月)	六八九
三尺角拾遺	(明治三十四年六月)	七二三

辰巳巷談

豆腐長屋

うろく船

澁團扇

三枚目

留女

刎釣瓶

たの字

後姿

百夜通

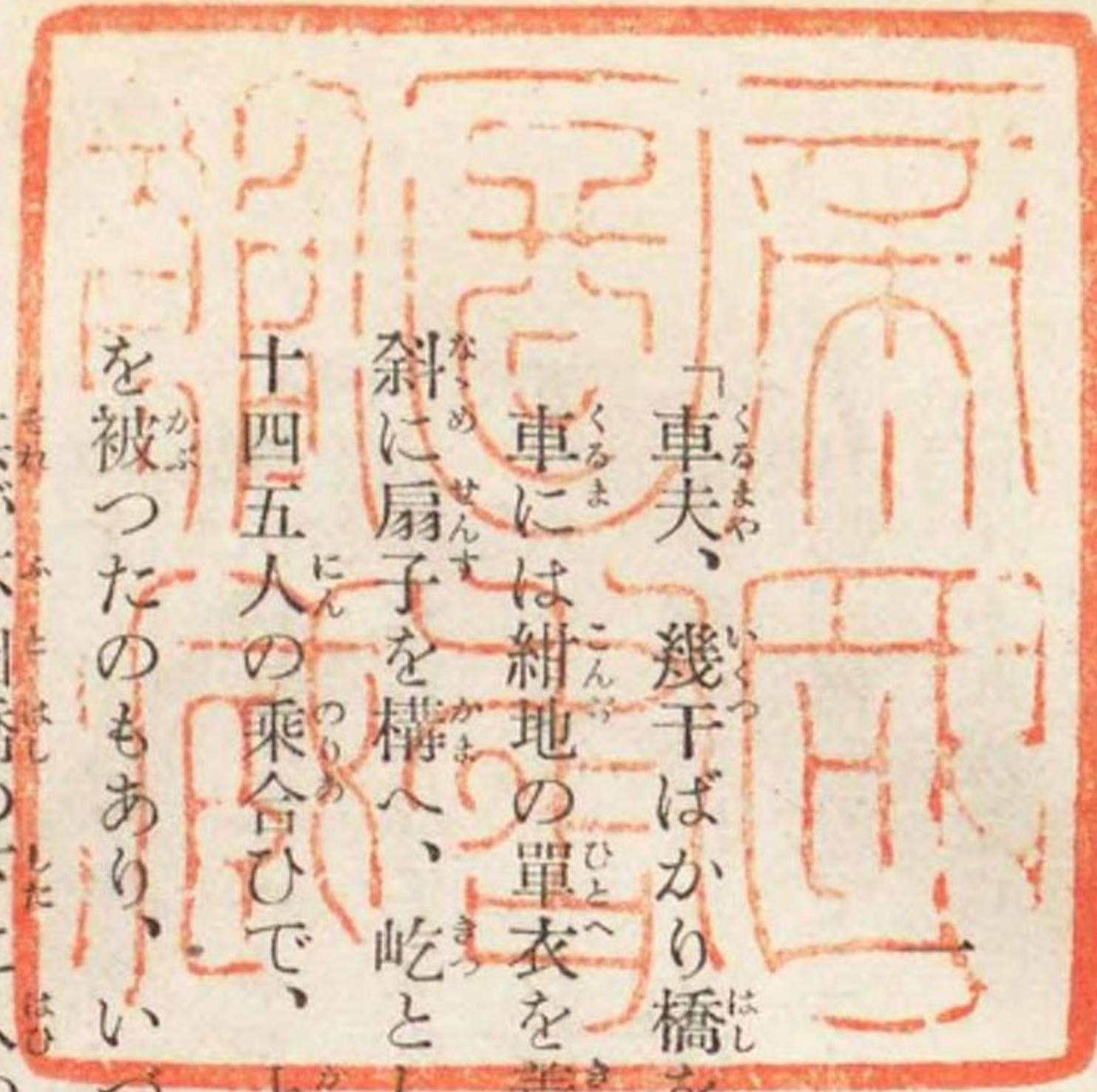
み、すばれ

はがひじめ

土手

の芝

豆腐長屋



「車夫、幾干ばかり橋を通つたらう。」

車には紺地の單衣を着た二十一二の、色の白い、細面の少年が乗つて、膝の上に兩手をかけて、斜に扇子を構へ、屹とした品の好い姿で、恍惚して居る。いま橋を一箇渡つたとき、早船が一艘、十四五人の乗合ひで、上の方から下つて來たが、月影の中に團扇を持つたのがあり、また麥藁帽を被つたのもあり、いづれも水面に墨を流したやうな舟に、少し曇つた白い衣服。

其が不圖橋の下に入つて消える、と鴉が鳴いて、遙かに飛び去つた海の方には霧がかつて、

談巷巳辰

ぼんやり白けて居て、渺として果のないなかに、ちらりほらりと松の樹が立つて居る。すつと近く楫棒に擦れ合ふばかりの處、路ばたの砂地に船が引上げてある、十四五艘も並んで居よう、其中に擡んでた舳が煙突のやうに高く空を指して、船と船との間處々に、かけてある藁小屋の屋根

に乗つかつてるやうなのが月明にありくと見える。前途を廣々と環取つた空の低い處に、小さく群つた星の斷間に、白芙蓉の花が風にひらりと動いてるやうな蒼い色は、洲崎の電燈の光である。

車は橋の勾配を這つて、窪地へするくとはずむで下りた。蠟燭をばりくと碎いて片碎の白いのを二ツ三ツ路傍へ蹴散らした。

車夫は反りかへるやうに腰を伸して、

「大橋を渡りましてから、左様ですな、十餘りもございませうか。八幡様から此方ばかりでも、五ツ六ツは渡りました。」

「さうか、橋ばかり澤山ある。」と少年は車の上から川を見下ろして、且つ船を見上げた。

「旦那、何の邊でございますね。」

「何でも此邊だらう、何處かで聞いて見るが可いや。」

この路傍の砂地を奥へ引込む處に、茅屋が一軒、戸障子をあげ放したのが、蚊遣の煙で朦々と燻つた暗い中に幽に見える。

車夫は透しながら片手で汗を拭いた。

「少々ものを伺ひたいんでございませうか。」

黙つて返事をしない。

「御近所に……」といつて車夫は振返つた。

「旦那。」

「平田。」

「え、其平田さんてえのはありませんかい。」

女の聲で、

「存じませんよ。」

「何うも。へい」と腕車を引出す。車輪がぐるぐるとまはる中から、少年は振返つて、其茅屋の奥を覗込む、と煙の中に團扇があつてひらりと動いた、其團扇に絡はつて絲の亂れたやうに蚊遣が靡いて分れた——其時——枕元に年の少い婦人が悄乎坐つて、病人と思はれる、其母親らしい婆さんが顛巻をして、俯向いて寝て居ると咄嗟に見て取つた。

少年は兩の手に扇の要を握と握つて、肩を細うして首垂れたが、何と思つたか聲を懸けて、

「車夫、分りさうもないぢやないか。」

「何わけはありません。モ一度其處らで聞いて見ませう。」

「知れなきやあ可や、歸らうか。」

「念のためでさ。え、畜生。」
と野良犬を呵して、威勢よく前途へ驅ける。

二

「親方、ちよいとものを伺ひたうございますが。」

「何だね。」といったのは頬骨の尖つた、胸の赤い、肥つた男で、帯も締めず、浴衣を羽織つて、納涼臺の上へ片足をぐいとあげて、團扇使をして居る。おなじ納涼臺に、二十二三から四五までの逞しい壯俊が未だ三四人ならんで掛けて居た。

「入舟町の……番地は此邊でございませうか。」

「む、此處だよ。」

片側は胡瓜畠で、ちやうど其納涼臺を置いてある背後はまばらな竹垣で、片側には豆腐を切つたやうな、眞四角な、長屋が五六軒一列にらんで、戸を閉めて寝静まつた處があり、軒に風鈴の鳴つて居る處もある。路地の口は一間にも足りないから、腕車を呑むと支へさうな。

「それでは平田さんといふのを御存じではございせんか。」

「平田だえ。何うだ知つてるか。」と件の胸赤は頷で横を見た。

「平田、分らねえな。」と隣座の若いのがいつた。

「商賣は何だ。」とまた其次に居たのが聞く。車夫は振返つて客を見ると、少年は帽を取つて、

「失禮、何をして居るんですか、平田といふので。」

「あ、そりや何でせう。」

突然冴えた聲がして、直ぐ軒下に釣つてある、低い蚊帳を、白い手でかゝげて出たのは、結髪の年増である。白金巾を短く腰に纏つたまゝ、肌には絲もつけない、素裸體で、片膝立てて蚊帳の外に潛つて出て、

「三八さんの處でせう。それはね、」といひながら足をおろすと、直日下駄を突懸け穿、裸身のまゝで路地へ出た。

「直ぐね、其壁ノ處を突當りますとね、井戸がありますからね、井戸についてモ一ツ路地をお入りなさい、左側の三軒目のお長屋ですよ。」

「向うの藏ですか。」と車夫は提灯をあげて路地の突當の瓦屋根を仰いでいつた。

裸體の婦人はまた近寄つて、

「藏から曲るんですよ。さうすると井戸がありますからね、井戸から三軒目さ、左側よ。」とささきへ立つて指をする。

「御親切様に、難有う存じます。ぢやあ旦那、」
黙つて少年は頷いた。

静に曳いてがら／＼と音がすると、ハヤ突當つて腕車は見えなくなる。

「姉え、何だな。」と見送つて胸の赤いのが聞いた。婦人は路地の中に立つて腕車の行つた方を見
て居たが、呼ばれて、身を捻つて、莞爾して、

「ほら、あの一件が居る内さ。」

「何だ、あの例物か、例物。」と、降つて来たといふ狼狽加減で、若いのは棒のやうになつて納涼
臺を離れて突立つ。

「何だ、何だ、一件だわ、例物だわツて、孰ちも分らねえ。」とまた一人がいつた。突立つたのは
思入ありといふ身振をして、

「素ばらしい奴よ。」

「む、掃溜の鶴か、此頃の、さうか、あれか、あの内の、ふむ、」といつて頷いて居る。

「六さん、何だとえ、掃溜の鶴だとえ。」

「さうよ、溜池の蚊ぢやあねえ。」

「憚様、何うせ私どもは掃溜の南瓜でございます。」

これはまた意外のすね方だから、飲込めない顔をして眼を瞪つて居た、六は心着いて苦笑をし
た。

「なにもそんなに氣をまはさなくツたつて可いやね、そりやね、お前掃溜だけれど……其、」

「矢張掃溜ぢやありませんか。」と婦人は笑ひ出した。

「そりやさうと、今来たなあ何だらう。」

「蟲だらう。」と、立つてる若いのはいつた。

「生白い蟲ぢやあねえか。」蝶だらう、いや夏蠶だらうと、わや／＼いつてる内、胸の赤いのはび
しやりと胸へ来た蚊を叩いて、

「二才め、巫山戯たことを！」忌々しいといふ顔色。

三

腕車は藏の壁に添つて左へ曲ると、果して總井戸があつた。少年は前屈になつて四邊を見た

が、
「下りよう、下りよう。」とおさへるやうに聲を懸ける。輪のまはる發奮だからぐる／＼と引込む
で、がったり路地口の狭い處へ嵌まつたやうになつて止まる。

と、二條格子の膝懸を片手で搦んで搔遣りながら、蹴込へ眞直に立つて少年はひらりと下りて、
楫棒を跨いで路地へ出た。

拔裏の砂地に建ててある車止の、香の圖を略したやうな棒杭を潜つて、半襦袢に湯巻をした白
い扮装の女が一人、目筈を小脇にして出て来たので、少年は一足後へ引いて身を開き、轡頭を取
つた姿で泥除に手をかけながら、身體を附着けて透かして呢と見た。

車夫は提灯を片手にして、いま少年が掴み落した膝懸を取つてはたいて居る。婦人は路地の中
ほどで立停まつて、此方を覗つたやうであるが、其ま、赤黒い灯が幅一尺ばかり洩れて見える一
枚はづした戸の内へツイと入る、同時に固くなって立つた少年はツカ／＼と歩行き出して、件
の長屋の前へ行つて、ちよいと覗くと、まだ内へは入り切らないで框に立つた婦人が、邪慳に
眦を釣つて、鋭い瞳を寄せて、ツ、ケンドンな、沈んだ聲で、

「何です。」

「い、え。」

といった切、少年はふいと通抜けてすつと行き、あの車停の杭の處で立停まる、と婦人は、手
荒く戸を鎖してしまふ。

路地は暗くなつて廂へ月あかりが薄くさし込む、片側に並んだ幾軒の長屋は盡く寂寞として、

本地の亂暴な、節穴だらけの門の戸が、唯一枚の板のやうで、處々表戸の合せ目が黒い筋を引
て間をおいちゃあ、順序よく縦に並んで居る、其が長屋の數であらう。

車夫は提灯を左右に振つて、立停まつては仰いで見、立停まつては仰いで見、一軒、二軒、三
軒と順々、門札を見て歩行いたが、今戸を閉めて引込だ其隣家の前に立つて、身を反らしながら
仰向いて、思切つて提灯を高くさしあげた。あかりがうつつて顔が赤くなつて見えたが、門札を
讀んだ。

「平田、平田三八。」と高い調子、提灯を振向けて、

「此處です、平田三八、此處ですよ、旦那。」と少年を呼ぶ。ちやうど棒杭に背を凭たして、思ふ
所あるらう軒合の月の形をすかして居た少年は、此聲を——車夫の此高聲を聞くととはツとした
様子。ぶらりと膝に垂れて居た扇持つた手に力が籠つて、要を取直すと身構しつゝ、無言でつか
つかと、しかし足音をば浮かして寄る。

「寝てますが、旦那。」と車夫は二ツ三ツ戸の合目をがたく／＼鳴らして、

「敲きませうか、え、た、きませう。
少年は黙つて居る。

「まだ十二時にやなりません。夏の内あ宵の口でさ、た、いて見ませう。」

と握拳を上げたのを、思はず手に持った扇でおさへた。銀の要であらう、キラリと指の間に輝いた。車夫は怪訝な顔で、少年の顔を見て控へて居る。少年はおさへるやうにソツと板戸へ手をあてて、瘠ぎすな立姿をひつたり寄せ、鼻筋の通つた顔を斜に、戸の合目に耳をおつ附けながら、しばらく身動きもしなかつたが、力なさうに扇を垂れて、立つたまま、膝を組合はせて、下駄の爪先でコト／＼コト／＼と地を踏む。

おなじ長屋内だけれど何處だか分らない、手に取るやうに嬰兒の啼聲がして、む／＼と譫言のやうに、乳を頬張らせたやうな氣勢がする。

板戸に取つて耳を濟まして居た少年は、戸を突いて見ようともしないながら、なほ立去りかねたか、猶豫つてるので、車夫はもどかしくなつたらう。

居合腰になつて、踏張つて、足に力を入れて、手つきで教へながら少年の顔を仰いで、「どんとおやんなさい、構はずお遣んなさい。まだ／＼早いんでさ、御遠慮なさることあねえ。」と何か知つた風で、故とらしく聲を潛めながらいふ、少年は餘計なことをと氣を揉む状、眉根を寄せて聞いて居たが得堪へなかつたか、手を掉つた。

「可から彼處へ、彼處へ。」とせき込むので、車夫は立端なく引退つて、路地口に曳捨てた、空車の方へ行かうとして、

「べらぼうめ、深川の奴等は寝坊ぢやあねえか。そしてまたあんまり溫柔くツて異でねえな。」と口叱言をいつて楫棒の傍に蹲む。

少年は再び身を寄せて、内の様子を覗つたが、良あつて思ひ棄てたか、戸から耳を離して身を聞いた、胸を撫でて襟を合せて、立直りはしたけれど、立去りあへずイむで、月の下に首を垂れた。

とつおいつ、それまで躊躇をして居たのが、何と決したか、つか／＼と三たび立寄つて、扇子持った手を板戸に縫つた時、立つけががたり鳴つた。音は立てまいと思つて居たらう、不意に戸が鳴つたので驚いた耳許へ、うるさいといったやうな、寢惚聲の太いので、

「誰だい。」と語るやうに落着いて謂つたのは、四十ばかりの男の聲で、全體寢靜まつて、森とした處だから、巖穴のなかへ響くやうに聞えた。

少年は此聲に突出されて、恰も膠の離れたやうに、戸口から身を退いて一步退つたが、立停まつてキツと一眼見ると、顔色をかへて足早にツカ／＼と引返した。

「歸るから、早う」とせき込んだ風で聲を懸けて、見返りもしないでまた／＼間に車の前へ廻つ

て路地を出たが、一文字に急なんだから車夫はアワを食つて、呑さした煙管を逆に取りつて楫棒へ吸殻を叩き落した、飛上るやうに身を起こしソ、クサ煙管筒に突込みながら、呆れた顔をしてくるくると眼を睜ると、少年はハヤ藏について曲つてしまつたので、蹴込へ煙草入を投げ込んで引張りつけられたやうに空車の楫棒をあげた。ゴロ／＼と砂地へ摺つけて轆の音が聞えたが、やがてまたひっそりして、稍照りまさつた月の色の薄ら青い路地の上に、吸殻が一ツぼつり赤くなつて燃え残つたのが、ほろ／＼と動いてしばらくすると、地へ吸込まれたやうに、ちいッと消える。同時にさら／＼と磯くさい風が吹いて来たが、動くものといつたら塵一ツ葉もない。静まり返つた爾時。

五

がツたり樞を外す音がして、今少年がゐんで居た板戸を細目に開けて、半身を出した美人がある。格子に手をかけて伸び上るやうにして、敷居へ眞白な足をあげた、鳶の葉を染め出した鼠地の浴衣で、博多の男帯をぐる／＼巻に腰に纏つて、片端を乳の下に挟んだが、寝起の姿たらしなく、胸も裾も取亂した、白脛にからんだのは燃立つやうな緋縮緬で。小造のちつと肥つた、ぬけるほどの色の白い、年紀のころは十八九で、髪は艶やかに黒いのを、根の低い銀杏返に結つて居る。これをこそ納涼臺では一件だの、例物だの、掃溜へ鶴だのといつたので、別に不思議なこと

はない、つい此以前まで、洲崎の何とかいふ大店に胡蝶といつた遊女である。

眼鼻だちのくつきりした、たとへば月の如く玉の如しで、あかるい明瞭な、といつた顔に、何等か憂愁の煙を帯て、さも術なさうに眉根を寄せながら、黒目勝ちのぼつちりした清しいので、路地口の方をうかゞつて、またソツと四邊を見て、忍んで敷居をまたいで出る。あとの足がまだ框を離れないで、身體が宙に釣られて居る。胸を空さまに脛を亂した、仰向に反りかへつて、

「あれ」といつたが、ぱつたり尻もちをついた音。する／＼と引摺り込まれて、がたぴしと上を下、浅間な内にももの覆つた氣勢がして、やがて眼の窪んだ、鼻の高い、細面のたゞものでない老けた女が、戸外へ顔を出して後前を見てびつしやりと戸をたてると、忽ちしんとした。

うろ／＼船

六

少年を乗せた腕車はさきの路地を後にして、今また川の岸に沿つて、砂地に引上げた船の傍を曳いて行く。

いろ／＼情實の擗まつた、蜘蛛の巢の多い、狭ツくるしい、裸體の女の立つた、胸の赤い男の胡坐かいた、肩がつかへさうな、天窓の重ツくるしい、じろ／＼人の見る、そんなうつとしい處を出て、群がった、蒼い星の下に、砂地の夜露に濕つた上を、川を見、且つ船を見て、廣々しい、人通のない、せい／＼した處へ俄かに出たので、道なら一町とは隔らず、ツイ三分間の前のことも、遠い處に、昨夜あつたことのやうに思はれる。少年は車の上で天の高いのを快ささうに脊伸をして、胸を張つた。扇を膝に横へながら無意識に弄んで、

「寒くなつたやうだ、車夫。」

「残暑でございますから。何てツたつてもう豪勢秋になりました。」

「何時だらう。」

「今ぢやあ、さうですな。」

行く時道を聞いた貧女の住居は、路の左手に戸を鎖して、月夜に寢靜まつてしまつたか、小さく猪番の小屋のやうである。

「十二時過ぎですね。」

上の方からまだ川舟がゆるやかに流れて來たが、水に任すのであらう、立つて棹をさすものもなく、中形の浴衣を着た華奢な女が、艫の方に眞俯向になつて居て、舳の方には立膝に手を組ん

で、蒼ざめた顔を仰向けた、かぶりもののない男が、月を仰いで眼を眠つて、身動もしないで、あかるい水の上をすらく／＼と流れて去つた。

少年はバツチリ眼をあいて屹と見たが、もう影も見えない。

「此處等は何だらう、皆船頭か。」

「船大工が居るんだと思ひますが、」

車夫もあたりを向した。

「まるツきり世界が違つてますから。」

といった時、がツくりして腕車が止まつた。ちやうど汐見橋に懸つたので、橋の勾配がチト急なので、輪が引ツかゝつて、がツたりがツたりして居る。

ふツとまた眼をあいて、物思の夢からさめた少年は、空しく腰をふん張つて拵いて居る、車夫の後姿を見た。

「下りようか。」

「何、一呼吸です。」

これしきをといふので力を入れるけれど、車が左右へ傾くばかり、がツたり支へちやあ纒に一寸の處で乗ツ越せない。

「あゝ、欄干につかまつて推してあげよう、寄ると可や。」
 車夫は無言で車を寄せる。少年は手を伸ばして、橋の欄干へ抱くやうにして手を懸けて、身体を屈めて突張つて前へ推して呼吸を入れる。

「呟。」といふ懸聲で、一文字にのりかけた、腕車がのけざまになつたトタンに六ツばかり掴拳が揃つて母衣を掴んで、人数が四五人、

「待ちやがれ！」

といつたと思ふと、背へぐいと引いたので、浮いて居た車は一堪もなくあをむけに引くりかへつて、二ツの輪が両方で、地を離れたまゝ、くるくると三ツばかり空廻轉をすると、蝦蟆が轉んだやうに黙つて楫棒を天に朝した。

車夫は天窓の上へ楫棒を抜かれたから、轉倒してワツといつた切、二三間、——橋の真中まで駆け出したが、ひよこなんと立停まつて、突あたたつたやうに威勢よく振返つた。

「やい、此方等。」

澁 團 扇

七

「巫山戯た眞似をしやがるぢやねえか、畜生、殺されるな！」

低い天井に殺氣が籠つて、襖も壁も眞黒になつて、じとくする赤疊の上に、二ツ三ツ茶碗を轉がした火鉢の傍に、骨組のしつかりした、肉の堅い、蒼黒い裸體のなりで、胡坐を搔いて眼を瞋らして居る。細面だが、鼻の隆くない、口の小さな、眉の寄つた、五分刈の頭髪が寸餘にのびて、耳におつかぶさつてる、眉間が目立つて白い。見ると四十の上に老けては居るが卅八九で、一癖ありさうなのは宗平といふ船乗で、遊人で、ちつとは若いものに立てられる女房持つた男である。握拳でぐりぐりと膝を突いて、居丈高になりながら、中たるみをした、朽葉色の蚊帳の裙に、片手を背中であぐらに捻ぢられたまゝ、片手をひつたり疊についたのに頭をおさへて、銀香返をばさばさにした、浴衣ははだけて、裾が廣がつて、巻きつけてた男帯がすり落ちて、踵のあたりへたまつて居る、踏潰されたやうな形で、びつしより汗になつてちつとも動かないさつき遊女を、掴みかゝりさうな權幕で睨みつけて、

「不貞腐め、太え奴だ。やい、殺されやあがるな！」

「まあ、可やね、可やね、宗さん、お前さんもまあ氣を落着けてね。」

と件の鼻の高い、眼が底光をする、頤のこけた、小さな丸鬚が眞中を隔ててほつとした呼吸を
ついで居る。

引摺戻す、撲る、おさへる、踏む、縛らうとする、悲鳴をあげる、割込んでなだめるなど、
一騒あつたいまの後で、小さな丸鬚が呼吸をつけば、裸體の宗平も毛だらけな胸に波を立たして
居た。

「可かあねえ、獸め、畜生！ 其分にして唯置くもんだと思つてやあがるんかい、いきづりめ。」
と喰殺しさうなことをいひひく、これが捨臺辭のやうになつて、やうく張つてた腕が柔かに
なつて、拳の筋が弛んで来る。

小さな丸鬚の婆さんは楯になつて、遊女を庇つて居た身構を崩して、

「可うございますよ、まあ、荒立てないでも話は分りますから、何うぞまあ、」

といひながら、俯伏になつて居る遊女の背中を、澁團扇の強い奴で、ゆつたりと煽いで群つて來
る蚊を拂ひく、

「さあ、ちゃんとして、ね、可からあやまつておしまひなさい、ね、何だか知らないが、あんな
に腹を立つて居なさるんだから、困るぢやありませんか、ね、泣いてたつて仕やうがないんです
から、ね。」

と團扇を、背へ捻ぢられて居る遊女の其手の上へおせて置いて、膝を宗平の方へ向けた。

小さな丸鬚に結つた老けたのは、お重といつて、洲崎で此のおいらんの新造をして居た女であ
る。誰でも客をつかまへちやあ、おいらんが大人しくつて、優しくつて、小さいから、女のやう
に思はれまして、可愛くつて、可愛くつてなりませんと、いつてた女で、年の少い客でも熱くな
つて通はうもんなら、おためになりませんからと、意見をした、親切極つたもので。殊に生れが
旗元だとか云ふので、お荷物な酔つたんばうは、おもしろく機嫌を取つて、浮かして遊ばせるこ
とは出来ないけれど、其代り殿様であらうが、大旦那であらうが、廣間の床柱に凭りかゝつて、
五ツ紋でお袴を召していらつしやうといふやうな御身分のお客様なら、來れ！ 塗骨の女扇を
膝について、對決をして見せようといふ御人體、みづから新造には柄が合はないと號して居つた。

其癖若い内は所々の廊へ出たり入つたり、伊勢へ七度、熊野へ三度、數々洋行をした者だが、
最後に田舎の隠居様に受出された、其晩、廁から脱げようとしたのを捕つたが、懇に因果を含め

られて、そもく十七の時から追駈けまはして、情人になつて居た——平田三八——今は剃身屋だけけれど、舊は旗本の御用聞であつた現在の亭主に、再び賣りませぬといふ證文を書かして、件の隠居様がすつぱりと下された。それからふつりと堅氣になつて、堅氣になつて新造になつたので。そのかはりたとひ新造はして居ても十七の時添つた亭主はいまだに守つて居りますといふ。いや御中藤といふものは、將軍様と寝る時束ね髪にしたもので、其寝てる時はお次にお年老が控へて居た。また其お次にはりやん、こが一本ざして居たなどと、若い人をつかまへちやあ聞かしたもので、あのお重さんになつてから、胡蝶が六枚目へ落ちたんだつて、さういつてる者もあつたけれど、ほんとに親切な人ツちやあない、こんな中にやあ珍らしいと、胡蝶はいつも然ういつて居た。

首を据ゑて千代田の大奥を語るやうな、そんな時代なのかと思ふと、また恐しく當世で、クミチンキが胃病の薬だといつて見たり、運動をしないと血の循環が悪いなどといつて見たり、いやに笑ひながら、君、失敬といつたこともあれば、潮來が粹で可、(縁かいな)なんざ、フ、ンと酷く明治の昭代を罵倒したこともある。

お重は宗平の方へ膝を向けて、世話が焼けるといふ顔で眉根を寄せた。

「一體、まあ何うしたといふんですね、あんなにお話もてるから、聞づらいのを堪へてさ、ほ

んとに寝られないのを無理やりに眼をつぶつて、やつとこさとうとくした處へ、ドサリ、ガラツ、バタリぢやありませんか、驚いたぢやありませんか、何うなすつたといふんですね。」

と一膝寄る、宗平は眉毛の太いのをピリ／＼として、

「何うなすつたもねえもんだ、人を踏づけやあがつて。お重、手前の足許も明るかあ無からうが、馬鹿め。」

と手荒く轉がつた茶碗を引たくツて、なみ／＼とつぎ、宵越の濇いやつを一呼吸にくツと呑む。

「え、何でございますね、些少も私にや分りませんが、おいらん。」

と云つてまた向直つて、かの濇團扇を取つて煽いでやり、

「何か喧嘩でもしなすつたんですか、え、え？」お重顔をおツつける。

胡蝶は疊にくひついたまゝで、幽に頭をふつた。鬢からこぼれた房りした髪の毛が、ゆらくと揺いで動く。

「でもないのですか、困りましたね」と顔をあげて、「宗さん、そんなに怒んなさらないで、何うぞまあ、分をいつて聞かして下さいましな。また何んないひわけがあらうも知れませんかね。」

「何だ、親が、貧乏だとか何とかいやあ、牛を盗んでもいひわけが立たあ。姦通のいひわけえ

なあツヒぞ出来たためしがねえんだい。ふむ、と言葉尻を落して、煙管を拾った。

お重は宗平の今の一言で、ギツクリ思ひあたつた體で、視詰めて居る宗平の眼から顔を背けて、胡蝶をチヨイと流盼にかけたが、

「へえ、何ですか。」とつかぬことを兎も角もいつて見る。

「姦通も品によらあ、己の居る所で嬬曳をしようツて、餘りな太え奴だ。えッ此の阿魔！」としやがれ聲で、沸上つたやうに眞赤になつて、煙管を逆に取つて立懸つた。吃驚して手をあげる、お重の思つたほどではなく、宗平は擬勢を示したばかり。

九

浅き瀬にこそあだ波は立てさ、そんなにきづかつたものではない。暴風雨はやうく風口で、わざとよりかへして怒つたのだから、お重の有めるまでもなく宗平は手を引いた。

「ほんとに何うするか見やあがれ。」

と呟きながら、くるりと横を向いて、火鉢へ煙管を突込んだが、グツグツ雁首でほじりまはして、チヨツと舌打。

「火がねえよ。火が、」

お重は後手で胡蝶の背を二ツ三ツ撫でて置いて、そして膝を立てた。

「いま早附木をあげます。いるんならお火も拵へますがね。ほんとに宗さん、手荒なことをなすつちやあ否ですよ。」

やれ／＼といふ鹽梅で、身を起して背の方へまはつて立つ。

「汝が身から出た錆ぢやあねえか。一分だめしになつたつて、文句はいへめえ。ふんぞりめ。」とじれ切つて熱くなつてゐるのを蚊が意地悪く螫すんだもの。

「え、！ うるせえな。」

唇を捻ぢ曲げて天井を仰いで、宗平は撈るやうに頬邊をがり／＼やつた。

「へい、マッチ、そして蚊が酷いんですから、ちよいと羽織つて入らつしやいよ。」

とお重は氣を利かして背から浴衣を着せると、身悶をして揺り落して、

「此奴のためにやあ、何うせ己あ裸體なんだ、べらぼうめ。」とフテをいふ。

男子斯うなるとお手のもので、お重どん更に驚かず、鼻頭に笑ひながら口では甘やかすやうなことをいふ。

「そんなことをいふもんぢやありません、さあ／＼母様のいふことを聞いて大人になさい。」とまたふはりと羽織らせる。手を突張りながら胸へ垂れて来る袖を兩方見て、

「つまらねえこと、云つてらあ。」といひくうつむいて鼻のさきでマッチを摺つた。お重は再び突伏した切の胡蝶の肩を軽く打つて、

「おいらん、おいらん、ぢやあ無かつた、お君さん、まあ、何時までもさうして居なすつちやあ仕様がありません、蚊がくひますよ、ね、そら、こんなぢやありませんか。」

と何んなに口惜かつたか、此時まで捻上げられたまゝ背に置いて居るお君の手をソツと持つて疊へおろして、よれあがつた袖口を伸して、二の腕を撫でながら、また澁團扇であふいで居る、と胡蝶の本名で、お君は腕をうしろへまはして、細腰を迂り落ちた男帯をする／＼とたくしあげて、其手を胸へ入れたと思ふと、ギウと一占した、片手をついて、清水で玉をあらつたやうな、あかるい顔を斜にして、腕を曲げて横ざまに身を起したが、ものもいはないで、三人とも、人の居ない見當を睨んで一時にひツそり。

しばらくすると、はツといふ歎聲を放つた、お君はバツタリ、今度は亂れた髪の透間から、雪のやうな耳元だけを見せつゝ、また俯向になつた。

お重は持餘した、弱つた風で、

「困るぢやありませんか、おいらん、いえ、お君さん、さあ、さうなすつちやあいけませんよ。」と口を近づけて哺めるやうに云つて賺す。宗平は立續に喫んだ煙草を中絶さして、じろく見

て居たが、さも憎々しいといつた語氣で、

「打ちやつておけえ、ふてやがつて、何うせ、たゞ置く奴ぢやあえ。」

「あれ、だからさ、ね、お君さん、またお怒んなさるぢやありませんか。ほんとに困つちまふ。」とお重は歎つが如くにいつた。同時に膝をついて、衝と起きあがつたお君は、片袖で顔をかくして、紅もちらく見ゆる、あらはになつた乳の下へたぐりためた男帯を手でおさへて、直線に座を横切るのを、あつと見る間に、蚊帳をあげて、屈む、と其まゝ入らうとする。お重は慌しく足を廣げて手をのばして、片袖をグツと持つて、

「おいらん！」

お君は見向きもしないで、涙聲で、ふりもぎるやうに、

「よござんすよ。」といつた顔だけが蚊帳の中。

十

お君のかうした仕打を見て、餘り不意だつたから宗平は氣を抜かれて、眼を睜つたが、烈火の如くに憤つて、米かみをびり／＼さした。

「畜生！ 汝、まだ、そ、そんな。」と躍上つてつかみかゝる。お重は期したことが狼狽へた身

を蹴して、遮つて、

「ま、堪忍して下さい、堪忍して下さい、またおいらんもあんまり、」

「あんまりも何もあつたものか、」と振飛ばす、取附く、勿返す、押退ける、抱きつくで、揉んでる處へ、門口から聲を懸けたものがある。

「兄哥、宗さん、ちよいと。」

「え、」といった宗平は、さすがに人間を氣にして居たから、狂つてる耳にも鋭く聞きつけた。

「誰だい。」

「私でえ、鐵でえ、ちよいと顔をかしておくんさい。」

「何だよ。」と少し落着いて、宗平は帯解廣げの其まゝで下駄を突懸けて戶外へ出たが、戸の前で立ち合つて、何か耳打をしたと思ふと、突然、

「何、橋詰で、そいつあ、」といったがバタ／＼と驅け出した。しばらく置いてまたすた／＼走つたのは今呼出しに來た壯俊である。

「あれ、おいらんお前さんは！」

「何うしよう、お重さん、ちよいと、ちよいと其處まで、」とおど／＼して身もだえするので、抱留めたまゝでお重は框まで引摺られながら、障子につかまつて、踏占めて引戻した。

「いけませんよ、いけませんたらまあ、落着いて入らつしやいよ。あれさしやうがないね、ひどい力だ、まあ、あれさ、あれさ、え、おいらん、お君さん、そんなに世話を焼かすもんぢやありませんよ。」

とぐいと占めて他人肌な、冷かなことをいふ。お君はおろ／＼聲で、

「鼎さんが、ぶたれるんだわ、私や何うしよう。」

といったが、力なくなつて引戻されて、抱れたまゝ下に据ゑられてしまつた。

お重は震へて居るお君の背をさすつて、

「こんなに汗かいてるぢやありませんか。ほんとに宗さんも宗さんだが、皆が何うかして居なされるんだよ。一體、鼎さんが何うなすつたんですえ、え、何だか宗さんのいふことも分らないけれど、逢曳だわなんのツていつて居なすつたが、何ですかい、鼎さんが來なすつたの。」

「はあ、前刻。」と泣顔で居る。お重は著しく眉を顰めて、

「何處へさ。」

「門まで、」といつて歎息した。

「まあ、何うも、まあ寝て居てちつとも知らなかつたこと。そして宗さんに見付かつたんですか。」

「い、え、宗さんが見つけたんですか何うですか、私は何だか夢を見て居て腕車に乗らうとする

と、鼎さんの姿が見えたの、そして吃驚して眼を覺したら路地口へ車が出て行つたやうですから起きて出て戸を開けたの。」

「へえ、さうすると、」

「誰も居なくツて、お月様ばかり。」

「といつてお君はまた溜息した。」

「をかしいぢやありませんか、一體何だらう。」

とお重は眼を睜る。

「それなのに宗さんが、いきなり密通呼はりをして、背後から髻を掴んで、モ、ひどいッたらない、ひどいッたらないよ、人が此んな處に居るかと思つて、二階で居て見るが可や、名代の部屋、名代の部屋なんか、覗いてもやらないから可、亂暴な、人が弱いかと思つて、亂暴な、喜助どんになぐられようと思つて、口惜いねえ！」お君はいつの間にも獨言をいふやうになつて、涙ぐんだ目を瞑つて、下唇を噛んで、り泣をしてうつぶいて居る。

十一

お重のへんてつな長い顔は、お君の後へまはつたり、前へ出たり、脇の下を潜つたり、右瞻左

瞻て、

「何うなすつたんですね、をかしいぢやありませんか。それぢや何ですわ。鼎さんが眞個に門まで来なすつたんだか、お前さんが逢ひたいと思つて居なさるので、そんな氣がさしたんだか、何だか知れたものぢやありません。ですから宗さんが驅出したのが、何も鼎さんの身にかつたこつちやあないだらうではありませんか。お案じなさることはありますまいよ、また可加減な喧嘩なんでせう。」

お君はじれつたさうな頭を掉つて、

「い、え、でも確に腕車が聞えたもの、そして、おまじなひをして居たんだから。」

「でもさ、其が氣の精ですよ。」

「だけど、かうして居てもばら／＼大勢居て鼎さんが取巻かれておいでなのが私あ遠い處に見える様だもの。」と、うるんだ目で四邊を見返る。お重も戸の方を見渡した。

「此間、廊ぢやあアンなことをいつて居なすつたのだから、まだ此四五日はお見えなさる譯はないと思ひますがね。」

「でもアノ七日めでけふ鳥影がさしたツて、さういつたら、お前さん、何かいつてからかつた癖に。」

「そりや景物でさあね。それとも思つた同士で急にまたそりやあね、何だとも限りませんからね。ま、何にしてもお前さんが出なすつちや可かありません。何かいつてるとしても其處へおいらん、お前さんが駆けつけて御覽なさい。それこそ喧嘩に張を以て、どんなことにならうも知れませんが、第一鼎さんのお爲によくございませぬからね、ちよつくら私が行つて容子を見て來ませうから、まあ、お君さん、落着いておいでなさいましょ。」

飛び立つやうにわく／＼して身が震へるほど案じるけれど、いはれて見りやそんなもので、仕方がないから納得して、

「ぢやあ、さうして下さいな、後生だわ。」とお君は顔をあげて、濡れたやうになつて前髪のさきを手で拂つた。

「さうませう、其が可、其が可、」とお重は身繕をして立ちかけて、

「そしてね、おいらん。」

「何。」

「宗さんがあんなに腹を立て居たんだから、歸つたら、まあい、やうに、そんな處をね、私も何しますから、機嫌を取つて下さいよ、ほんとに病犬ですからね、壯俊はついてるし、恐いばかりぢやあないんですから。」

「嫌だ、私、彼な者、日向つくさい、何だらう。私あ女房ぢやああるまいし、鼎さんに自由に逢はれない位なら、何も素人になることツたらなかつたに。」と、また口惜しさうに今度は鬢の毛の亂れたのを指のさきで揉んでお君はじれる。

「そんな氣になつてらつしやるから不可せんよ。酷算段で三十兩も足してくれたんですから、宗さんも何だから、向うはもうおかみさんにしツちまつた氣で居るんですからね、まあ後のことは後のことで、ともかくもねえ、そこが苦界ですわ。」と、つけたらしく笑つたものなり。

「もう苦界ぢやあないぢやあないかね、出ツちまつたんだから、」とお君は憂慮はしい眼で、お重を見て、其心を讀まうとした。お重は濟まして、

「だつてまだ、鎖は切れませぬからね、さう／＼自由になるもんぢやあありませんよ。お前さんを彼處から出さうと思つて、私あ何んな目にあひました。」とあの窪んだ目を凄くした。お君は弱みがあるのであらう、これには何ともいへや爲ないで、憐を乞はうと思つたか、術なささうに莞爾笑つた。

「だつて、逢ひたいわ！」

「困つたお嬢さんだね。」とお重も顔の色を和げつゝ、戶外へ出たが、戸を閉めて行きかけて、フト小戻をして隣の軒下に蹲んでしまつた。

三枚目

十二

結句ごたくした内を出て、お重は獨り隣長屋の軒下に月夜で涼しいから好い心持であらう。誰が何をしようが、何うしようが、美女さへ無事であれば其で結構。今夜のやうすぢやあ突詰めて飛んだことでも仕出されは、とさう思つて、喧嘩も何もあつたもんぢやあない。留女なんざ少い内だ、老人では金子の事と、心に領いて見張をする氣。

一體男の方は廊へ行きたくないと魔が魅すけれど、女郎の方は身脱がしたくになると魔が魅すので、いづれ雙方とも身を過る源ださうな。

で此身脱がしたくなるのは、天窓の上の電燈が眩ゆいといふわけではない、草履が重くつて歩行き悪いからといふわけではない、身體が減て行くからといふわけでもない。客が込合つて、無心がきいて、わがま、が言へて、朋輩が持上げて、新姐がおベツかつて、遣手が莞爾ついで、若い者がお辭儀をして、疊が綺麗で、夏冬の襦袢が箆等に揃つて、廊下を据身であるきながら、手前達の名をかけた總花とかの夥しいのを斜に見る、其凡夫盛なる時に當つてや、身脱がしたい

處の沙汰でない、素人衆はお飯を食べますか、とそんなことを言つて居るのだけれど、天人に五衰あつて一朝ブマになり、お勝手向が亂脈になつて、新造に借が出来、朋輩に不義理が出来、お茶屋が遠ざかつて、客にわがま、いはれて、お茶漬を搔込んで水をのんで、菓子を食べ無常を感じて、雑巾をさして、母様が戀しくなつて、札がひっくりかへつて赤くなると、忽ち出たくなる、出られないと死にたくなる、こゝで魔が魅すわけである。

お君は十六の時、式の如く親のために身を沈めてから、今年が十九の厄で、三年勤めた。

初手からおいらんじみないで座敷は淋しかつたさうだけれど、柔しくつて、容色が好くつて、小柄で、愛嬌があつて、其癖ぐうたらの上方面でない。——氣に張のある、意地のある、思つたことが色に出る。——江戸ッ兒であつたから、だまされる者は少なくつても、可愛がる者は多くあつて、一時全盛を極めて居た。但し其盛な時も、これはまた、珍らしく唯早く素人になりた一心で極めてじみな考であつたので、新造に借は拵らへず、蟲はつかずで、借金も早く崩し込んで、年の明けるのを待つて居たが、今年の正月、深川に居る實の母親が大病で——いまでも煩つて居るのだが——一時危いといつた時から、がらりとなまけてしまつた。客はふり放題、内者にはすね放題。恰も新造が入替つていまだ新しい内だつたから、立入つて意見はせずで、すつかり客を落してしまつて、いづれか秋にあはで果つべき。鼎は其時分から馴染んだので、お君



は札順の殿なのを、鼎に見られるのが恥しいといつて、地踏鞆を踏んであせつたこともあつたんだけれど、もう霜枯になつてたので、も一度もりかへさうと思ふには、揃の半纏でも出さないではと、箆筒に凭れて物案じをするやうになつた處へ、ソレ疊替だ、うつり替だ、と矢と鐵砲が群がるのに、鼎も足が遠退いたは、案ずるに金子の事。いよく用事をつけて宵から寢込むことになる、こゝがお重で、いつも娘のやうに可愛いくといつて居た、お君が一世の浮沈といふので、四宿お構の禁を破り、「ねえ、おいらん、何や彼やで、此灘を越えるには、百と二百がものはツイ要りませう。年期に積つて二年か三年、母上も御病氣なり、鼎さんも呼通すわけにはゆかず、何うせ身の詰ですから此處は一ツ。」と耳打をして、別に矢文を射る客はないのだから、親元身請といふことにした。

十二

さていよく計算といふ場合になると、夜具、箆筒、長火鉢、衣桁から柱時計、悉皆をならべても思つたほどには取つてくれず、内證へ返すのが足りないばかりか、總茶屋だ、小間物屋だ、使屋だ、髮結に拂ふ分まで、居まはりの一時借ばかりでも、小四十圓はあらうといふので、固より賣つたほどの親元だから、請出すほどの資金はない。で、一度は匙を投げたんだが、お重が金策に駆けまはつて、何處を何うして拵へたか、勿論高利も借りたのであるが、此金子のなかに彼の宗平の身の皮剥いた三十圓内外も交つて居た。それからお君があたりつたけの衣類を曲げて、晝夜帯一筋とお召の餘所行が一枚、肌着なしで、他に浴衣を二三枚と、部屋々々から祝つて貰つた深張の蝙蝠傘が一本、櫛一枚、石鹼の三入一箱、浴衣地一反、菓子折が都合五箱と、それだけ持つて、お重と合乗で、人形を一箇抱いて、賣られた時穿いて行つたとき色天鵲絨の緒のたつた表つきの低い駒下駄を穿いて、お重は、なにこんな處は跣足だつて出た方が伶俐だといつたけれど、幸なくならずにしてしまつてあつたから其を穿いて、盆前に洲崎の大門を乗つて出たが、お君は此春雪の中を、遣手につれられて母親に餘所ながら告別にいつた時と、三年の間に前後たゞ二回であつた。

このためにお重までも一枚の半纏をなくしたほどではあり、いざとなると案外で、随分酷い工面だから、末が恐しいといつて、お君は一度二の足を踏んだけれど、「何うしてこんな時思切つたことをしなければ、とても足が抜けるものではない、それにこんな處に居て通はしては、何はおいても鼎さんのためにならぬ、素人になつて御覽なさい、朝から晩まで、くつついて居たつて可のだから、鼎さんに逢へるのだから、」とお重がさういつたので、何にもいはないで、「忘れません、」といつて、とうとう出た。

尤も此度の心配で、二三日はものも食べず、夜もおち／＼寝ず、人には氣兼ねをする、瘦せたといふので、お重はつれて行つてお君を其母に逢はせた時、長煩で寝れ切つて居たけれど、品の好い、母親は、顛巻した枕をあげて、じつとお君を見て、莞爾笑つて、そしてお重を拜んださうだが、其母親といふのも、狭い、穢い、むさくるしい、姉の内に厄介になつて居るのであるから、一緒に寝させて置く分ではないと、さういふわけでお重はこんなに自分の内へお君を引張つて、世話をして居るのである。

あとで聞いてお君は驚いた、宗平には、まるで身を任せるのだと、お重から約束がしてあつた。しかしさういふはなければ金策が出来なかつたとのことで、しかし何でも出ツちまへば可い、自由の身體だから何うでもなる、第一鼎さんのためだといへばお君に無理ではない。で、元來附いておいらんにかういふ入智慧をしたことが知れると、新造たるべきものは何處へもお雇にはならないといふので、祕して居ただけれど、ツイ知れたから、後々のことはともかくも當分お重は勤めに出ることが出来ないといふ。

「だつて構ふものか、あんな家業は私ももうフツ／＼だ。」とお重はいふのだが、そんなら何を家業にするんだか分らない。むかし旗本の御用達、唯今は剃身屋で、十七の年から持つた亭主で、嫁いでる内の情人なる、平田三八君たるや、既に今夜の如き、宗平が泊る時は、餘所へ泊つて内には居らない、豆腐長屋の主人であるから、遊女上を一人抱へて、女房を長火鉢のむかうに坐らして置くといふ御身分ではあるまい。

お重はいづれ内の人三八君と相談づく、米と薪を半分持つために、奉公をしたわけであらうのに、手元へは残さないで、不如意なお君につき込んで、つぎ込んだ上へまた借金をして、銘仙の半纏を失くしたのみならず、手ぶらで引下つたのみならず、本人を内へ置いて、湯へ入れる、髪を結はせる、仕事はさせず、草さう紙をあてがつて、新聞を借りて来て讀ませもすれば、寄席へも遣る。たとひ鰻の天麩羅はたべさせないにしても、油揚は添へてお給仕をする。其癖自分は小遣もまゝならないといふは、何たる算盤の持ちやうでありますか。

お重は、「何、どんな切ない思をして可い、こんな可愛い女を一人拵へたのだから、」とさういつた。親切極つたものである。

このお重のさきに居た新造はかゝる親切なものではなかつた。いつもお君をつかまへては、おいらんといふものは結構なものだ、おもしろいものだ、世の中にこんな氣さくな口すぎはない、陽氣に浮いて入らつしやい、人が、出さうたつて、素人になんかなるもんぢやありませんよ、といひ／＼して、自分もいける口で酔どれの相手の上手な、ざつくばらん女であつたが、お君が素人になりたい／＼といふのと、つまり意氣相投じないで、わきへ出てしまつたが、無理心中と

もいふ、相對づくだともいふ、遺書なしで、男に斬られて亡くなつた其前日、いまついでるお重が僻んでは悪いからと、ソツとお君を呼び出して、久しぶりで顔を見て、壁越に談をして、湯殿の窓から人形を一箇くれていつたさうで、お君はいつまでも其人形を見ちやあ、回向をしてほろりとするが、「あんな氣心の人はしかし末がよくない」とさういつちやあ、素人になりたがつた自分の持説を確める證として、傍らお重の親切に服して居るが。

留女

十四

鼎は肥つて居ないから腕車を覆された特別に何處も怪我はなかつた、身輕に足をついて橋の上へ膝を曲げたが、胸を押へて、其まゝじつとして動かないで居た。

「やい、此奴等、何、何をしやがるんだい。」

と車夫はまくり手の握拳を突出して、胸を屈めながら突込んで取つて返した。橋詰に亂れ合つた一輩の壯俊は、いづれも懷手でずらりと縦横に肩を並べて、何の車夫づれが單身でといふ濟したももの。悠々として落着いて、飛んで懸りさうなのに眼もくれず、笑つたり囁いたり、手ん手に

何か不知呑氣らしい。

車夫は其體を見せられて血が湧くばかり憤つて、

「やい、何うしやがるんだい、磔め！」

身構をして詰め寄ると、うるさい！ といつた形で、中の一人が横眼に見た。

「若い衆さん、かう、お前の提灯にやあ赤坂と書いてあつたぜ。」

「何だと！ 赤坂と書いてありや何うしたんだ。」

また談話をして居た別なのが一寸句切つて、

「此處あお前何處だと思つてるんだ。」

「山の手のもゝんがあ、江戸へ来るにやあ手水でもつかつて来い。」

「御大層なことをいはあ。」といつたばかりで込上げるからものはいへない。對手は強さうだし唯あせる。

「引込んで居なさい、若い衆さん、お前にやあ用はないのだから、何も好んで痛い目を見ることあねえ。」

「用がないツたツて、やい、此、此腕車何うしてくれるんだい！」

「何うするたつて起して曳いて行きやあ可いぢやねえか。」

「それとも損じたら接骨へでも昇ぎ込むか、」
 「其處は御勝手さ。」といった切、自分達でまた何かいひあつて笑つて居る。
 「たゞぢやあ濟まされねえぞ、此奴等此ま、黙つちやあ、山の手の名折だ。」と力を入れるばかりでうつかりとは手出もならぬから徒に車夫はもかく。

「堪忍しなよ、は、は、は、は。」

「あやまつたら可いぢやねえか。」

「お容しなされて下されませだ。は、は、は、は。」と茶かし切るので、底氣味が悪くなり、とても力づくではと思ふんだけれど、黙つちやあ退かれないので、形容ばかり、また一ツ二ツいふと、忽然一喝して、

「愚圖々々いふとはり飛ばすぞ！」と恐しい聲で、胸の赤いのがすつと出た。ぎよつとして、さらぬだに勢は抜ける、氣は怯けるで二の足を踏んで浮の空で居た車夫は、吃驚して後退をして、すつと離れながら、

「ほんとに亂暴な人達だ。」と老人じみたことをくどくどいつてゐるが、それも口の中に消えてしまつて、ひよこなんと立つた。壯俊の一人は群を離れて前へ出て、此時までうしろ向いて立つて居た、鼎の背後にまはつて、とがつかつた聲で、

「おい、前刻路地口へ引込んだのは手前だらう。」と肩のすれ合ふばかりにひつたり寄添ふ。

「其奴だとも、」と矢聲をかけて、また一人つと来て鼎の面前に立つた。

や、蒼味を帯びて毛一筋動かない、鼎のうつくしい顔を月にすかして、

「此顔あ忘れて堪るもんか。」

と引挾んだ時、橋の袂に居る一輩盡く立なほつて、齊しく此方へ眼を注いだ。

「車夫をおさへてろ、交番へかけたされると面倒だからな。」とさういひながら胸赤は動き出して、斜めに身を挺して鼎の傍に立ちはだかる。此時川岸を縫つて白地の浴衣を翻して、駆けつゝ近づいたのは宗平である。月は天に高く、夜露で水を打つたやう。

十五

「何奴だ、其奴か、む、む、此奴だな。」と、群つてる壯俊の間を抜けて、宗平は立寄りもせず駆けついた其足でじり〜と詰寄つた。

「む、宗さん、お前の寝てる處を立聞して居やがつたんだぜ。」

「小盗賊ぢやあねえか。」

「人様の鼻ツさきに腕車の輪を押つけやあがつて、何だ額にぶツかりさうにしやがつた、山猿め、

何處の國の風船から落ッこちたんだ。此方人等の地内を何だと思つてあがるだらう。」と立はだかつた胸赤は肩を怒らす。傍からまた宗平に薪を添へて、

「宗さん黙つちあ居られめいぜ。」

「知れたこつたい。」と宗平は叱るやうにこたへて眼を怒らした。

「小僧、何しに來た。」

鼎は下眼で自分の帶のあたりを見ながら手を垂れて、身體を細く足を踏占めたまゝ黙つて居る。胸赤は腰を屈めて覗くやうにして、

「宗さん、顔を見ねえ、これだあ、」と嘲つて、いきなり鼎の頤の下へ握拳を突込んでぐいと上げると、扇を固めた手が思はず動いたけれど、胸のあたりへ堪へてしまつた。鼎の顔は月をあびて、蒼味を帯びて、漆黒な額髪は露にしめつてぬれてるやうで、毗の釣つた眼を眠つてじつとして動かないのを、宗平はキツと視詰めたが、腫の据わつた眼中にはいふべからざる嫉妬怨毒の色が満ちて居た。

「何とかいはんか!」とあらゝかにいつて宗平は足踏をする。

鼎はそれでもいはなかつた。

「私にも顔を見せねえ。」と背後に居た壯俊は、矢庭に鼎の耳朶を掴んで、ちぎれるばかりぐいと

引いた。絲のやうに閉ぢて居ながら、毗のキリ／＼と動いてた鼎の眉は逆つたが、耳を引かれたから胸を仰向けに倒れかゝつて、背後の壯俊に恚れかゝつたと見る時、片手で急に拵放して、片手の扇で頤を押上げて彼の胸赤の握拳を十分にたゞき拂つた。

「あ、痛。」と怯む胸赤の前にきつと立つて、

「お前達は、何だ、」といつた、鼎は唯單に一個、美少年の風采ではない。

「其口でものをいへ、手前、己ン處へ何しに來たんだい。」と宗平は詰り問ふ。鼎はそれでも黙つて居た、其二の腕へ磔とあたつて、ばらりと散つたのは、誰かが蟻鼓を投げたので、このトタンに背後からどんと一人突當ると、前へのめらうとする、手を攔んで、

「來い!」とばかりに宗平は力まかせに手元引いた。鼎は浮足で引付けられて、帯も占めない宗平の毛だらけの乳のあたりへびつたり顔を押し付けられた、其頸へ腕をかけてまた、手を攔んで、

「來い! さあ、來い。手前、内へ來たなあ用があつて來たんだらう。大道ぢやあ話が出来ねえから、來い! 來いといふに。」

またする／＼と引立てられて、鼎の身體が前に動くと、壯俊の先輩は動搖をつくつてぞろりと取巻く。夕顔に蟻がたかつたやうで。哄となだれる橋の上に鼎が手籠にされようとするためにうつされた多人數の月の影を見て、あれよといふのでサクク下駄を脱いで爪先を揃へて、裳を取つ

て袖をか、けて、前へ出て、汐見橋の北の詰にて、きつと見構へた婦人がある。

十六

鼎は宗平の嫉妬の力に抵抗し得ないで、橋板五六尺向うへしやくらゝれてする／＼と引かれたが、たとひ色は白くつても、身體は肥えて居ないでも、眼は清しくつても、唇が紅くつても、血氣の少年である。眼が逆釣つて、肩が動いて、下唇を噛んだ憤餘の氣勢、再び扇で宗平の手を拂ひのけた。トばつたり分れて、橋の南北へ、ひっくりかへつた腕車を横に、彌次馬を前後にして、一尺とは間を置かず、手首を痛むでおもはず手を放した、宗平とむかひあつて、二人はきつと眼を見合つた。眼は血走つて色は蒼ざめ、唇の色はあせて戦いたが、殺氣を帯びて轟立すると、壯俊等はどよみを造つて哄となだれたが、一度静まつて扣へてしまふ。

橋の上は森として瀬のない川に月影がゆるゝにつれて、岸につないだ、船はだぶり／＼、左右へ傾いちやあうねつて居る。洲崎の電燈で西をかぎり、八幡の森で北をかぎり、火の見櫓で南をかぎつて、船の舳で東を限つた、この一圓の橋の上、やゝうすれて行く星の下で、十二時をすぎた静かな月夜に、ありのまゝを、婦人はじつとすかして居たが、何と思つたのか莞爾して、忘れたやうに、引上げた襟を落すと下前がかさなつてきり／＼と揃ふ。うつむいて足を見て、懐へ手を

入れたが、小さく疊んだ手拭を出して、擴げて、持直して片足をぐいとあげ、砂まぶれになつたのをはた／＼と拂いて、うしろを振り向くと吾妻下駄が揃へて脱いである。まづ穿いて、欄干に身を横へて、つかまつてまた砂を拂いて、それから手拭をふるつて其まゝ手に持つて、少し仰向いたが、雪のやうな咽喉に結目房さりとした六つき簞笥位な鬱金木綿の風呂敷包を背負つて居る、結目を弛め、ゆり直して、喧嘩の方へ向直つたが、すらく／＼として柳のやう、風にも靡さうにイんだ。脊の高い女で、鬚は根の上つた丸鬚。鬚の毛一筋亂して居ない、眼がぱつちりして鼻筋の通つた、色の白い細面で、頤のしまつたちとケンな顔で、眉はうつくしく剃つて居る。生際がすこしぬけあがつて、耳の色はすきとほるやうな、垢の抜けた、年紀は卅八九で、其すきとほるやうな左の耳に水筆で點を打つたほどのな、眞黒な星のある小間物屋だといつたら、凡そ大橋を渡つて深川の女に志すほどのもので其だと、領かないものはあるまい。富岡門前の裏長屋に小猫一つ居ないまつたくの一人ぐらして、沖津といふ女である。店を開いて商賣をして居るのではない。包を背負つてあるく、行商で、櫛、筭、天窓のもの一式、化粧品、囊物の類、上包に辻占を紅で書いた巻紙など洲崎ばかりで商をする。年の賣上高一千圓。この所得税一兩二分をキチンと納めて、こゝへ來てから五年越で、男がなくつて、獨者で、素性の分らない女だけれど、橋詰の交番でも決して渠は疑はないで戸籍しらべの帳面にもちつともかはりはないといふが、誰でも一見し

て其だと思ふ、推測とは大いに異つて、沖津は口敷を多くきかない、また柄になく實體で、酒はのまず、賭博はうたず、三味線は弾かず、唄はうたはず、朝早く家を出ると、直に洲崎へ行つていつでもお晝は峰八幡といふお茶屋で済まして、晩方歸つて来ると宵の口から直に戸をしめるのが例であつた。だから今夜のやうにかう晩く歸ることはないのだけれど、洲崎で胡蝶が居た樓でも、鼎を送り込んで居た峰八幡でも、鼎の顔に瓜二ツだと評判した沖津が此處へ來合はせたのは、何かの縁があつたらう。

勿釣瓶

十七

「をばさん、瘡のおまじなひに蚊帳を着せると可いッていふが眞個よ。」

井戸側に来て立停まつた、沖津は紺の單衣に繻子の帯、昨夜のまゝで朝戸出のほつれ髮黄楊の櫛で藍の入つた手拭を提げて居る。朝の七時前で、井戸の際が裏口になつて清元の師匠の内はぴつたり閉つて、横窓にかけた簾の前に釣るした水色に蝶を散らした岐阜提灯があけたの日蔭に褪せて白ずんで窓の竹格子の中に動きもしない。あたり一面に露でしめつて、師匠の家と合角の材木屋の戸にかけた巨大なる十五六本の材木が軒にかさなつてすつくり屋根の上へ聳えて居る、其上の方に白色の天が見えるばかり、狭ツくるしい路地で、井戸側に米を磨いで居た婆さんは、赤ッちやけた皺だらけの、面の筋を弛めながら、でつかい口をあけて白い齒を出して眼ざめるやうな沖津の洗つた顔を仰いで見た。

「はい、さうでございますよ、感きますとも。まだね、摺鉢を天窓へ被せて、底の眞中へ灸を据ゑるのもございますがね。」

「それぢやあ翼が生えて飛びやしませんか。」と微笑んだ。婆さんも打笑ひ、

「大きに左様でございます。何ですか、誰方ぞ、」

「はあ、と、さつそくに軽く受けて、沖津は自から頷くやうにいつた。

「昨夜の可愛いのがね。」

「おや！ 瘡で、それぢやあ、何ですけれど、いつになく晩いお歸宅でございましたから、また、」

「何うも御迷惑をかけまして済みません、構はないで寝て下すつたら可かつたのに。」

「いゝえ、いゝえ何、何ういたしまして、そんなことは可うございますけれども、何かお連様だと思ひましたがね、あなたの肩にお縫んなすつて、眞蒼でよろ／＼して入らつしやいましたので、其に何だかお召物も損じてをりましたやうでございますもの。何處の若様だか、御病氣ぢやあな

「申戯ぢやないわ、眞個に、あの位な忤が一人欲しいもんだね。」
 「飛んだことを。」
 「いゝえ、あの方が十九だといふから私が八の時に出来た兒さ、ちつとも不思議なことツてありやしないよ、でもお前うそこもからかつて見る氣になるのかね。」
 と沖津は何うしたのか、これをば眞面目になつて聞いた。婆さんはやゝたじろいで、
 「へえゝ、それぢやあ、ではないのでございますかい。」むつと口を塞いで頬張つたやうな顔色をする。

十八

「まつたくでございます、と深く頷いた。」
 「何がまつたくさ、ほゝゝゝ、をばさん、こんなおばあさんだから、私、孫のやうに見えるだらう。」
 「いゝえ、弟御様のやうでしたよ。」
 「おや、をばさん、ちと嫉けるんですか。」
 「何ういたして、壽命の毒でございます。」

いだらうか、姉さんお一人でお手が足るまい、お困りぢやあなからうかつて、角の師匠もちらりとお見懸け申したさうでお案じ申しましてね、あの人も親切ですよ。わざ／＼起きて出て寢衣のまゝでね、私と二人お内の前へ立つてましたつけがね、存じの外お静だし、夜更ではございますなり、うっかりお見舞にあがりますものとさう申してね、其まゝで内へ入つたんですが、お使でもあつてお呼びなすつたらと、氣を付けてをりましたよ。はい、さやうでございましたか。」
 「何うも御親切、お氣の毒でなりません。」
 「何のあなた、そしてお歩行でございましたかい。」
 「なにね、葉茶屋の處まで腕車に乗つて來たんだよ。私がついてさ、もうあの時分になつちやあ不自由ね。」
 「お合乗だと可かつたでございますませうのに。」
 といくつになつたか不知、元氣のいゝことを云ふこつた。
 「何だつて？」と笑つて問返した。
 「はゝゝゝ、はゝゝゝ」と高聲で、婆さんは指についた米を落して、
 「ぢやあ葉茶屋の前から」とわけもないことをいつて置く。沖津は眞に受けて、
 「其邊がね、をばさん、何となく。」

「馬鹿にしないねえ。」と沖津は投げやつたやうにいつて、バツタリつつか、つて井戸端に両手を
ついた。井の底にちやぶくといふ水の音がする。沖津は何となくのぞいて見た。婆さんは米を、
ざざ、ざざ、ざざりりとやる。沖津はやがて思出したやうに、

「をばさん、もうあの子子の殻は上りませんか。」

「お天気つゞきですつかり澄みました。」

「どれ。」といつて芻釣瓶の竹を握つて、どぶんと突いたのを取つてあげると、米磨桶へ水晶のや
うなのが一幅になつて上から注いだ。つめたい風が面を打つた。

「一杯あげませうよ。」

婆さんはびつくり身を退いて、變な手附でじつと見て、

「こりや、こりや、何うも、あなた何うなすつたんでございます。これは、」といつて不思議さう
にまた桶にあふれるばかりの水を見た。

「些少ばかりお禮の氣さ。」と沖津は立直つて靜かに手拭で手を拭いて居る。

「はい、何うも此御飯はこりやこげますね。」

「御迷惑なの。」

「いえ、おだいじになさいまし。ちよいと唯暗い路地でお色艶の悪い處をばかりお見上げ申しま
したんでございますけれども、何うも、品のい、つたらない、立派な若様でございしますが、何
だかお弱々しさうですから、何そりや瘡なら知れてますけれど、また。」

「あ、大變苦むから、心配だつたよ。あの後がひどいさ。お前、内に入つて床を敷いて寝か
してあげると、悪寒はやんだやうで、こん度は酷い熱でね、足をばたくやつて、もうあつちこ
つちへ寝返つちやあ、身體の置場がないやうに惱むのなもの。私やもう世間があると思つて我慢
はしたが、あ、く、兒だつたらな、」

沖津は乳の上へ手をあげて両手で胸を押した。

「私あ衣服を脱いでこの身體に水を浴びて、冷たくして、シツカリ抱いて、抱いて、抱占めて介
抱して遣りたかつたよ。」

「まあ、」

「だつて、苦むんだもの可哀相で見て居られやしない、一思にとさう思つて、ほんとにじれつた
かつた。」

と莞爾する。婆さんはどぎまぎする體を示して、

「これは、ハヤ、何うも、何と、御挨拶を申上げて宜しいことやら。」と手をつかねて茫然たりで
居る。

「おかまひなく、何うぞおとぎなさい。」
 「はい、おかまひなく、何うぞ抱ッこをなさい。」
 「何故さうだらう、おまへは、年寄の癖に何でもいふことに色氣があつていけないよ。何も母様が小兒の介抱する分には、抱いたつて、吸つたつて、可いぢやないかね。」
 「だつて、あなた、たとひほんとの兒だつたつて、十八九にもなつたものを、母様が抱かれますか、尤も婆さんには茶吞朋達、孀には養子といふ名にしたのもございますけれどね、まさかあなただつて、ほんとの兒ならばなほのこと、何うして乳だつてのまされますか。」
 「私は平氣さ。」

十九

「そんなら一層のこと、何もそんな苦しい御趣向をなさらなくつたつて、誰に御遠慮をなさいますものか。角の師匠だつて何時でも姉さんにお一方あれば可い、一寸々々内證で教はりにあがつても、窮屈で、氣が詰つて、ほんとに横すわりも出来やしない。何うもいくら苦勞人でいらつしやつても、道樂もしない方は何だかケンがあつて、叱られさうで、恐いやうだ、困る困るつて、さう申して居るのでございますよ。い、え、私はじめお長屋中で、是非お一方とね、寄ると觸るといふのでございますもの、男狂をなさらなくて困るつていはれるのは、あなたばかり、是非、あいよといふ寸法になすつたら宜しうございませう。何ならば私が孫を意見する氣で、あの若様に申ませうか。なまなか忤たの、何のといふことになりますと、物騒でございますから。」
 と婆さん雀屋もやるのなさうで、沖津は判然といつた。

「其は否さ。」

「いけませんか。」

「お断り申しますね。」

「ま、何故でございます。」

「いけない譯があるんだもの。」とちと思はせぶりて居る。

「へえつ、何ういふ譯でございますね。」

「其はいはれない。をばさん、驕らないぢやあ。」

「何つちが御馳走します。私かね。」

「あゝ。」と合點々々をした。

「途方もない、しかし不可せんか。」

「駄目だよ。」と沖津はまた破顔した。婆さんは故とむくれて見せて、

「御勝手になさいまし、何も斷つてとは申しません。」

「そんなことはいはないで、をばさん、ものは相談だがね、何うだらう。」

「それ御覽なさい、年寄のいふことに外れツコがあるものですか。だから言はないこッちやありません。可うございませとも、何、すぐ嬉がらせてしまひませう。しかしお若うございませから何てツてお呼びなさいませね、旦那、變てこだ。モシ若旦那、をかしくないこと。」

「何、わけありやしないよ、チヨイと忤や——と斯うだ。」

「人、おもしろくもない。」と婆さんはまたむくれる。沖津は手をあげて、

「あれさ、何だつて気が早いね、何も相談ツたのは、そんなことではないのだから。何うだらうそんないやらしいことなしにして、息子にして抱いたら悪いだらうか、世間で何んとかいふだらうか。」

「まだあんなことを云つていらつしやるよ。」

「眞個だよ。をばさん。」

「そりやいけませんね。」

「何、ちよいとさ、たつた一度で可いのだから、まあさ後生して下さいな。」と、わざとであらう、然も思込んだ體である。

婆さんもうるさげなく取合つて、

「まづ、いけません、そんなことお話になるものでございませうか。」

「何卒一ツ因業をいはないで、ちよいとだから大目に見てくれないかね、私あ可愛い人形を抱いた氣で居ようからさ。」

「人形が動きますか。」

「動くよ、手も足もふらく動くだらうぢやあないかね。」

「いろんなこといつて、あなた、人形がものをいひますかい。」

「さうね、それぢやあものをいふ人形だと思つて我慢をしよう、何うだね。」

「駄目でございます。」

「あきらめて、人形だと思ふといふのに。」

「いけませんよ。」

「何うしてもか。」沖津は眞らしく歎息した。婆さんも思はず釣込まれて、

「も、そんなに御執心でございませうか。」

「あ、あんなのが母様といつて抱かれてくれりや、世間で黙つて抱かせてくれりや、も一度抱きや死でも可いわ。」と沖津は身に染みたやうにしみぐいつた。顔は淋しかった。

が、忽ち忘れたやうに笑つてしまつた。

「申戯だよ、まつたく、年寄をつかまへてさ、御免なさい。ほ、ほ、ほ。」

「誰があなた。ですけれども、何だかしんみりお氣の毒なやうになつたぢやございませんか。それとなく承つてをりますが、あなたもお兒様があるんですつて、何故一所におなりなさいませんか、そんなことは知りませんが、夜分お歸りなすつちやあお火鉢のむかうで、あのお氣に入りの人形を抱いて、うつむいて、考へて、唯だお一人で淋しさうにしていらつしやる時は、氣の故か、あかりも光がないやうに見えて、お可愛相でございませぬもの。何、構ひますものか、それこそ、裸身になつても抱きなさいまし、何、人何といひましたつて。」

といひかけて婆さんは身を起して腰をのした。沖津はまた井戸の縁へつかまつた。横顔が寢覺の故か寝れて見える。

「をばさん堪忍しておくれ。全く昨夜は堪らなかつたの。」危ない抜けさうな櫛をおさへていつて、がつくりうつむいた。

「ぢやあ何、おまじなひの蚊帳なんか、お着せ申しなさらないで、さうしておあげなされば可う

ございますのに。人が何かいふもいはないも、第一あなた、見てるものはないぢやあございませんか。」

「なんのツていふけれど、をばさん、門に立つてたといまおいぢやあないか。年甲斐もないね、罪だよ、お前。」といひながら、うつくしい唇を襟にかくして齒を見せないで居る。

「やれ、折角お案じ申して居りや、もう飛だこつた。これは、長生をすると、いろんな目にあひますよ、はい。」とぐつとあをむいてお天氣を見る。

沖津は顔をあげて、キツと唇をしめた。

「申戯だわ、をばさん、ねえ。私あ些少も構はないけれども、何うしてさきは生先の長い方だ。

か、りあつた場所が悪かつたから、いづれ家でも分つてちつとでも噂をする引か、りが出来ちやあ悪いと思つたから、其でね、私の家へ連れて来るのに、わざとね、車夫は葉茶屋の前から歸してしまつたやうなわけだね、ありや、をばさん、何のよ、それ何時かも談したつてが、洲崎の、あ私の大好な可愛いおいらんのあれさ、婆さんは初耳ではないらしく、さもあらむといふ顔色だつた。

「なるほどさうでございませぬか。御道理なこつた。何か首ツたださうで、」
「兩方とも！」

「世話はございませぬね、何も若い内でございます。」

「だからさ、困るんだね。昨夜は何だつて、おいらんが洲崎を出てから、はじめて逢ひに行つたんださうだ。其がね何でもまだいろ／＼都合があつて、多時逢はないつもりだつたさうだけれど、をばさん私ん處のお客がね、久しく瘡を煩つて、昨夜はじめて戶外へ出たんだつて、歸宅が晩くなつて、病あがりだから、ちつと單衣もの一枚ぢやお寒氣がしたさうさ、おいらんに寝んね子を着せて貰はうと思つたんだつてね、其が因で飛んだ事さ。」

「おや、ま、内へお歸りなされば、親御様がありませうのに、不孝なこつた。」と婆さんは、罵りながら頷いた。

「其處が難有い處ぢやあないか。結構なこつたね、をばさん。」

「何が結構なものでございます。こんな母様ぢやあ心細いこつたよ。」

「いゝえ、私なんざまつたくよ。衣ものだ、家だ、お金子だ、芝居だつて、皆な人様の前で見得をするんぢやあないかね。自分にやあ何にもならない。ほんとに生命も入らないといふはいろの事だもの。」と、沖津は井戸側の圓の三分の一をぐるりとまはる。

二十一

「むす子に女が出来りや、其ために働きますね、せつせと達引くわ。娼妓だつて、藝妓だつて、何だつてかまやあしない。好た同士一所にして好服装をさせてさ、苦勞をさせないで、座蒲團の上へならべて坐らせて、私あ傍の方で一服のみながら見て居ますね。」

「そして二人で莞爾々々して居られぢやあ憎いではございませぬかい。」

「さうさね、あんまり澄ましたら、眞中へ人形を投出してやらうか。」

「へえ。」

「さうしたら笑ふだらうから。」

「あなたも他愛のないことをいつていらつしやるよ。」と婆さんは一切心得たやうなものいひである。沖津の方は熱心に、

「あら眞個だわ、何んなに楽しみだらう、お腹が空いた時分にやあ、何か見繕ひますね。ちよいと三品ばかりで、いける口なら一銚子添へるかね、で、お給仕をするさ、嘸睦じいことだらう。」とものおもふ状していつた。

「もうさうなるとお家は退轉だ。」

「勿論、二進も三進も行かなくなりや、其處は思ひ合つたなかだもの、いづれ心中をするだらうさ。さうすりや一所に葬つて墓の前へ女郎花を少し植ゑるね、塵一ツ葉ないのにあか桶の新らし

「あ、黄粉ぢやいけけない。」とますく躍る。
 「弱つたね。」
 「何ぞ御用でございますか。」と、けろりとして眞面目になつて、すつと傍へ寄つて、まるで忘れたやうだ。
 「あ、一寸ね、入舟町まで、」
 「唯今直ぐでございますか。」
 「い、え、も些少経つてからが可いだらう。」と沖津は懐から手紙を出した。
 「はい、と取りにかゝると、上下を持合つて、手紙の上書を二人でうつつむいて見た。
 「ね、此處さ、それ。いまいつた遊女が居る、新造の内だ。」
 「何でございますね。」
 「一ツ呼出して、介抱をさして遣らうと思ふの。」
 「それぢやあいよくおやんなさるね。」
 「あ、いまいつた通、思入嬉しからせてやらうと思つてね。」
 「だつて、あなたが何うも傍についておいでなすつちやあ、おちく話も出来すまい。」
 「仕方がないや、邪魔にしたら、をばさん、私、お前ン家へでも遁げて居ようか。」

いので、其女郎花が少しさ、薄月の晩でも参詣して御覽な、私あ尼になつてつきまつて居るよ。」
 婆さんは刎釣瓶の棹をどんと向うへ押し、桶を抱へてしまつた。
 「何うも飛だ難有いお聴聞をうかゞひまして、こりや、死だらば迷ひませう。あ、罪なこつた。
 南無阿彌陀。」と濟ましてツンとして行かうとする。沖津はあでやかに微笑んだ。
 「お待よ、ちよいと待つて下さいよ。あらま、實は些少後生して貰ひたいことがあるからさ。」
 「もう、よしませうよ。また抱いて寝たい一件でございませう。黄粉ぢやいけけない、小豆でくれろ。」と下駄を穿いた足をあげたり、下げたり、小桶を抱へたまゝで溝板をがた／＼やる。
 「何さ、そりや。」
 「いろぢやあいけけない、悴で抱かう。あ、黄粉ぢやいけけない、小豆でくれろ。」と節。
 「おや、おや。」
 「いえ、一寸一度でい、からさ、人形を抱いたと思つて我慢をいたしませう。いえさ、ものをいふ人形だと思ふからさ。」
 「何うしたね、をばさん。」
 「あ、黄粉ぢやいけけない、小豆でくれろ。」と片手を泳ぐやうなふりで婆さんは躍り出した。
 「おや／＼。」

「生命にかけて、」

「え！」

婆さん頸を叩いた。「おかくまひ申しませう。」
「馬鹿だね。」

たの字

二十二

「しかし何でございますか、あなた、此手紙を持って参れば用は辨じますかね。新造の内に娼妓が寝て居ると来ちあ、餘所の内とは違ひますからね、まるで見當がつかなくって、様子が分りませんが、何うでございませう。其邊のかけひきつてやうな、伺つて置くことはございませんか。棒を出したやうに手紙を突出してひよつとまた私の粗忽になりますと悪うございませう。」

沖津は其注意を喜んだ色あつて、

「あるとも、そりや大ありだけれど、構やしない。彼の妓についてるのは宗平だもの。あの、船頭のさ。」

「なるほど。それぢやあ、あなたにはぐウの音も出ませんね。」と婆さんは安んじた様である。

「だけど新造が居るからね、ま、ちよいとしたつて知れた事だ、いづれ食物にする氣だらうから、二ツ三ツは言句があらうけれど、手紙にも書いて置いた、お前も立派に口を利いておくれ。沖津がいひました、お君さんを貸して下さい、決して御損はかけないから。」

「はい、決して御損はかけないから。」

「さういつておくれ、大丈夫だよ。」

「いえ、そりやもう二言とは申しますまいが、また面倒なおか、りあひにでもなりませんかね。」

「ちつともかまはないよ。」

「大變肌をお入れなすつた。よッほどお氣に入つたと見えて。」

「其黄粉ぢやあいけないだらう、ほ、ほ、ほ。」

「大きに。しかし、あなたえ。」

「何だい。」

「案じられますね。達引は可うございませうが、却つて罪をお造りなさりやしまいかと思つて。」

「何故、をばさん。」

婆さんはおちついて、

「近い處が、でございますね、」と少し考へた。

「一體あの若様はありや何處の、ま誰方なんでございます。」

「鼎さんとかいふさうさ。一二度おいらんの部屋で見かけたばかりで、別に話しをしたこともなかつたが、何だか可愛くツてく夢の間も忘れないで居ただけけれども、何處の方だか些少も知らずさ。」

「へえ、御存じない！」

「だつてもね、第一あのおいらんが知らないぢやあないか。まだ馴じんでから手紙一本出したことがないといふもの、何うしてもいはないツさ。それでもこたへがあつて、確に見處をつけたさうで、夢中になつて騒いでるわ、そんな人さへあるぢやあないかね。」

「そりやまあ其で可うございますが、いづれ其位で、そしてお見懸け申した處では御身分が可いやうに見えますがね、こゝを申すのでございますよ。近い處が、其遊女の方ですがね。あつちを出てからがハヤ、他に、そりや内證ではありませうが、仕方なしにだつて宗平といふのがついてをりませう。考へて見りや、カラ婦人が無茶苦茶になつた身體でございませう。世間ぢやあ、若い人の出戻りでさへ嫌ひますのに、身體を切つて賣つてる人ぢやあ、何うでございませう。若い時はたゞワツとおもしろいので、後前の考へがなくて好うございませうけれども、身體あ汚れて

る上、人に挨拶ツたら、「は、入らつしやい」とあをむいていふものだと思つてゐるものを、何うしてあなた、末遂げられるのですか。」

沖津は瞳をためて、睨むで婆さんの顔をキツと見た、井戸流に立つた、立つた身體がしまつて、稜々とした趣である。婆さんは些少も氣が付かないで、

「ちつとでも深くなりますと、あとが泣になるなあ知れてをりますからね、殊にまたいまぢや賣物買物といふんぢやありませんから、うっかり手を出すのは無分別でございますよ。お年も少し出世前のお身體でございませうから、御身分に……」といひかけた。沖津は聞いてる内に著しく顔の色がかはつて、得堪へない苦痛を感じた狀で、胸を抱いて震へたが、額には、筋が見えた。鋭く突込んで、

「分つてるよ、をばさん、お前も江戸でないことをいふ人だね。そんなことあ山の手のお臺所か、ふむ、問屋の隠居所でいふこつたな、惚れあつた奴が逢曳をするのに親も何も入つたものか。世間も何もありませんやね。毛の生えた團子のやうに固くなつた素人の女あ、小生意氣に何の人、おもしろくもない。嫁てえことあ昔から、さらに御用はございませんか、年頃になりましたつて門並聞いてあるいて、間の抜けた處へおつばめるんだ。仕入ものの店ざらして押賣よ。酒屋の御用と大した違はありやしない、暗争と云た様に手さぐりの趣があるわ。盲づかみにぶつかつた處

で、嫁だ、お婿様だ、胡瓜と南瓜のはち合せぢやあないか、氣の利かない骨頂だあね。お互に好いつ好かれつさ、思ひ合つた同士なら媚妓だつて何うしました。すきで身體を削るんぢやあるまいし、寸白のおまじなひに汚水をのむんぢやあないわね。をばさん、仕方がないからだ、腹散々玩弄にされて、なぐさまれた、それで、身體が汚れてる、出世の邪魔になる、灰吹だ、汚えなんて、素人の知らない苦界の中で、水責火責にあつた上で、世の中からすてものにされちやあ、」
沖津の唇がふるへて居た。眦をあげて、胸をしめて、

「こんな、そんな、間尺に合はないことツたらありやあしないよ。をばさん、おいらんが氣に入らなきあ、お天道様にさういふさ、私等の知つたこつちやあないのだから。」

「……………」婆さんは眼ばかりまじくだつた。

「と、まあ、いつたやうなものさ。」と、沖津は色を直して切なさうに笑つて見せたが、肩でいきをつけて居る。動悸の音も聞えたらう、氣を静めて見れば一通の激しやうではなかつたもの。優しい聲で、

「ね、をばさん、だから後生しておくれ、可いぢやあないか。」

婆さんはこれには答へないで、後ずさりをしたが、忘れたやうに、持つて居たさツきの手紙をちよいと押戴いて懐中に入れたと思ふと、胸をはつて足をあげて、

「あ、黄粉ぢやあいけけない。」と、とん／＼と足拍子で水を切るやうにばツさりと手を掉つた。

「驚いた。」

「あら、小豆でくれろ、黄粉ぢやいけけない、どツこい。」と踏返つて、矢張小桶は抱へて居る。

「あ、黄粉ぢやいけけない小豆でくれろ。」

と莞爾笑もしないで、ばさりとんと躍る時、師匠の家で裏口を通る音がして、ばつたり厨の戸のあいた時、にほひやかなる人の氣勢がした。正氣づいたやうに婆さんはしやんとなつて、

「あら／＼お眼覺だ、」といつて呵々と大笑する。同時に沖津も見返つて、清しい調子で戸の内を呼んだ。

「たの字！」

「は、姉さん。」と、姿は見えないで、婀娜たる聲なり。

「昨晚は。」といつたきり沖津は身を返した。

「をばさんそれぢやあ。」

「はい。」と頷くを見て其ま、ずつと放れる、ト背後の方で、

「何ね、御案じなさることはないのてございますつて。」
返事がなくツてさら／＼といふ裳の音、

「起きないかよ、三や、おひるだよ。」と眠むさうだった。

後 姿

二十三

結立の低島田露の垂りさうなのに籠甲の櫛。笄はなしで、白と黒とを矢がすりのお召縮緬の單衣を素肌に着て、黒緇子と獨鉦入お納戸色の博多とを打合せの帯、これをお太鼓に高く結んで、平打の帯占で、小造の後姿、些少うつむいたなりの襟白粉、透通つた鬢の毛が映りさうだ。胸へ兩袖を合はせた下へしをらしく、人形を抱いたまゝ、駒下駄の低いので、前さがりになつた氣味の裳を捌きながら、水色縮緬の蹴出し素足に搦んで身輕に腕車から下りる、と傍目もふらないで、いそぐと、富岡門前町のトある材木屋と清元の師匠の合角の路地の薄暗いなかへ入つて、暗まぎれになつたが、中ごろ岐阜提灯のあかりがぱつとさしたなかへ、蒼すんだ色で水を浴びたやうになつて光つて見えたと思ふと、駒下駄の音が留んで消えてしまつた。ちやうど其日の灯頃のこ

とである。

百 夜 通

二十四

「はじめつからをかしいと、私たちは思ひましたね、年紀あい、年紀だけれど、あれでね、お君さん、見なざる通まだ水々しくツて、ちよいと眉でも引かうもんなら、何うして澤山はない、滅法界な年増だもの。何でも藝妓か、こんなこといつちやああなたの前だけれど遊女あがりともいひたいやうな、凄いんですから、腕はよし、お前さん、自由は利く、其上對手はと云ふと彼のおとなしいのでございますもの、沖津さんに口説かれましたね。きつとさうでございますよ。わけはありやしませんせ、「坊や」かなんかで、お前さん、膝の上へ横抱にして「お乳」ツてなことをいつたんでございませうさ。眞個にあなたにや、お氣の毒でなりません、私アあなたが此路地へはじめてお通ひなすつた日にお迎に參つてから、も、久しいお馴染でございませうから。」

婆さんは今夜もお君が徒に沖津が宵から戸を鎖してしまつた、物音のしない、空屋かと思はれる、怨めしい門に立つて、立盡して、小半時、戸外の通にはハヤ夜廻の拍子木が聞えるやうになつても、まだ歸らないで、果はシクシク泣いて居たのを、見るに見兼ねて、自分の住居へ抱くや

うにして連れ込んだのであつた。

「つい此間だと思つてますが、もう年寄はかうやつて夜半は綿の入つたものを引かけないぢやあならないやうになりましたから、久しいものでございますね、何の位経ちましたらう。」

「二月になります。」とお君は細い聲で一言いつたが、悄然として俯向いて居る。婆さんは甲の赤い、掌の白い、皺だらけの手の指を折つて、

「もうなるほどそんなになりました、何でございませぬ、あなた二日おきにお出でなすつたとしても彼是三十度でございませう、私はよく覚えて居りますが、此頃ぢや毎晩のやうでございませうから、百夜通ひ……の」といひかけて、顔を覗いた。肚の中では、「あら、をばさん」と来て、ちつとは笑顔もするだらうと一廉巫山戯たつもりだけれど、半ばは心こゝにあらすで、お君は思屈して居るのだから、

「はあ。」といった切、俯向いたまゝであつた。しまつたな、と思つたが、すかさずない。

「いえ御道理でございませう。そりやもうお察し申しますとも。……其だのに、何でございませう。若様に首尾よくお逢ひなすつて、いそ／＼して、をばさん今晚は、なんて、師匠ん家の岐阜提灯のあかりで莞爾、通がかりに聲をかけて下すつたのは大概五六度きやありませんでございませぬ。眞個に後前になつて、あなたと若様とが、沖津さんの處へこの路地をお入りなさる日は梅と

柳で、モこんな裏長屋も軒別春めいて、花が咲いて、月が出たやうで、私なんざ、蔭ながら嬉しいうやうで若返つた心持がしましたのに、いやもう此頃は雨やら、風やらお天気模様もこんなになつちやあ、あなたが、忍泣でもしていらつしやるのを、行燈の暗い處で聞いて居りますと、氣が揉めて、ほんとに可い夢を見ちや寝られません、お可哀相でございませう。」

と婆さんは灯をかきたてて、ほつれ髪で居るお君を見た。

「すつかりお寒れなさいましたよ。お顔の色も悪いやうだ、お察し申しますよ。ほんとに沖津さんたらあんまりだ。さきに自分のいひなすつた口ぢやあないが、全くでございませう、十八の時に出来た兒のやうな方をさ。いけ恥かしくもなくつて、よく口説いたものだ。いゝえ、あなた、だから何ですよ、さすがに極が悪いと見えてね、此節ぢやあ、何處か餘所へ行つて逢つてるのだと見えて、二日にも三日にも内をあけたツ切。まるツきり歸宅らないだらうぢやあございませぬか。」

二十五

「ですからをばさん。」とお君は顔を上げた。うるんだ眼で、ぼやけた灯を視詰めながら、
「何卒後生ですから沖津さんにさういつて頼んで、も一度逢はして下さいな。そりや、鼎さんに

や秘して居て、お重さんの亭主だつてさういつて置きましたけれど、宗さんもありますし、それからまだあのお重さんが私のために借金はするし、商賣は出来ないで困るといひますから、仕方なしまだ外にも一人二人世話になつて居りますから、とお君は極悪さうにいつて黙つたが、婆さんに顔を見られて、情ない笑顔をした。

「をばさん、お恥しい、私あぢごくの様ですこと。」とまた涙ぐんで、

「ですもの、そんな身体で何も我儘はいひません。些少も嫉いも口惜いもいへるやうな力があるんぢやありませんけれど、だけれど、沖津さんだつて罪ですよ。あんなに嬉しがらせて置いて、ほんとに内へ呼んどいて、鼎さんに逢はせて下さつて、お重さんにやあ極の悪くないやうに、小遣を持たせ／＼して歸して下さつたときは拜みましたもの。外の方なら祈つてもやりませう、くひついても遣りますけれど、いろ／＼世話になつて死んでも忘れまいと思つた親切な沖津さんですから、些少も怨んぢや居りません。可いから、お前さんの方で十度逢ふんなら、たまに一度ぐらゐる私にも逢はして下さいつたつて、可ささうなものだと思ひますよ。ですからをばさん、さういつて沖津さんに頼んで下さいまし。私にや何うしたつて逢つちやあくれませんか、をばさん、後生ですから、お頼み申しますから、何卒ねえ、澤山御恩に被ますから。」とお君は赤いもので目をあさへる。婆さんは顔を張つて一歩出た。

「分つてます、分つてますとも。あなたのおつしやるのは皆御道理でございませうから、私もぐつと呑込んでをりましてね、いひました、そりやもう、くどいほど、明方でも、夜中でも、顔さへ見りやつかまへて、さういつてやるのでございませうがね、いふことが憎らしい、斯ういふぢやあございせんか。まあ、腹を立てないで聞きなさいましよ。

(ほんとに可愛くなつて實の兒のやうに思ふから、お君にあはしちやあ爲になりません、決して逢はせることは出来ません。)とね。實の兒が可いぢやありませんか。

そんなことはお前さん、かういつちやああなたの前だけどね、私がさつきいつたことでき、はじめお前さんを取持たうと彼の人さういふから、お互のために末が思はれるつて、實はいつたんでございませう、沖津さんが、何の娼妓だつて何だつて思ひ合つた同志なら、親も出世もあつたものかつて、御大層な口を利きましたね。其が、またこんなにからりと變つたんだから第一私に面じて、きまりが悪さうなものだけれど、其處がもうあ、なつちや、思案の他なんでございませぬ。

(可愛いからはじめは嬉しがらせようと思つて取持つちやあ見たけれど、も一層可愛くなつたら爲にならないと思ふやうになつて、ほんとにもう自分の内で逢曳をさしたのなんぞ、思出して身震がする。甘やかすのと、叱るのとは、同一可愛さでも可愛さが違ひますよ。)と、ちと何うか



してるやうな言をいつてカラツキシ受附けませんで、もう呆れつちまつて、あきらめものだと思つて居るのでございますがね。」

お君はじつとして聞いて居た。

「第一、御本人がまた何う遊ばしたといふのでございませう。何も沖津さんの處でなくツちやあこれが逢はないといふ、極つたこともございますまいに、あなたお手紙でもお出しなすつたのでございませんか。」

「お内も何にも存じませんもの。お手紙もお言づけも何うして可いのか分かりません、をばさん、何うかして下さまいし。」とお君は遺瀨がなささうに、力なささうにいつた。

みゝずばれ

二十六

婆さんは頷きながらも解せない顔で、

「何うしようにも斯うしようにも、あなた一體、前にも沖津さんがそんなことをいつて居ましたッけ。あんな中でおいでなさりながら、お所も番地も分らない、御存じないといふのは、何うなすつたんでございます。ま、あなたもうつかりぢやあございませんか。」

「い、え、そりや聞きたいのは山々でござんしたけれどもね、車夫か馬丁か、ざらあるお客さんなら知らず、祕していらつしやるほど、奥床しいやうな御身分を、無理に聞かうとすると、何かいひがかりでもいつて何時ぞや何かのためにでもするのだらうと、さう思はれてはならないと思ひましたから、こんな身分で怯けるんですもの。是非といふことも出来ませんで、其に、そんな見棄てるやうな方ぢやあないつてことは、そりや分りましたわ、ですから何にも知りません。」

そんな遠慮までしてますもの、誰か、おためにならないやうなことをしますものか。それなのに、沖津さんも餘り酷いんですよ。」

「そりやもうカラ無茶なんだから仕方がありません。おためになるも何も唯逢はせるのがためにならないのだ、と天窓からいつちまへば、手のつけやうがありません。妙なもので、はじめ何かいつた私の方が、今ぢやああなたが御道理のやうで、何うにかしてと、ほんとにこれでもね、いろいろ氣を揉み抜いて居るのでございませうよ。」

と自らのみこんで頷いて居る。お君は悄れ切つて居たがあらためて、

「難有う存じます、をばさんばかりだわ眞個に察して下さるの。」と、あどけない風で、顔を傾けた。婆さん、のみさした煙草を頬張つて煙管を落して、

「え、……も察しますとも。あなた、と力をいれていった。お君は膝に袂を重ねてまたしばらく考へたが、両手をあげて襟へかけて灯にそむけながら、恥しさに胸をあげた。

「こんな思ひをしてるんですよ。」

見ると、玉をのべたやうな乳の下あたり、あちこち掌で朱を印したやうになつて、まるで漆にかぶれたやうだ。婆さんは一目見ると、口をあいて鼻を皺めて、

「おや、おや、ま、おや／＼ま、今時こんなこと。えッ」といつて、つき出して居た顔をぐつとうしろへ引いて、「うむ」と大呼吸。

「ね、背中も腕も皆ですの。」折曲げて口をつけた、二の腕の折屈なんぞ棒を引いたやうに蚯蚓ばれがして居たので、婆さんは眼を睜つて黙つた。

「をばさん、誰にもいつて下さいませよ、鼎さんや沖津さんにさういへば、其せるだつていひますやうで、恩に被せると思はれてさげすまれちや嫌ですし、あんまりだからとさう思つて、私だつて知つてます。届けてやらうかとも思ひますけれど、さうすりや世間へ知れませう。そして洲崎へでも聞えますと、あ、意氣地のない、働のない、身脱をして素人になつたは可いが、そんな情ない目にあつて居るのかと、朋輩衆の思はくが恥しうございますから、酷算段で此方では蕎麥一つふるまひもしませんかつたに、手ン手に部屋から、ね、をばさん、皆ありあまつた中ぢやあなし、小遣をやりくつて素人になるのを祝つてくれました、其につけたつて知らしたかありません。

平生強いことをいつて居た、ばらがきのおいらんさへ、私が出る時、店口まで送出して、素人の姿で腕車に乗つて、挨拶をしました時は泣いてぢやありませんか、羨ましいと思つたでせう。見返つたらまた三階で欄干につかまつて、煩つてひいてた人が、氣張つて下さい。早くお前さんのやうに苦界を抜きたいつて、さういつて拜んだぢやありませんか。なかにや表向はひッそりでも、鼎さんと添ふのだらうツて、からかつて深張の蝙蝠傘をくれました、私も嬉しいから、さうでもないやうな、あるやうな、見得をして居ましたもの。」お君は聲を呑んだ。

二十七

「嘘、まあ、皆が、嬉しい楽しい思で暮して居るだらうと、さう思つて羨しがつて居ませうのに、こんな不運な、情ない、みじめな事を、口惜しい心外な、何うして知らされますものですか。とさう思つちやあ黙つて居ますよ。母様は煩つて居ますから些少でも聞かしたくなし、誰も知らないで居るけれど、をばさん、三日にあげず折檻されるの。」

はじめの内あ可かつたの、宗さんを大事にしろ、旦那を取れ、それも唯々々々とお重さんのいふ通り逆はないで居ましたから、をばさん、厄介になつて私に据膳でお給仕をしてくれたでせう。考へて見りやかるはずみなことをしてしまひました。あゝ、いつまでもこんな家業をして居ちやあ、始終は鼎さんに飽かれるだらう、出たい／＼と思つたので、ツイお重さんの口に乗つて、こんなことにならうとは知らないでさ。借金をしたのも、商賣が出来なくなつたのも皆私のためにしてくれたことだ、嬉しい、親切なと思つて居ましたから、鼎さんに逢へるのばかり楽しみにして、お重さんのいふことを肯いて、困るといふから人の世話にもなつて、小遣も入れてやり、義理が悪いのに亂暴者で向う見すだから恐いといひますから、宗さんの機嫌も取つて遣りましたわ。

宗さんたら、をばさん、洲崎ぢやあ一度来たばかり。日向臭い、あんな者は、大店へあがらうといふ人ぢやありません、蹴ころのお客なんですわ、下卑て、汚くつて、廊下でばた／＼して居たんですもの、お重さんが近所の者だからつて、泣くやうにして頼んだから、顔立だと思つて、他のおいらんに、船頭なんぞ客に取るかと思はれます、外聞の悪い思をして、一晚、それもわづかな間勤めてやりました。心持が悪いから着て寝た縮緬の浴衣は其つ切人にくれてやつてしまつた位ですよ。

私が素人で居た時分から峰の樓で居たんですつて、五年と三年思はれたつて、嫌な、誰が知つた事だ、モ、身震がするんですのに、出てからお重さんの家へ行きますと、をばさん、何うでせう。世話になるといふ約束で宗さんが生命がけのお金を借りたんですつて、私を圍ひ物にでもした氣で、間さへありや入浸つて、酒の酌だ、肩を揉めだ、灸の蓋までとりかへさして、ちつと酔つてでも来ようものなら、唄へだの、弾けたのつていふでせう。

お重さんがハツ／＼して居るからケンツクも食はさないで、私あつらあてに。土堤の芝、人に踏まれて／＼つて、モ切ない思をして弾いて聞かせると、いつでも其を弾く時はおきまり宗さんの眠る時で、うと／＼しながら、無理な算段でお重さんに貸した金子で、もう／＼困り切つておちおちすることも出来ないで居るもんだから、あせつて、くわツ／＼して、何時も火のやうになつてるのに、安酒でほてつてさ、汗くさいあの足をかうやつて……」

とお君は両手を組みちがへて、脇の下へ入れた時、顔の色がかはつてぶる／＼した。「坐つてる私の――仰向で裸體で寝ながら――こゝへ投懸るの、と聲がふるへた。

「でぐい／＼緊めるんだもの、私や呼吸が詰つて胸が痛いわ、いつでも来ると酒をのんぢやあさうやるが癖ですよ。

何が嫌だつて其の時くらゐ、こんな嫌な、嫌な、何ともいひやうのない嫌な氣持のすることは

はじめの内あ可かつたの、宗さんを大事にしろ、旦那を取れ、それも唯々々々とお重さんのいふ通り逆はないで居ましたから、をばさん、厄介になつて私に据膳でお給仕をしてくれたでせう。考へて見りやかるはずみなことをしてしまひました。あゝ、いつまでもこんな家業をして居ちやあ、始終は鼎さんに飽かれるだらう、出たい／＼と思つたので、ツイお重さんの口に乗つて、こんなことにならうとは知らないでさ。借金をしたのも、商賣が出来なくなつたのも皆私のためにしてくれたことだ、嬉しい、親切なと思つて居ましたから、鼎さんに逢へるのばかり楽しみにして、お重さんのいふことを肯いて、困るといふから人の世話にもなつて、小遣も入れてやり、義理が悪いのに亂暴者で向う見すだから恐いといひますから、宗さんの機嫌も取つて遣りましたわ。

宗さんたら、をばさん、洲崎ぢやあ一度来たばかり。日向臭い、あんな者は、大店へあがらうといふ人ぢやありません、蹴ころのお客なんですわ、下卑て、汚くつて、廊下でばた／＼して居たんですもの、お重さんが近所の者だからつて、泣くやうにして頼んだから、顔立だと思つて、他のおいらんに、船頭なんぞ客に取るかと思はれます、外聞の悪い思をして、一晚、それもわづかな間勤めてやりました。心持が悪いから着て寝た縮緬の浴衣は其つ切人にくれてやつてしまつた位ですよ。

私が素人で居た時分から峰の樓で居たんですつて、五年と三年思はれたつて、嫌な、誰が知つた事だ、モ、身震がするんですのに、出てからお重さんの家へ行きますと、をばさん、何うでせう。世話になるといふ約束で宗さんが生命がけのお金を借りたんですつて、私を圍ひ物にでもした氣で、間さへありや入浸つて、酒の酌だ、肩を揉めだ、灸の蓋までとりかへさして、ちつと酔つてでも来ようものなら、唄へだの、弾けたのつていふでせう。

お重さんがハツ／＼して居るからケンツクも食はさないで、私あつらあてに。土堤の芝、人に踏まれて／＼つて、モ切ない思をして弾いて聞かせると、いつでも其を弾く時はおきまり宗さんの眠る時で、うと／＼しながら、無理な算段でお重さんに貸した金子で、もう／＼困り切つておちおちすることも出来ないで居るもんだから、あせつて、くわツ／＼して、何時も火のやうになつてるのに、安酒でほてつてさ、汗くさいあの足をかうやつて……」

とお君は両手を組みちがへて、脇の下へ入れた時、顔の色がかはつてぶる／＼した。「坐つてる私の――仰向で裸體で寝ながら――こゝへ投懸るの、と聲がふるへた。

「でぐい／＼緊めるんだもの、私や呼吸が詰つて胸が痛いわ、いつでも来ると酒をのんぢやあさうやるが癖ですよ。

何が嫌だつて其の時くらゐ、こんな嫌な、嫌な、何ともいひやうのない嫌な氣持のすることは

ありません。そしちやあ自分は、女房もあつて、子もあるのだから、大方蚊帳もないのでせう。女房のものもなくしたんですつて、恐ろしく邪慳にして、打つたり、蹴たり、半病人になつて居るのをはりなぐつて来るんですつて、だから心の鬼に責られるんでせう。自分が苦しむほど煩えるほど、しめつけた足へ力が入つて、ぐいぐいやつて、(我あ……手前をかうやつて居る時ばかりだ。可愛がつてくれ、)つてもがいてる様な顔でいひひしますわ。モいけすかない人ツたらない。」

二十八

「をばさん、それさへ私は辛抱して機嫌を取つて居りました。一時すぎればまた沖津さん處へ行つて我ま、がいへようと、其が樂で辛抱して、鼎さんの顔を見りやもう何も彼も生れ代つたやうに忘れて居たんです、其れなのに、こんなになつて、鼎さんに逢はれなくなりましてからは、をばさん、私はほんとに困るんですよ。」とお君はソツと涙を拭つて、

「さつきもいひましたやうに、お重さんがそんなわけなんですから、宗さんとまだ他に一人二人世話をして貰つて居たんですが、随分ねえ、辛い思をして取り悪い機嫌を取つて、お重さんの悪い顔を見まいと思つて、ほんとに勤めてやりました。ね、それがをばさん、鼎さんに逢はれなくなりましてからは私あもう何の人の、顔を見ることも、聲を聞くことも、あの、ものをいふこと

もいやになつてしまひましたの。

もうくく嫌でく、堪まりませんから、好きなことをして振抜いたでせう。皆を怒らしてしまひました上、宗さんたら、一々お重さんをつかまへちやあ、愚痴をいつたり、威したり、セツつめますものですから、無鐵砲なんで、恐くはありませうし、自分のいつた口で義理も悪うござんすので、其尻を皆私の處へ持つて來ちやあ、初手は頼んだのが、口説くやうになつて、それから泣いたあとが腹を立つて、もいまちやあ凄味になりました。

考へておくんない、眠ツちや分別が出ないからツて、夜一夜手足を縛つて、私をあ蚊帳の外へ轉がして置きました。何んなに酷うござんしたらう。まだそんな内は可かつたんですけれど、今ぢやあ、もう亂暴になつちまひまして、(私たちの若い時は小刀針だ、はがひじめだつて、酷い責苦にあつたものだ、それで居ていまこんな食ふや食はずにみじめで居るのは、皆お君、手前の故だ、でなきや苦勞をしたおかげに、新造位は勤まるものを)ツてさういつちやあ、いろんなね、酷い目に逢はせませうよ。」

お君はかういつた時、眼をねむつて殘虐な折檻を追懐したんだらう。眉を擧めて口をゆがめて、身震をした。もつれがみを頬にかけて、顔を動かして胸のあたりをとみかうみながらおろく聲になつて、

「をばさん、見て下さい、私や畏縮ツちましたらうね。」とうつむいて言途絶えると、婆さんは胸一杯になつて居た溜息を一時に太く長くついた。

「やれもう、ほんたうにこりや何といつて御挨拶をいたして可いやら、一々御道理で、何とも申上げやうもございませんよ。嫌な客も口直しの若様があつたので御辛抱なすつたわ、逢はれないやうにおんなすつてそんな酷いことをされるのを、舊の朋輩に心外だつて隠していらつしやる、みんなもう御道理でございますがね、あなたえ、」

婆さんはしばらく考へて、

「時節をお待ちなさるといふことにいたしましたからつて、何だつて、お身体が大事でございますませう。もしお煩ひでもなすつちやあ取返しがつきませんから、此處はねえ、一番穩かに、まあ何も、かう申しちやあ失禮でございますが、これが何も生娘で、操を立てて居るものを、代官様かなぐさまうといつて、いふことを肯かないで、責折檻をするのではありません、何の道客商賣をなすつた事であつて見ますればね、ちつと其婆面の小遣位工面しておあげなすつたつて可うございませうぢやありませんか。私は思ふんですが、婦人はあなた操を立てようと思ふ人がついでこそ、そりや他の人に身を任せるのは死ぬほどこいやでございますけれど、いまさうやつて鼎さんと遠退いて入らつしやる分にや、却つて、人の機嫌をお取んなさるのに、心持が悪くな

いだらうぢやございませんか。」

「それがいけませんの。」とお君は猶豫しないで、直ちに應じた。恰もさういはれるのを期して居たかの如くである。

二十九

「え、それはお重さんもさういひました。鼎さんに操だてをすればこそ、他の人を振りつけるといつたやうなものだ、けれどもいまあの方に遠ざかつてるて見れば、そんなに何も心意氣を立てることはないつて、さういつちやあ聞かせますが、をばさん、お前さんもさう思ひますか。」

とうるんだ眼で怨めしさに顔を見た、婆さんは大に氣をうたれて、

「そりや、はや、いつたやうなわけのもので。」と何だか分りやしない。お君は心弱く納得して、

「ぢやあ其が眞個なんでせう。其が婦人の操なんでせう。自分の思つてる人のために他の者に身體を許さないのが、其が操といふのでせう、けれども、をばさん、私はいけません。」

をばさんがおつしやるまでもない、然うさせようと思つて、口でいふばかりですか、お重さんがあんな酷い折檻をしますんですもの。びしくなぐつたりついたりしちやあ、(男があつて操立をするといふなら些少は遠慮もしようけれど、さうでなくつていふことを聞かないのは、ふて

るといふものだ、我儘だ、そんな土性骨は打挫いてツてさういひますわ。
我ま、ですか、をばさん、私は道理も何にも分りません、大方そんな因果な心にうまれついた
んでございませうね。」

婆さんは分らないながら、あんまり可哀相なのでまた黙つて頷かされて居る。

「ですから縛られて、もう苦しい、切ない、思をして、気が遠くなつてしまふ時分にも、あ、
こんな思をしたらこれで大方お天道様も可哀相におなんなすつて、そして逢はせて下さるだらう
と、さうばかり思ひました。」

それでも此方へ来ちや逢はれないで、すこく歸りますと、また今度、またそれからと、幾度
も幾度も段々酷くなりますほど、此位な思をしたら、これで何かの業が減して、今度こそはと、
さう思つて、樂みにして参りますと矢張逢はれなかつたんですよ。

さうしてかうやつて参りますのが、自由に参られます身體ですか。よくくの思ひで隙を見ち
やあ、来るんですもの。道々佛様を念じますよ。礫につまづくな、坊さんに逢つては悪い、烏の
聲を聞きたくない、とびくくして歩行きますの、ひよつと賭けたことがはづれまして、もう近
くなつて躓いてでも御覽なさいな、早いほどお重さんにいひわけがし安いから、其ま、歸らうか
とも思ひますが、あ、この間は坊さんにも逢はないで、烏の聲も聞かなかつた。それで居て、

逢へなかつたもの、さうすりやうらはらで逢へるのかも知れないからと、さう思つて行つたり来
たり、なりたけ間違のないやうにと、路地口へもうつかりは入りません。其ほどにしても矢張む
だでございました。

これぢや未だ苦みやうが足りないのだらう、可いから、もつとしな、もつとしな、思入折檻し
ておくれ。ま、此位ならばと今日のおひる、あんまりだと思ひながら今夜こそは逢へようかと、
一心になつて来ましたけれど、をばさん何うしても不可ません。

鼎さんの身に祟つちやあお煩ひでも遊ばすと悪いとは思ひましたが、何うせ私の生身を責めら
れて居るのだから、其に免じて堪忍して、いふことをきいて逢はしておくれつて、片手で拜んぢ
やあ、あの鱧を針でつ、いても見ましたけれど、もうくくこんな落目になつちまつちやあ、
何だつて利きませんの。此位、此位と思ひく、思死に、大方死なないぢやあ逢はれませんか
知れませんか。も仕方がない。」

と膝を正してお君は何か思つたらしく、居坐を直していった。

「何卒、ねえ、い、やうにいつて、沖津さんに頼んで見て下さいまし。ですけれども、またこれ
だからといつて、無理なことをなさつて、鼎さんのお爲にならないやうなことがあつては悪うご
ざいますから、それにまたいひがかりをして其せんでこんなだつていふやうに聞えますと悪うご

ざんすから、何にもこんなことはないで下さいませう。何うせ殺されるんでございませう、心からですわねえ、をばさん、自分の好ですることを、恩がましい、これも道楽でござんすの、ほ、ほ、と、得もいはれない顔色で淋しさうに微笑んだが、身を寄つて後へひいた、膝を浮かして、

「それぢやあね。」

はがひじめ

三十

「お君、お君ぢやないか。」

と鬱し怒つた然もそ、つかしい聲で、汐見橋の欄干にゐんで、うつかり氣拔がしたやうで居る月の中にうら若い婦人を呼かけた。垢のついた浴衣の裾を掴んで、毛すねを出した、肩を張つて、掴拳で、すつと寄つたのは、髪がのびた、頤のこけた、衰へた形の宗平である。

お君は富岡門前から空しく入舟町に歸る道で、人目のない、淋しい橋の上ぢやあ、大方行惱んで月に歎つて居たのであらう。餘所行の帳羅、旦那のお目見得をさせる資本だから、これはこ

かさすにお重が残して置いてくれた、あの黒と白と矢飛白の小柄なのに、襦袢なしで、縞子と博多と打合せの帯をしめた、小造で華奢の女のもつれ髪で、月をあびたから煙のやうな蒼白い光が染みて、晝はまだ帷子を着るのもあらう、洲崎の燈籠も一ツ二ツ次第に消えていつの間にかひっそりした時候であるから、夜は、殊に、月夜は殊に殊に川風の冷かなので、腕にも胸にもひたりおしつけるやうに羅を吹いて寒さうで哀である。肉のうすい肩のあたりへ、これも瘦せた手をいきなり打かけて、宗平はひつたり並んだ、大いきをつきながら片手で胸をなでて、

「何んなに探したか知れやしねえ、此間ッからいつてる通りよ。いろくもがいたがもうからつきし方げえしがつかねえで、瀬戸際だ。」

「な、」といつて宗平は頷かせようとして傾いて見た。お君は肩を抱かれたまゝ、丈よりは低い欄干へ両手をかけて、身體を斜によりか、つて、應じないで俯向いて居る。宗平はく、めるやうに、「で、何だ、不義理だらけで、方々、近所せえ晝中あ面出しも出来ねえやな、お重の婆々にもいひ分はあるけれど、どんづまりやお前の胸一ツだ、お君何うだ、よ、かう聞かしてくんねえ。」と抱いた手で肩を揺すつて引緊めたから、しぼられたやうにお君は身を細くして、なやましい顔をあげて、

「何をさ、宗さん。」といま眼をさましたやうにいつた。

「かう些少は察してくんねえ、お前、已らお前のためにや、何んな思をしてると思ふんだ、よ、ほんとにもう生命も何も入らねえ氣になつてるぜ。」
「はあ、何うぞねえ。」と細い聲でさういつたが、極めて冷かな意味であるやうに聞えた。宗平はむツとして、色をかへた。

「何い。」

其劍幕が尋常でなかつたので、お君は恐氣だつて、

「何うせ私もたよりのない身體なんですもの。宗さん、」と術なさうに笑顔をして見せる。

「畜生、迷はせやあがら、」と宗平も痛苦の中で莞爾して、

「だからよ、しつかり胸をきかしてくんねえよ。」

「何なさ。」

「何んなつたつて、已らお前、アン婆々、ほんとに其まゝで置く奴ぢやあねえんだが、おらあ、お前が對手だ、お前さい何うかしてくれりや、其、其で思ひ置くことあねえ。ほんとに二進も三進も行かねえんだ。路地裏だつて足音をさしちやあ、あるかねえ身の上になつちやつたい、だからよ、お君。」

また黙つてしまつた。

「なあ、おい、」と小突やうにされてお君は涙ぐんだ。宗平は怨めしさうに、

「餘りぢやあねえか、」と調子がかはつて來た。

三十一

宗平は氣のあせる胸をセツ／＼さして、

「手前は、何が情ねえ、えゝ！ 何が情なくツて泣くんだい。何も己をば馬鹿にし切つてる、勝手なまねをしてるんだから、おいら見たやうなものに泣かされるやうな、そんな腕のねえ姉さんぢやああるめえ、いはねえたつて、やい、己の身の上を察して泣いてくれる涙ぢやあねえ、フテ泣きてえんだ、人にものをいはせめえ、手をつけさすめえとして泣くんだやあねえか、狸め、足を出しやがつたな！」

血相が恐しいのでお君はおろ／＼して、

「何ですよ、おまいさん、何うしたんですよ、わけをいつて下さいましな。」と故と落着いてまじめに聞くらしくも装つた。

「だからよ、手、手前の胸を聞かしてくれツてんぢやあねえかよ。」

「何んなことなの。」とすなほにおとなしくいつた。

「何んなことツたつて大概知れたこつちやあねえか。ほんたうだ、おらあ、もう切迫話つたんで、もう家へ歸るめえとさう思つて出たんだぜ。嬬々病着けて蚊だらけの中にもがいてるが、餓鬼あ餓鬼で、青膨れに膨れやあがつて、腹あ仰向けにしてヒク／＼して居やあがるが、悶えてうめいてるのが目もあてられねえ、あんまり見じめだから功德に叩殺して打つちやつて出ようと思つたけれど、それよりや、手前の胸を聞く方へ心がせくか、もしひよつとか逢はれなきやあ百年目でなくツちやあと、足も空であるいたが、ま、おらあ、ほんたうに此處で出ツくはしたんで、がっかりして氣抜けがした位なんだ。だからよ、かう大概分つてら。」

お君は殺されたと思つて膽を寒うした。

「だつて分りやしないものを。」

いひも果てないに宗平は恐い眼で黙つて睨みつける。トお君は消入りさうになつて、震へながら、

「あなた、お教へなさいな。」と顔を斜めに見てあどけないものいひをしてまた莞爾した。但し顔色は眞蒼である。

「何うかしてくれツてんだい。」宗平はじれ込んでいつた。

「お金子でも遊へるツていふの。」

今度は宗平が眼を睜つて黙つて居る。

「え、そりや何うにかしませうわ。宗さん、お前さん何うにも可いやうにして下さい。」

お君はこゝをさへ逃るれば可いのである。けれども宗平はみんな見抜いて居るので、

「また誰も泥水をのませようたあいはないや。お君さん、そんな一寸のがれをいふもんぢやねえ、知つてらい、そりや、いくら己のやうな間抜けでも氣安をいはれてほんたうにしやあしねえが、全くよ、己のやうなこんな野郎は、そりや手前の合手ぢやあねえ。合手ぢやあねえけれど、思は同一だ。そりや鼎ツて、少い人のあることは己あ知つてる。よく知つてる。お前の腹も分つてるけれど、意地だ、我慢だ、なあ、お君、己あ世間を狭くしたなあ、何もお前のせるぢやあねえんだ。間抜けで、馬鹿でよ、だからお重の婆々にまんまと一杯くはされたんだ、お前の知つたこつちやあねえ、咎はあいつにあるんだけれど、あんなものは對手ぢやあねえ、また、まつたくだ、お前ほどの女を何も三十兩でたとひさ、何んな苦しい金子にもしろ三十兩でお前を買つたとは思はねえ、買つたとは思はねえが、己あ始めツから、思ひ込んで居たんだから、心ぢやあ我がものにした氣で居たんだ。かう、不足ぢやああらうけれど、蟲でも可いや、生命がけで思つたんだから男の身體で買はれたと思つて、不足はな知れてるけれど、我慢して、我慢して胸をきめてくねえ。」と切々として絃を斷つ悲愴な聲で宗平はいつた。

「何んなことツたつて大概知れたこつちやあねえか。ほんたうだ、おらあ、もう切迫話つたんで、もう家へ歸るめえとさう思つて出たんだぜ。嬬々病着けて蚊だらけの中にもがいてるが、餓鬼あ餓鬼で、青膨れに膨れやあがつて、腹あ仰向けにしてヒク／＼して居やあがるが、悶えてうめいてるのが目もあてられねえ、あんまり見じめだから功德に叩殺して打つちやつて出ようと思つたけれど、それよりや、手前の胸を聞く方へ心がせくか、もしひよつとか逢はれなきやあ百年目でなくツちやあと、足も空であるいたが、ま、おらあ、ほんたうに此處で出ツくはしたんで、がっかりして氣抜けがした位なんだ。だからよ、かう大概分つてら。」

お君は殺されたと思つて膽を寒うした。

「だつて分りやしないものを。」

いひも果てないに宗平は恐い眼で黙つて睨みつける。トお君は消入りさうになつて、震へながら、

「あなた、お教へなさいな。」と顔を斜めに見てあどけないものいひをしてまた莞爾した。但し顔色は眞蒼である。

「何うかしてくれツてんだい。」宗平はじれ込んでいつた。

「お金子でも遊へるツていふの。」

今度は宗平が眼を睜つて黙つて居る。

「え、そりや何うにかしませうわ。宗さん、お前さん何うにも可いやうにして下さい。」

お君はこゝをさへ逃るれば可いのである。けれども宗平はみんな見抜いて居るので、

「また誰も泥水をのませようたあいはないや。お君さん、そんな一寸のがれをいふもんぢやねえ、知つてらい、そりや、いくら己のやうな間抜けでも氣安をいはれてほんたうにしやあしねえが、全くよ、己のやうなこんな野郎は、そりや手前の合手ぢやあねえ。合手ぢやあねえけれど、思は同一だ。そりや鼎ツて、少い人のあることは己あ知つてる。よく知つてる。お前の腹も分つてるけれど、意地だ、我慢だ、なあ、お君、己あ世間を狭くしたなあ、何もお前のせるぢやあねえんだ。間抜けで、馬鹿でよ、だからお重の婆々にまんまと一杯くはされたんだ、お前の知つたこつちやあねえ、咎はあいつにあるんだけれど、あんなものは對手ぢやあねえ、また、まつたくだ、お前ほどの女を何も三十兩でたとひさ、何んな苦しい金子にもしろ三十兩でお前を買つたとは思はねえ、買つたとは思はねえが、己あ始めツから、思ひ込んで居たんだから、心ぢやあ我がものにした氣で居たんだ。かう、不足ぢやああらうけれど、蟲でも可いや、生命がけで思つたんだから男の身體で買はれたと思つて、不足はな知れてるけれど、我慢して、我慢して胸をきめてくねえ。」と切々として絃を斷つ悲愴な聲で宗平はいつた。

身も心もうはの空で、唯のがれたい、放して欲しと、冷汗になつて、引呼吸で、のび上るやうにして、一輪光々として涼しい、清い中空の月を仰いで、足を浮かして居るお君の耳にも、一々貫くやうに聞えてひし／＼と胸にあたるほど、お君は死神に取着かれたやうで汗びつしより、背も胸も絞るやうになつて窘みながら身悶をする。

「もう、こ、これだけいつたら分つたらう、そ、そ、そんなにいやがらなくつたつて可い、何うせ嫌はれてるのは知つてるけれど、面皮をかいた上にいけ年紀をして、あれ見ろ、女にや突出されたと、若い奴等にははれちやあ、無理かは知らねえが立たねえや、立たねえや、な、嫌だらう、嫌だらうけれど了簡してくんねえ。もう、分つたらう、さあ、放すから落着いて心を極めてくねえよ、可いけえ、そら、」

といつて宗平は抱込んで緊めて居た手を放した。お君は失心の體でよろ／＼後へよろけてほつといふ呼吸をついた。宗平も身を開いて胸を撫でて四邊を見たが、其眼で月を仰いで歎息して、それから立直つて、じつとお君を見つめ、また、きもしないで石のやうに立つて居たが、えつといふと倒れるやうに前へのめつて、お君の帯際をむすど取つた。怒につきあぐる聲もしどろに、

「畜生、業畜生、汝まだ遁げる氣で居やあがるな、土女郎め！」

と引まはして身體を捻向かして、また緊めるやうに、頸を抱へた。

「こんなにいつても、まだ何とも思つちやあくれないか、え、！ 女といふものは、なあ、迷つたほどのもんぢやあねえ。」と、宗平は男泣に泣いてくひしばつて、こらへながらじつと見る。

「堪忍して下さい、堪忍して下さい。」

と罪のないやうな、無心な顔色。見るうちに頬もやせたやうで、激昂の極は喪心した、恍惚として微笑むで居るやうである。其で身體はといふとぬけ出よう、乗出さうで、無意識の如く動いて、帯もそらどけた、裾も落ちた、胸もあらはになつて震へながら、殺されるのだとばかり思ふので、人欲しやであらう、据つた瞳で、のりかへるやうに身もだえしては、あちこち見返つて、いまぢやあ何もしないで唯抱いて、宗平がじつと見詰めて居るばかりであるのに、おど／＼しながらいふこともきかないで、

「御免なさいまし、御免なさいまし、あれ、堪忍して下さいよ。」とばかり呼吸の下でいつて居る。惚れてる女だ、宗平は可哀相になつたんだらう、がツくりして聲も和らいで、

「ま、ま、そんなに切ながることあねえ、お前も母様のある身體だ。ぢやあ斯うしてくんねえ。ともかくも今ツから遁げてくんねえ、其なら可いだらう、ちやうど誰んだか、うろ／＼舟が纜で

あらあ。あいつを押出しや流は下だ、ぐいと大川へ突出すかい、沖へでも濱へでも、銚子なり、潮來なり、あとは野となれ、ま、死なうと、活きようと舟中で話を極めよう。なるほど一刻に死なうとしたな、ちつとおれの方もあわて過ぎたんだ。よ、お君、さうしてくんねえ。も、それだけのことなら肯いたつて可いだらう、うむ、さうだ。些少周章過ぎて薩張其處にやお氣がつかなんだ。」と抱いて居た手も弛んで、宗平自からも一方の活路を見出したやうに然も嬉しさうに笑つた。

「は、は、已も餘程何うかして居たんだい。」と全然其氣でお君を見ると今までは些少も容子がかはらないで、たゞあせつて居るばかり。はつとまた顔色をかへた。沈んだ調子で、
「お君、分らねえのか。」

三十三

お君は全く血の色を失つて居て、

「堪忍して下さいまし、堪忍して下さいまし。」

「だからよ、え、え！ 分らねえか。」と鋭い聲で一喝した。

「誰ぞ来て！ 誰ぞ来て！」

もう手もつけられない。で、きり／＼と齒を嚙んで引拂つてどんと突いた。

「勝手にしやがれ。」

「あれ！」

土手の芝

三十四

お君は突飛ばされて一支へもなく、朽木のやうにどうとなつた。しばらく橋の上の月あかりに、矢がすりの細い姿を横へたが、帯を引いて裙を亂して、蹴出を膝に踏んで半ば身を起して、仰いで宗平をキツと見ると、血眼になつた手に用意があつたか、大幅な出刃を逆手に取つて、襟を踏まなればかり咫尺の間近に突立つて居る。

「あッ」と魂消つて飛上り、猿臂で襟を捉まれたま、恐いので目もあてられず、お君は立ちざまにまうつむけになつて、欄干に顔をすりつけながら、切なる聲で、

「堪忍して下さい、後生です。宗さん、堪忍して下さいよ。」

宗平は激して口も利けないでわな／＼いて居る。

「何卒、拜みますから、何うともしませうから、聲なんぞ立てやしませんから。私も、私も、いふにはれないほど辛いのおやありませんか。お前さんお困りなら、何んなにもしてお金子を拵へます。もうしばらく、しばらくですから、鼎さんに一度あへますまで、堪忍して助けて下さい。さうすりや何うでもしますから、お金子。」

「金子なんか何にするもんだ。其、其鼎に逢はせるのが嫌なんだ。かうなつちや、金子なんぞで取ッ返しがつくものか、手前そりや、他に男があつたつて、己にも相應にしてくれりや、我慢も出来たんだい。この間中のは覚えて居らう、内は、内だ、世間は世間だ。手前の仕向けは仕向けと来ちやあ、我が立瀬があるもんかい。やけになつて無茶苦茶だ。もう何も彼もあつたもんぢやあねえ。斷つて殺しやあしねえから、逃げろ、さ、船に乗れ、え、いけ濫い何うともしろい。」と小腕を取つて引くと、挽ぎられるまでも放さぬ氣、欄干にくひついで、

「嫌、嫌、嫌ですよ、鼎さん」と悲鳴をあげた。同時に背後から突込んだ。手元が狂つて、脇腹を掠つて切尖が欄干を切つた。トアツといつてのけぞつた、片足が地を離れて仰向けになる乳の下を、これは手應固く切込んだ。お君は倒れようとしたが、身を翻してばた／＼と驅出して、必死の思ひですツと離れる。と宗平は半狂亂で追懸狀に、持つてた出刃を背後から投打する。蝗のやうに飛んで落ちた、足許の廊下をサソクに拾つて、眼が眩んだから打ツつかつた手負の血だらけな身體を胸へ抱留めて、背後へうつくしい手をまはしたが、吾妻下駄の音を打たして入違ひになり、追つて来た宗平と、抱いて留めたお君との真中へ、橋詰の處で、すいと立つたは、色の白い、鼻筋の通つた口のしまつた、眼の凜として、脊の高い女で、これは小間物屋の沖津である。

「まあ、お待ち、宗さん、待ちなつたら、私だよ。」と鋭くいつて身構をした。藍のやうな顔をして宗平は血走つた眼をきよろ／＼さしたが、釘づけになつたやうである。

「お、切つたんだね、あれ血が」といつて、少し色をかへたが、うつむいてお君の耳へ口をつけて、

「しつかりおし、しつかりおし、しつかりしてるんだよ可いかい。宗さん、酷いことをしたねえ、まあ、」

と抱へ緊めてながら顔をあげてまた宗平と向合つた。

「もうおらあ、無茶になつた、姉さん、かうなつちやあお前でも何でも合手だい、堪忍してくんねえ。」

とばた／＼して、飛蒐るのを、むかうへ突いて、手負を抱へながら一足すさつた。凄いで、キツと見て、

「よしねえ、見ともない、嫌はれて殺すなんて、そんな間抜けなものが江戸にあるかい。」

三十五

「お君さん、しつかりおし。私だよ、おいらん、おいらん、鼎さんの母様が来たんだよ。」と沖津は此時傍に人無きが如く、アハヤ掴み懸らうとして纒かに控へて居る宗平には眼もくれないで、力を籠めていつて聞かしながら、また、きもしないでお君の顔を見て居た。手負は空を掴んで居た五指を弾いたが、柔かに曲げ來つてしつかり沖津に縋りついた。

「おかみさん！」とあるかなきかの幽かな聲である。

「私や、おかみさんぢやあないよ、お君や、母様だよ。母様だよ、鼎さんの母様だ、堪忍しておくれ、私あ何んにも知らないで、たゞ可愛い人だとはかり思つてた、あとで分りました、お君さん、私あね、矢張お前と同一だ。ちつとも違はない身の上で、唯あの兒があつただけ、義理であるの兒の父上様と分れた時は、お前さんのいと變はなかつたのだ。ねえ、だから、お前の心を察して取持つてあげたんだが、よ、お君さん、自分の子と分つてからは、堪忍しておくれ、末が案じられたので、私あ得手勝手な片最眞だけれど、鼎さんが可愛さにお前には蛇になつたんだ。でも、こんなぢやああるまいと思つたにお前も實がありすぎるよ。む、何、實があるの、忘れる

のと、さういふあの兒の心意氣なら、私あ何にもこんな苦勞はしやあしない。かうと聞いたら鼎だつて生きて居てくれようか不知、皆私が悪いんだ、お前さんの心意氣はさつき残らず聞いて居た、よ、吃驚した、大變だ、それぢやあ思遣られるが、今さらぐれさしちや何にもならず、宗さんに金子でも貢いで些少心を静めさしたら、幾干か、ま、お前の肩もぬけようかと、夜のあけるのを待たれないで、すぐに才覺をして來たが、晩くなつた。お君さん、世の中にあんな家業したものの、かうしたことになるつちまふのは、お前一人ぢやあないのだから、私あお前とおんなじ思の、其上に乳兒とは分れたし、十年でも生きのびただけ、よッほど不運だわ。察してね、後生だ堪忍してくんなよ。これまでにしてもまだ表向母親だとも、名告りやしないわ、何んなにみじめなこつたらう。よ、お君さん、堪忍しな、お前一人はやらないから。」

と耳につけて居た口を放して、また宗平を見返つた。

「宗さん、お前何うしても殺す氣か。」と落着いたものである。

「殺さねえで、其の阿魔ア殺さねえで。」

「馬鹿、馬鹿、馬鹿だね、お前は。これ血迷はないでお聞きつてば、何だ、見ともねえ。女房も兒も持つてながら、他所の女に血道をあげて、其で何かい、出來たのかい。宗さん、嫌はれたつて無茶になつて對手を殺す？馬鹿だ、お前は。」

「可いから犬死をさせない方がい、もうこれに懲りたら女を玩弄にするんぢやあないよ。蔭ながら鼎さんといふのは私が兒だとお前覺えて居ておくれ。」

「だつて、と何かいはうとする、川へは船が一艘來た、墨繪のやうな舳へ燈を點して居るのが月光に幽に青く見える、ト同時に上町の角へ巡查の紅の燈が來る。澄み渡つた月夜に次第に近づくので、此時おもしろが懸つて持重りがしたから、横抱にお君を抱いて仰向に膝に乗せて、自分も蹲つたが、あたりを見まはして、

「何だつて、え、幾干、お前さん、私あ世話になつたつて、いくらお前だつて其んなことを、男たる！」

「さうとも、聞捨にしないで聞くが可いさ、見ツともない、出來もしない女を殺して其で自分も死ぬ氣だらう。いまいつた、さうだ立派な男だ。立派だけれどね、宗さん、そんなことはよしておくれ、深川の名折だ、よう。」

「口惜いな！」と地踏鞠を踏んで、宗平は裂けたやうにわツと男泣にないた。

「口惜かあ落着いて了簡おしよ。何うせ、私から起つた事だ、鼎に逢はして置きさいすりや、さまで愛想づかしもされなくツて、こんな氣にもなるまいから、宗さん、お聞き。此の庖丁は私が貫つて跡始末をする。お前にやお處置は受けさせないから、ちやうど渡さうと思つて持つて來た金子もある、餘計でもないけれど、湯へ入つて男振を直してくんな。女房も可哀さうだよ、小兒も歩行くやうになつたらう。こゝでまた變手古な男氣なんか出して、私たちに犬死をさせないが可い。」

宗平は身を震はしてペツたり橋の上に坐つたが、飛んで來て手負を覗いた。

「堪忍しねえよ、お君さん、モひどいことしちまつたい、姉さん、こいつあ届くまいかね。」と泣いていつた。

「あい、あいよ、あいよ、何だよ、と、沖津は蟲の這ふのを聞きすました耳に、

「母様、可愛い子を慕ふものは、憎くないといふぢやありませんか。」

とお君がさういつたのが聞えたので、

「あゝ、といつた沖津は、血の湧出づる胸のあたりへはら／＼と落涙した。

「む、分つた、だから一人はやりやしないよ。鼎さんの母様にはお前の母様がおなりだらう。

私や取ツかへにお前の母様になつて、おんぶして行つてやらう。可いかい。」と自若としていつた。

宗平はすりついて、

「姉さん、お前さん、お前さん、一體！馬鹿な、べらぼうな、私が、と、せい／＼いつて身體を

あせる。と落着いて、

「可いから犬死をさせない方がい、もうこれに懲りたら女を玩弄にするんぢやあないよ。蔭ながら鼎さんといふのは私が兒だとお前覺えて居ておくれ。」

「だつて、と何かいはうとする、川へは船が一艘來た、墨繪のやうな舳へ燈を點して居るのが月光に幽に青く見える、ト同時に上町の角へ巡查の紅の燈が來る。澄み渡つた月夜に次第に近づくので、此時おもしろが懸つて持重りがしたから、横抱にお君を抱いて仰向に膝に乗せて、自分も蹲

「氣を注げなよ。」

「うむ」といつて宗平は立つた。船は間近になつた。

「怪しまれると面倒だ、お唄ひ、おうたひな、そしてはぐらかして遣るが可い、來ちやあ不可いから疾くさ。あれ、男のやうでもないぢやあないか。」

宗平はうろ／＼しながら震へる兩手を握り緊めたが、弾き出されたやうに衝と橋の中央へ行つて、立停まると足踏をして、踏占めて、突立つて、舟と辻との兩の燈を月あかりに透かして、睨着けて、聲を張り上げ、牙えた調子で悲しげに且つ牙々と唄つた。

土手の芝人に踏まれて一度は枯れて

露の情でよみがへる。

とお君がおいらんであつた頃から、これが私の心意氣だ、思だといつて、うたひ／＼したのを、今此時此場合に此宗平が其口で我を忘れて唄つたのを、膝の手負は眼を瞑つてうつとりとなつて聞いて居たが、聞濟まして乗上つて、苦しい呼吸で、沖津の頸に縋りついた。じつと眼を据ゑて、

「口惜いねえ。」

「あ、」

とばかりほろりとした。震ひつくやうに頼すりして、

「堪忍おしよ。」と思切つた、止を刺すと返す刃尖で、沖津は手負に伏重なつた。唄は何處まで響いたらう。

蛇
く
ひ

西は神通川の堤防を以て劃とし、東は町盡の樹林境を爲し、南は海に到りて盡き、北は立山の麓に終る。此間十里見通しの原野にして、山水の佳景いふべからず。其川幅最も廣く、町に最も近く、野の稍狭き處を郷屋敷田畝と稱へて、雲雀の巢獵、野草摘に妙なり。

此處往時北越名代の健兒、佐々成政の別業の舊跡にして、今も残れる築山は小富士と呼びぬ。傍に一本、榎を植ゆ、年經る大樹鬱蒼と繁茂りて、晝も梟の威を扶けて鴉に時を貸さず、夜陰人靜まりて一陣の風枝を拂へば、愁然たる聲ありておうおうと唸くが如し。

されば爰に忌むべく恐るべきを(おう)に譬へて、假に(應)といへる一種異様の乞食ありて、郷屋敷田畝を徘徊す。驚破「應」來れりと叫ぶ時は、幼童婦女子は遁隠れ、孩兒も怖れて夜泣を止む。

「應」は普通の乞食と齊しく、見る影もなき貧民なり。頭髮は婦人のごとく長く伸びたるを結ばず、肩より垂れて踵に到る。跣足にて行歩甚だ健なり。容顏隱險の氣を帶び、耳敏く、氣鋭し。各自一條の杖を携へ、續々市街に入込みて、軒毎に食を求め、與へざれば敢て去らず。

初めは人皆懊惱に堪へずして、渠等を罵り懲らせしに、争はずして一旦は去れども、翌日驚く可き報怨を蒙りてより後は、見す／＼米錢を奪はれけり。

渠等は已を拒みたる者の店前に集り、或は戸口に立並び、御繁昌の旦那客にして食を與へず、餓ゑて食ふものの何なるかを見よ、と叫びて、袂を探ぐれば畝々と這出づる蛇を掴みて、引斷りては舌鼓して咀嚼し、疊とも言はず、敷居ともいはず、吐出しては舐る態は、ちらと見るだに嘔吐を催し、心弱き婦女子は後三日の食を廢して、病を得ざるは寡なし。

凡そ幾百戸の富家、豪商、一度づつ、此復讐に遭はざるはなかりし。渠等の無頼なる幾度も此舉動を繰返すに憚る者ならねど、衆は其乞ふが隨意に若干の物品を投じて、其惡戯を演ぜざらむことを謝するを以て、蛇食の藝は暫時休憩を吐きぬ。

渠等米錢を惠まる、時は、「お月様幾つ」と一齊に叫び連れ、後をも見ずして走り去るなり。ただ貧家を訪ふことなし。去りながら外面に窮乏を粧ひ、囊中却て温なる連中には、頭から此一藝を演じて、其家の女房娘等が色を變ずるにあらざれば、決して止むることなし。法はいまだ一個人の食物に干渉せざる以上は、警吏も施すべき手段なきを如何せむ。

蝗、蛙、蛙、蜥蜴の如きは、最も喜びて食する物とす。語を寄す(應)よ、願はくはせめて糞汁を啜ることを休めよ。もし之を味噌汁と洒落て用るる、に至らば、十萬石の稻は恐らく立處に枯れむ。

最も饗膳なりとて珍重するは、長蟲の茹初なり。蛇の料理鹽梅を潛かに見たる人の語りけるは、(應)が常住の居所なる、屋根なき褥なき郷屋敷田畝の真中に、銅にて鑄たる鼎(に類す)を据ゑ、先づ河水を汲み入るゝこと八分目餘、用意すれば直ちに走りて、一本榎の洞より數十條の蛇を捕へ來り、投込むと同時に目の緻密なる箆を蓋ひ、上には犇と大石を置き、枯草を燻べて、下より爆燧と火を焚けば、長蟲は苦悶に堪へず宛轉廻り、遁れ出でんと吐き出す纖舌炎より紅く、箆の目より突出す頭を握り持ちてぐつと引けば、脊骨は頭に附きたるまゝ、外へ拔出づるを棄てて、屍傍に堆く、湯の中に煮えたる肉をむしや—むしや喰らへる様は、身の毛も戦慄つばかりなりと。

(應)とは残忍なる乞丐の聚合せる一團體の名なることは、此一を推しても知る可きのみ。生ける犬を屠りて鮮血を啜ること、美しく咲ける花を蹂躪すること、玲瓏たる月に向うて馬糞を擲つことの如きは、言はずして知るべきのみ。

然れども此の白晝横行の惡魔は、四時恆に在る者にはあらず。或は週を隔てて歸り、或は月をおきて來る。其去る時來る時、進退常に頗る奇なり。

一人榎の下に立ちて、「お月様幾つ」と叫ぶ時は、幾多の(應)等同音に「お十三七つ」と和して、飛禽の翅か、走獸の脚か、一躍疾走して忽ち見えす。彼堆く積める蛇の屍も、彼等將に去らむとするに際しては、穴を穿ちて盡く埋むるなり。さて清風吹きて不淨を掃へば、山野一點の妖氣をも止めず。或時は日の出づる立山の方より、或時は神通川を日没の海より溯り、榎の木蔭に會合して、お月様と呼び、お十三と和し、バラリと散つて三々五々、彼杖の響く處妖氣人を襲ひ、變幻出沒極りなし。

されば郷屋敷田畝は市民のために天工の公園なれども、隱然(應)が支配する所となりて、猶餅に黴菌あるごとく、薔薇に刺あるごとく、渠等が居を恣にする間は、一人も此惜むべき共樂の園に赴く者なし。其去つて暫時來らざる間を窺うて、老若争うて散策野遊を試む。

さりながら應が影をも止めざる時に、厭ふべき蛇喰を思ひ出さしめて、折角の愉快も打消され、掃愁の酒も醒むるは、各自が伴ひ行く幼き者の唱歌なり。

草を摘みつつ歌ふを聞けば、
拾乎、拾乎、豆拾乎、
鬼の來ぬ間に豆拾乎。

ひく蛇
古老は眉を擡め、壯者は腕を扼し、嗚呼、兒等不祥なり。輟めよ、輟めよ、何ぞ君が代を細石に壽かざる！
などと小言をおつしやるけれど、拾はにやならぬ、いんまの間。

斯くの如く言消して更に又、

拾乎、拾乎、豆拾乎、

鬼の來ぬ間に豆拾乎。

と唱へ出す節は泣くがごとく、怨むがごとく、いつも(應)の來りて市街を横行するに従うて、件の童謡東西に湧き、南北に和し、言語に斷えたる不快嫌惡の情を喚起して、市人の耳を掩はざるなし。

童謡は(應)が始めて來りし稍以前より、何處より傳へたりとも知らず流行せるものにして、爾來父母姉兄が誑しつ、賺しつ制すれども、頑として少しも肯かざりき。

都人士もし此事を疑はば、請ふ直ちに來れ。上野の汽車最後の停車場に達すれば、碓氷峠の馬車に揺られ、再び汽車にて直江津に達し、海路一文字に伏木に至れば、腕車十錢富山に赴き、四十物町を通り抜けて、町盡の杜を潛らば、洋々たる大河と共に漠々たる原野を見む。其處に長髮敝衣の怪物を見とめなば、寸時も早く踵を回されよ。もし幸に市民に逢はば、進んで低聲に(應)は？と聞け、彼の變する顔色は口より先に答をなさむ。

無意無心なる幼童は天使なりとかや。げにもさきに童謡ありてより(應)の來るに一月を措かざりし。然るに今は此歌稀々になりて、更にまた奇異なる謡は、

屋敷田畝に光る物ア何ぢや、

蟲か、螢か、螢か、螢の蟲か、

蟲でないのぢや、目の玉ぢや。

頃日至る處の辻にこの聲を聞かざるなし。

目の玉、目の玉！ 赫突たる此の明星の持主なる、(應)の巨魁が出現の機熟して、天公其の使

者の口を藉りて、豫め引をなすものならむか。

山
僧

日當りの小窓の下に幅廣き毛氈の赤きを敷きたり。其の赤き色は、溢れ且つ染める墨にて黒みたるが、開ける紙は白く、向ひて右手に据ゑたるは形長き硯なり。並べて薄墨の血と、繪筆洗ふべき水鉢など差置けり。母上は我が爲す状を傍にありて見給へり。次に畫かむとする白紙の傍に、廣げて卦算載せて据ゑたるは一葉の畫手本なり。

薄は畫を習ひ初めし最初に學びぬ。葉の長きが三ツばかりありて、其一ツは折れ、莖のさきに十筋ばかり穂の咲きて、風にしなへる状なりき。次なるは枇杷にして、實はたゞ二ツ、葉の多くありたるなり。

やがて朝顔を習ひぬ。蘭、竹、一枝の梅、椿、柘榴の實、皆習ひ得たり。菊の花、撫子、女郎花は刈萱に取添へて一枚に寫せるなりき。くちなしの花、山吹、木蓮、花菫、就中むづかしかりしは、筆のさきを打亂して横さまに刷くべかりし、可笑げなる唐黍の毛なりしよ。

さて、螢を袋にしたると、雪あかりに書を讀めると、風俗異なる人の像は、恠くして學ぶべき由、畫きながら師の教へ給ひぬ。

また琴高といへる仙人を習ふ、薄墨もてさらりと波を引きたるに衣の裾浸り、鯉の天窗の水を出でたる手本なりし。此時にこそ人とともに、始めて魚の形學びしなれ。

鮎、蒸鱧、鯛、二歳三歳が程にして、彼の絲薄に、月と露の風情をも添へて描くべくなりぬ。唐紙に杜若の花書いたるが佳かりしとて、師の翁、戯れに然か號けて、假に我を杜若と呼ばせ給ひしは、年紀十一の夏なりけり。人の聞かば笑ふらむ、杜若とよ。杜若の花の紫なる、牡丹の花

の紅なる、あるは柳の翠なる、黄菊、白菊、水の色、墨畫の月の隈どりも覺束なげにも習ひしかば、十二支の獸、蟲の類教ふべしとて、まづ蛇、次に犬、猫を交へ、さて後に兎を描きたり。猪と羊を終へつ。猿はむづかしければとて、羊の清書上りし時、太筆に彩りて、濡色の、乾かざる

ま、師の給ひしは、今こゝに開きたる、これぞ黒き牛の、背後向に蹲まる、大なる手本にこそ。多きは六七回、少きは唯一回、あたらしき手本を、見て寫せるまゝにして、師の翁可なりとし、別なるを給ひしこと、凡三歳が程かはらざりしに、這度は什麼如何やしけむ。不狀なる黒きかた

まりの、汚げなる尾のさきを折曲げながら、右なる前足を長く踏み出して、二ツの角をば見せつ

山、つ、木もなき、草もなき、たゞ朽葉色の唐紙の上に蹲まれる、曲もなき形かな。恠るもの三月四僧、月おなじこと習ひて、何がおもしろき。

清書持て行く、ハヤ百枚に近くなりしを、然まではと思さるべき氣色なく書直せとのみ、筆をも加へずして、押戻さるゝこと度々なり。

師は我が家近き處に隠居して住給へり。年紀六十ばかり、髯の白く長く、且つ清らかなるを、瘡せたる手に搔摑みて莞爾として日頃おはする、面赤く棗に肖たり。頭禿げたるに、木兎の如き頭巾を被り、褐色の胴衣、袖無きを上に着て、黄なる足袋を穿きて居給ふ、やさしく懐かしくも覺えし人の、果は怨めしくもなりけるかな。

二

去年の秋なりし。一羽の鳴、餌を啄むとて、潯標の傍らに、其片足を擧げながら、枯蘆に臨める狀を習ひしが、清書二回の時なりき。師の見給ひて、此蘆一ツは折れたり、翼も覺束なし、但喙の形よく出来たれば、褒美に鱒一ツ食ましむべしとて、清書なる鳴のさきに、可の字の假名を、可笑げに書きたまひぬ。おなじ手本を三度まで繰返せしさへ稀なるを、牛は其尾の尖ばかりも可なりとはのたまはず、曲りたる角や、枯木の枝よりも能く畫き得ずとて、行く毎に罵らるゝ。

黒く艶かに濡色見ゆる、鼻の尖突出して、生暖かき日南の大路をのそ〜と曳かれ行く、たは

けたる動物よ。筆つきの喰れたるは、泥まみれなる臀のあたりの狀ならずや、汚き手本なり。見る度に腹立たしきを、いらちて筆を染むれば、鼻のさきの墨の紙に染みし、こは牛の糞に似たりとて叱り給ひき。

中ごろ、足の爪と、胴のあたりだに宜きを得むか、手本取りかへて與へむとのたまひつ。心して畫き行きしに、やよ、此の牛、後足のなきはいかに。

急ぎ立歸りて、比べ見たる師が畫きたまひしにも、然るものは無かりしなり。

今はたゞあせりにあせりて、新しき紙のみ描棄つるを、母上差覗き給ひつつ、こゝに脚一ツ書きたるあり、彼處にまた尾のみ見ゆるを棄てたり。「い」の字の形したるは牛の角文字か、一筆汚く染めなして、うつくしき白紙を塗らるは其皮の片なるべし。忌はしき牛頭のみも、同じ狀に四五十描損ねて束ねしな、胴より切つて臀の無きあり、目ばかりにして顔の無きあり。角も、脚もはなれ、汝があたりは牛の皮、牛の骨にて充滿たり、心して描け、此の美しき窓の下は、牛を屠る小屋ならず、誰ぞ、我が可愛きものに、汚はしき屠牛兒の業をばさする、いぢらしものよ。黠一ツ打ちたるも、惟ふに抜け出でたる牛の眼なり、此の一葉の端を裂きて、洗ひたる髪結ばむとも覺えずと、打撃みたまひしかば、餘りの情けなさに、持ちたりし畫筆投げむとせしに、心にかきな戯なりとて、つむり一ツ撫でて衝と立去りたまふ、爾時涙さしぐみぬ。

物すべて茲に到る時、一轉して何等か得る處なくんばあらず。

吃と拭うたる目も明らかに、心を籠めて傍なる手本を視れば、月は五ツ越えて日も經りぬ。唐紙の端少しく裂けたり。水飛び、筆の雫落ちて、處々汚れ且つ古びぬ。うしろむきたる牛の胴のあたりに、際立ちて斑に墨の濃きは、去にし日、窮して透寫をしたりしあととなり、然る時は太く懲されしがなど思ひ出でて、今はそゞろに打笑まれつ。筆を洗ひ、筆を染めて、あらたに向うたる白紙の上に、手本の牛の形ありくと、此處を行け、彼處に運べと、手を取りて動かす如きに、心勇みて、さらりとぞ描いたりける。

三

襖靜に押開けば、良き墨の薰ぞしたる、外出多くし給はぬ師の翁は、今日も若葉の蔭暗き、窓なる唐机に片膝つき、眞白き其の髯、右手に搔撫でて居給ひたり。

疾く清書見せむとて、心急ぐ折こそあれ、桐の丸火桶、中にして差向ひ、胡坐搔いて手を拱きたる頭圓き一員の客ありて、あやにく我をして猶豫はしめぬ。

色赤く、眼圓らに、鼻こそ高けれ、鬚のあと青く、朱き唇の引緊りたるも、人こそ知らね、酒飲めば、方に大口を開いて笑ふ。我が家の裏の山寺の食客にて、聞えたる悪僧なり。

をりく父上の許にも訪ひ來る、はじめて渠を請したまひしとき、好事なる父上の、此の似非行者、何程のことをか爲すとて、去年の冬なりき、法話の茶請に鮫の煮凍を勧めたまひしに、勇猛精進なるべき中山派の若僧、人前も憚らず捲り手に箸を擧げたり。目ざましき舉動かな、然はとて刺身もて酒飲ませたまひしに、鐵の如き額を叩きて、ものの嬉しげに升三ツばかりの酒、時の間に飲倒して、自若として歸りしことあり。

母上打撃み給ひつ、僧が訪ひ來し時手土産に齎らしたる、繩からげの曲物ありしを、納豆にやと、引解きたまひしが、鮫の櫻煮となむ、眞赤なる小法師の天窓ならべて死したるなりき。五位鷺の吸物、海豚の刺身も辭せざるべし、不敵なる山僧の、加持には不思議の驗ありとて、難症、奇病にかゝれる輩、歸依して争ひ招する由。

何時なりけむ、近きあたりの荒物屋の女房狐憑きて取亂し、さばき髪して荒れけるを、後手に柱に縛め、碗皿に食ぶるもの装りて與ふれば、口を着けて嘗むるとて、親屬太く困じにき。主人は信者なりければ、加持してたべとて、慇懃に、此の僧を招せしことあり。

僧行きて、やがて咒しはじめつ。狐憑いたる女房うち慄きたるが、やがて顔をあげ、瞳を据ゑ、験者の面を見ると齊しく、カラ／＼と笑出し、潑僧、何をかする、昨日は居酒屋にて酢鮓一皿を食ひ盡せり。一昨日は坂下の溝端に酔倒れて居たりしならずや、去ぬる日は花屋の娘を、うしろ

より捕へて頬を打ち、泣かせて興せしを忘れしかとて、媪たち題目誦して、打しめりたる修験の筈に、大聲を擧げて罵りぬ。消えも入らむと思ふに似ず、聞濟まし、顧みて、折から師走のことなれば、干鱈は無きか、乾鮭ありや、疾く持て来よと、取寄せつ。乾鮭の形ありのまゝなるを両手に掴み、力強き僧なれば口より兩に裂いて、赤き片身に、手にしたる菩提樹の念珠をかくると齊しく、小賢き狐よ、これ食はさむ、と押取直して、ハタと睨めつけ、したゝかに狂者の黒髪を打つとぞ見えし、苦とばかりにして呼吸絶えしか。

憑物の離れしよし、然る奇特もあるべしとて、父上は疑ひたまはず。見る毎にわれは易からぬ人よと思ひし、僧は師の翁とさしむかひつ。

「佛眼佛足といふ」と恰も言ひかけたまひし師は、我が襖あけたるに、見返りたまひぬ。

「お、来た。今日は何うぢや。和尚、これが其の今噂をした。」

と笑はせたまひつ。興さめたる顔を僧の見て、流盼にかけ微笑みたり。悪僧よ、狐憑かぬ身に何かあらむ。

四

怯めず進みて懐に持ってきたるを、取出でてぞ参らせたる。

皺びし手にうけとりたまひつ。四ツにしたるを開かれし、うしろ向なる黒き牛は、机の上に躡りて、胴のあたり十文字に疊みたる筋つきたり。端をば指にて壓へて、師の一目見たまひたる、底光する腫の動くを、恐しく、あはれなる屠牛兒は如何になるべき、赤き氈敷きたる美しき小窓の下は、もはや牛を屠るべき筈にはあらざらむ。いかでと念する、膝につきし手もわなゝくまで、忍びやかに師が顔の色うかゞひたり。

師はたゞ一目見給ひたるまゝ、またかの僧が方顧みて、もの言ひかけむとし給ひつ。

折わるしと思ひたれば、怨めしげに僧の顔仰ぎ見て、其のせゝら笑するが腹立たしくも、退りて悄悄と此方に出でぬ。

次の室には内弟子居たり。なにがしとて、われより六ツ七ツ年長けたるが、畫絹をのべ、卵の花緘の鎧一領、本箱の前に飾れる下に、背を圓くして、もの畫き居たり。

と見れば烏帽子着て髻ある軍人の、巻物さげたる右手をばハヤ終へて、いま其左なる鎧の片袖をぞ畫きたる、ひそめきて問へば楠氏なり、櫻井の驛といふ處をもの爲るなりき。

僧 山
かゝらむもの何時か我れ畫き得て、彩して、母上に見せ参らすを得む、雛の冠學ばむにも、あの牛一ツ濟まさではと、はた心易からず、襖の彼方うかゞへば、いと靜に、時々山僧の高く笑ふが聞ゆ。

低聲にてわれ鎧の繫絲畫き居れる内弟子にさゝやきぬ。

「牛を習つたの、牛をさ。」

「牛か、」といひて渠は頷きぬ。

「矢張六ヶ敷かつたの、え、何の位かゝつて上りました。」

「左様さ、えゝと、何、たつた一度。」

といふ、思ひかけず、

「何うして、」

「まだ牛を行つてますか。」

「あの、今日あがらなきや、何うしようと思つてるんだ。」

「幾度になりますな。」

指をかゝなふるに得盡さざりき。

「もう忘れた位。」

「酷く苛められますね。」

「行歸りあすこの乳屋に居る、のそくした恰好を見るのも嫌になつた。」

「厭いだせう、しかし最う今度は大概宜うございませうよ。」

「それがいけない。あの、そら清書を見る時は、不斷の目と違つてね、ギロリとしてねえ、良くない處ばかり見つけるやうなもの。それからねえ、いやな、ねぢくれた坊主が居るんだもの。」

われは力なげに首を垂れぬ。

「案ずるよりも産むが安いッて言ひますからね。」

とばかりに筆を取る。

「ねえ。」

「何うしました。」

「今日は上りませうか、」

「そつとして在らつしやい。大人しくしておいでなさるとあげてくれますよ。全く、」とて、もの言はるゝが煩きなるべし、また手を動かしぬ。

「それぢや、黙つて。」

眼を眠り、耳を塞ぎ、ひたと俯伏になりて息を凝しぬ、慙くして運命を待つなりき。

五

人の見ばいかなりけむ。激し出づる時彼處に在る、犬、われを見て太く吠えたり。師が門をば、

矢の如く馳せ出しが、歸途の足の運びは緩くなりて、悄れて、首垂れぬ。
今日の晝も酷く返されたるなり。

この牛の骸を塗りたる筆の状は、去ぬる月教へたる西瓜の皮の筆つきと異ならず、と嘗り給ひつ。わが顔の色變りし時、否、翁然りとは限らじ、西瓜の皮の牛もこそあれ、精靈棚の馬を知らずや、茄子を以て造るわとて、件の悪僧大口を開いて笑ひぬ。

よし何にてもあれかゝるものと、掴みて懷に捻入れ來しを、得堪へず引出して、寸々に裂きて、丸げたるを棄てぬ。

途、大川に沿ひたれば、流れに落ちたる清書の切片一ツ、翻りて水に浸りたり。其白き、また斑に黒き、薄墨の色に染みたるなど、一しきりゆるやかに浮びて纏れ合へりしが、見るが内に伸びて、長くなりて、柳の下蔭暗き邊を、めぐりて中流に出づると共に、あとも留めず、たゞ緑晶の流れ淺瀬に碎けて、銀の泡ぞ、ほとばしれる。

あな心地やや、とばかりにわれ知らず打笑みしとこそ覺えたれ、の兒ならずと擧みたまひし、母上にかくといひ聞え、晝はハヤこれにて習ふまじ。屠牛兒の業を誰かせむ。

大川の岸を離れ、急ぎてわが家にと思ひたる、不圖見る前途の左側に、まばらに竹の垣結繞らし、方五間餘に造りたる一圓の牧場あり、乳屋が庭にて牛あまた養へり。

牛小屋は屋根白く、柱壁など黒くなりしが、軟き草の上に、二棟ばかりぞ、背戸山の雜樹生茂りたる畦の下に建てられたる。午の時下れる頃なり。五月の空や、濁りながら晴れたれば、秣の匂ひあたりに満ちぬ。

牛はいろくの、或は咽喉の下白きあり、黒にて茶の斑のあるあり。頭赤く背の半ば白きあり。其状何れも大に、赤き乳を地に垂れつ。肥太りたる下腹の皮たるみて、波打ちたるは、亞米利加の産なりとて、われ等幼きがこれをあめ牛とぞ言ひならへる。鼻のさき白け乾きて、喘ぎながら、粘ある絲を吐きて、匍匐ひたるあり、惟ふに病ある牛なるべし。

他は西向きたると、南向きたると、三ツつ、尻合はせに押並び、首をば突伸ばして左右に鼻頭を揃へて六頭ありき。

愛らしと思ふはあらず、其形のために苦しむとて、行歸、憎しと思ひて見たりしわれの、五寸一寸にきざみて描きつ。母上がのたまひし、屠牛兒に似たることしたりしなれば、彼等鈍き獸も、然る心もて打見るよ。進みかてにためらふ折から、彼の臥したる牛、むくと起きしが、なかんづく大なりき。其見上るばかりなるが、小山の揺ぐが如く、埒近く出來れり。

僧 山
時に六頭の牛の群をや、隔てて、赤き圓に、白字もて乳と抜きたる、半纏着し壯俊ありて、腰のあたりに兩手つきて突立ちつつ、日あたる山の方眺め居たるが、十文字に兩手廣げ、のびく

と腰を伸して、虚空をあふぎざま風を吸ふばかり欠伸しつ。くるりとうしろ向きて靜かに小屋の蔭に見えずなりぬ。あはれなる男かな、君も牛には飽倦めるなるべし。

六

續きたる町家と町家と、二三町隔りたる川岸の土堤の下なる徑なり。後前に人もあらず、事あらむ時はわが爲に、敵を制すべく頼みたる、牛乳屋の壯俊は慙くて見えずなりぬ。

足こそ窘め、彼の亞米牛の大なるが、動くとしもなくわが方に眼をば注げる状にて、兎もすれば動き出づべう、われ危み惑ひて、魅入られやしけむ、心も空に、いかにせむと困じ果てぬ。

「あの兒、あの兒。」と恰も可、背後にて呼ぶものありけり。

神や助け給ふと嬉しく見返れば、あらず、墨染の法衣の袖襷に掛けて結び上げ、鼠色の衣の袖口より、逞ましき兩手を出して拳を掉りつつ、裾短かに脛長く、高齒の日和下駄踏鳴らし、片頬笑して近附き來る、紛ふべくもなき山僧なり。

然るものに今か、づらひて居らるゝ身か、好き事せよかしと、われ背向になりぬ。

「早や來て、天窓を撫でたり。」

「は、は、は、は、は、可愛い奴な。」

否とも謂ひあへず、いとも情なくぞ、掉付けたる、強き手は天窓をさべり落ちて、肩をはづれしが、拗ねたる背を軽く押へぬ。

「腹が立つたか、うむ蟲がある。和尚、其處が氣に入つた。」と人もなげにぞ吐きける。

われ未だあやしきものの、物いふを聞きしことあらざれど、陀羅尼咒す僧の皺枯れし聲は、恰も其ならむと常に然か思ひしが、正に其なり。

魔にとらるゝ心地して、耳の塞がりたるやうなるに、川の瀬の音、どうくんと響きて聞え、もの寂びたる感ありき。

「よい兒ぢや、よい兒ぢや。」と、此の僧また陀羅尼の音にあやしき笑さへ交へて、快よげに謂ひかけながら、殆んど觀念の眼を閉ぢて、あはれなるの兒、思ふまゝに計らへとて、棄身に首垂れたる、わが顔を、入道はうしろより、負けかゝりてさしのぞきつ。

「これく、ぼんやりして立つて居るとな、上の山の天狗殿がいたづらをなさるよ。一所に來い、一所に來な、そこらまで連れて行つて進ぜよう。」といひかけて、また笑ひぬ。今日も升をば傾けつらむ、芬々として薫りたり。

「嫌。」

「嫌、嫌ぢやあない。何をすねる。え、なに、牛、牛か。は、あ、牛が恐怖え、彼か。」

と幾度か頷きつつ、立直りて、屹と見しが、可々とつぶやきあへず、まくり手して衝とわが傍を放れたり。

同時に件の亞米牛は、長き背に一波打たして押寄るが如くに動き来て、埒に咽喉の下あたり支へながら、鼻面を道に突出せり。

われ一足退りぬ。

山僧は前に進み、牛の鼻頭に大手を廣げ、足踏して大の字形に突立ちたり。

「大丈夫、大丈夫。」

と頭をあげて前途を示しぬ。

然ること爲なる僧なれば、かゝる時には験ありき。うかゞひ見る、方五間の牧場は、小屋と、牛と、埒と、皆大手を開きたる僧の墨染の衣の蔭にかくれ果てつ。小き身體ツトわが家の方に牛乳屋が庭を通り抜けたり。

七

恠くてわれ、吻といきつきて顧みたる時、山僧は開き直りて、彼の亞米牛に立向ひ、
「何だつて可愛らしいものを、背め居つた、この撥牛め。」と一喝して、掌もて丁と其横額を打つ

て高らかに又た笑ひぬ。

あなや、鈍なる大獸は一窘になりて退りて、度はづれなる怠け聲にて、モウと節だるき音を出しぬ。首を三ツつゝならべて立ちたる、六頭の牛は此時一齊に聲をあげて、もう〜とこそうめきたれ。

太く驚きて走らむとせし背後には、早や山僧來り居たり、思はず其法衣の袖を被きて胸のあたりに額をかくしぬ。

「疝の蟲は強さうぢやが、一向な弱蟲ぢや。これ、そんなこつて畫が掛けようか。可哀相に、牛で大分に弱つたな。」

また我がつむり搔撫下しが、頼母しき人よと思ひぬ。

「牛でも馬でも何でもな、皆人間なみにあしらつてやれ、ほんとうだ。あいら能くいふ事を肯くものよ、こ、こ、こ、こと謂ふ、それ尻尾を掉つて來る、叱！といや、遁げて行く。向うが強かつたら此方が下手に組む。牛なぞ、お前よりも大いから、こいつかなはぬと思つたら、私は家へ歸るんだから意地の悪いことしないで通しておくれと、おとなしくいつて見ろ、もうとか何とかいつて、あれが返事、ようござりますお通りなされませといふやつぢや、は、は、は、何でも然うよ、お前のやうなおとなしいのが頼めば、何だつて、うむと云はぬことがあるものか。おび

えるな、おれが手にゆかない狐つきでも、お前がいへば落ちさうだ

「だつてお師匠さんはいくら頼んでも、牛の手本を上げてくれないんだもの。」

「何、あの畫伯か、あの爺も何、畫は上手ぢやが、弟子を教へるのは大の下手よ。」

「眞個。」

「だから見な、彼處の内弟子が恚う謂つた。我がさつき行つた時覗いて見るとの、何か髻の生えた顔をかいて居た。何ぢやと聞いたならば楠正成といふ人だつてな。は、あ、それを描いて何になさると問ふと、彼奴言ふことを聞け、餘所から頼まれて懸物にいたしますとよ、な。かけものにしますが可からう。あんなことを言はせて置く師匠があるか。手本を畫いて貰ふは可いが、習ふのはよせ、習ふのはよせ、な、分つたか。」

含めて教ふるが如くにいひしが、われは其何の意なるやを知らず、但驗ある僧がいふことよとのみ思ひて聞きたり。

僧は、微醉の興に乗するなるべし、獨いくたびも頷きつつ、

「可いか、分つたらば恚うせい。わしを信仰したらいふことを聞くが可い、教へてやらう、うまいことを教へてやらう。ひとりぢやんと何よ、活きた其の見事な牛を描ける妙、不思議といふ手本をやらう。お前にやあ分るまいが秘傳の一卷といふ、わしが一ツ術讓といふのをする。蝦蟇

でない、蜘蛛でない、またそれ魚につて海を渡るでもない。咒文を唱へてな、牛の妖術といふのを一ツよ。おもしろいから一所に來な、可いから來い、一所に來なよ。は、は、おびえるな、何うもしやせぬ。」

八

悪き心ありとは見えず、怪しく、恐ろしとも思へる僧なれど、あながちわれを憎むにもあらじ、怨もなき幼きものを渠何とすべき。

時ありては彼處の庭に遊び居て、師の許に半日を暮すことしばくなれば、歸るべき時おくれたりとて、母上案じたまふまじ。

いふことの半ばも眞ならむか、われは別なる手段を以て、牛の畫を習ふを得むと、宙に釣られ以て行くやう、丈高き僧の空さまに手を曳くを、振りも放たで従ひぬ。

時に空の色曇り且つ淀み來ぬ。赤く濁れる日の光雲の底より輝きて、眞南の風吹き出でつ。砂塵埃むら立ちていと蒸暑く、われ大川の流を見る毎に、飲み且つ口す、がばやと思ひしが、心易立てにもものいひ得ず、右に折れ左に曲りて、往來馴れし大路の足繁きなを行くに、目に觸る、ほどのもの皆天窗に髪あり、老若男女、袂長きものあり、筒袖着たるあり、土いとよく乾き

山 僧

たれば、かくの如く高足駄穿きたるはあらず、較べ見るに我が僧の如く、圖抜けて體大に足の長きはなかりき。

多くの人々、右に往き左に往き、前より來り、後より來る、ことごとくわが僧の周圍を二歩三歩離れしあたり、東西南北に動いて居れり。

さるものに手を曳かれし脚も土には着かでありけむ、歩くともなしに町あまた過ぎり來つ。往來や、中絶えたる、左手に黒き門あり、濁りたる空なれども、目覺しく青く見ゆる葉柳の繁れる一樹、屋根の上に枝垂れて、うつくしく水打ちたる門内には、入山形に用水桶のいろ新らしきを二かにはならべて積みたり。見上ぐる高き屋根の波形の葺重たげなるに、烏三羽居しが巴になりてぞ飛びたる。僧はためらはでツト此門に入りぬ。

笛、太鼓の音遠近に聞え、おなじほどなる二階家、正しく、綺麗なる、直なる狭き町の兩側を挟みて、薄雲出づる一座の峰まむかひに遠く見ゆる、其麓まで一ならびになりて目もはるかに續くが、このみは地の濕ひぬ。

ほこりも立たず、此處、彼處に柳あり。組合ひ、もつれ合うたる緑の蔭より、家毎の二階の奥薄暗くほの見えて、音楽の調心ゆくばかり奥の方より洩れたり。

此の廊半ばにして一字三階立の高樓あり。

おもて三階およそ二十間ばかりのあひだ、朱の欄干打繞らし、たてつらねたる障子盡く五色の玻璃なれば一際目立ちたり。鐵の網に圍うたる軒行燈あり、松家とかいたる、この前には柳およそ五本ありて門口を蔽うて茂りぬ。

かゝる處を、知らずとて誰がおもひ料らざる、あなやと引離す手を握りて、早や入りかけたる山僧、事もなげに笑うたり。

「おびえるな、おびえるな。」

九

鐵の大盤に満々と水を湛へてのせたる、唐銅の唐子の掌に苔生ひて、傍に小き池あり。此の中庭を左にし、三ツ四ツきれいらしくつらなれる厠を右にし、一渡り板ひや、かに艶ありて暗き廊下を過ぎりつ。過ぎらむとする時、われちらとぞ見たる、厠に隣りて引込みたる暗き室に、藁多く束ねて敷けるに坐し、白やかなる胸をあらはにして、鼠色なる衣をまとひ、細く瘦せたる指もて、しかと左右よりおのが胸おさへながら、振亂したる黒髪の中に藍色の顔のけざまに、節穴より洩るやらむ、怪しき光線の斑々として、其額、とがれる鼻、膝のあたりにうつれるありて、障子の透間より洩れたるを、怪しく、恐ろしとばかり夢の如くにぞ見たりける。ソト僧の衣の袖引

きて指せば、死したるにあらず、呻く聲洩らさむには猿轡をはませらるべく、此の家にて産するものは、皆かゝる運命に陥るなりとぞ。

耳を蔽ひぬ。奈落の底潜り抜けたらむ心地して、あかき硝子窓に突當りぬ。

廣き階子こゝにあり、上り果てつ、と見る時、向ひよりあてやかなるものこそ来たれ。紅の長襦袢に細帯して、眞鍮の盥雙の手に捧げつつ裳はらくとして急ぐが、僧を見ると會釋して今來し階子下り行きたる、色の白き面はやせて頼いたくやつれて見えたり。

また廊下あり、二側に局めく部屋ありて連なりぬ。障子の煤びたると、切ばりしたると、新しく紙白きと、打交りて六ツ七ツはありけり。

出離るれば、またおなじ中庭の池を下に見るべし。向かうたる彼方に、さまざまに髪結ひたる二十あまり十八九なるが五六人打交りて、うしろ様に欄干に腰かけて、柱に手を縋りながら横顔を見せてうつむきたる、立ちざま瞰下ろしたる、其が手をば背に支かせて其處の欄干に頬杖つき、片手につむり搔きながら差覗けるなど、餌を飼ふや、魚躍つて水のほとばしれる音あり。皆興する状ぞ、あはれ下なるは池中の魚なり、汝等上なるは、皆籠の鳥ならずや。

僧に加持を求むるをわれやがて知りぬ。渠等の飼主なる女房一室の内に臥したるなりき。腹の痛しといふにはあらず、頭なやむといふにはあらず、たゞ身のほてりて熱ければとてなむ、

騙れるかな。

其の襖開きし時はわれ面を背けぬ。

いきり立つものの匂、むらく／＼出でてわれを襲へり。

唯見れば青疊塵一ツあらざる上に、綿厚く且つ幅廣き、天鷲絨の敷蒲團所せく敷き設けつ。

年少き女のみないる蒼く、やせて力なげなるが、一人枕頭につい居たり。三人、右に一人、左に二人、骨細き團扇を以て靜に寢床を煽ぐ。他は足の處に居て、こゝに盥を控へ、手拭を浸しつゝ、交る／＼飼主の踵を冷しき。然かさながら病める女房、人を人とも思はぬにや、衾かいて横はれり。

十

髪をば手束に結びたり。手などの太き、わが見たる處にては、あまりたぐひ多からず。からだ熱ければとて何等の状ぞ、人もなげなる胸膨れ、肩丸く、雪の如きが、キラ／＼とあぶらつきぬ。

此の女房。

僧 山、慙くふとりたれば、驗者招するまで熱さ堪へ難かるべし。たゞ身の内より湯の煙立のぼらむばかり、しとど汗になりて、身動きもせず茹りやしけむと熱氣あたりを襲ふが、よこざまになりた

れば、われ枕許に居て顔をばよく見ず、額かつ見せて枕しつつ、象の寝たるに異ならず、淺間しく見ゆるまでなり。

胸をも蔽はず、片手を投げ出して右手に羅葶長き煙管を持ちたり。女のかゝる状、はたかゝる肥えたるを見しことあらず、呆れ惑ひてたゞ僧の顔を瞻りぬ。

かゝらむものをば打も殺すべき大酒飲の不敵の僧、女房が寝たるまゝ會釋をもせであるを、心にも留めざる状なり。

あたりに居る女皆禮しけるに、徐ろに領きて、法衣の袖搔合はせ、口の内には早や何やらむ咒し初めぬ。

水にのみ灯のかけ映りて見ゆ、いまだ暮ならず、既にして灯す頃となりけり。僧が打念する聲のみ、次第に高くなりて、あたりにももの音もきこえず、風や死したる、蒸暑さ一入増し來れり。

團扇使用する女達の手もたゆげに見ゆ。ふとりたる女房や、ありて幽かにうめき出でぬ。

はじめは單にあへぐと見えしが、ふくれたる手をふるひ、ふとりたる足を爪立て、得堪へぬ状にて、うむとばかりに寝返りざま煙管をあげて、左側に坐したる色青き少き女の胸のあたり羅葶も折れよと打ちぬ。

「穀潰しめ、役立たずめ お、熱い、熱い、熱い、熱い、とて身もたえする。悲鳴をもあげ得で蹲まり

ぬ。さらぬも皆色を失ひたり。

此方はバタ／＼と手足を悶えて、

「煽げ、煽げ、煽げ、煽げ！」とうめきながら呼ばはりいふ。

見るに堪ふべき状かは。わが僧の心ありげに自若として、もの打念じ居たればこそ、此方は戸外へ走せ出でもせずしてありつれ。室の内も仄暗くなりぬ。見めぐらす女たちのやせたる蒼き顔も、目のあたり、鼻のあたり、白き頤のあたり、細き指のさき、處々幽かに此處彼處、一室なる暗きなかにほのみえて、團扇づかひすや、皆幻の如く動きて止まず。見る／＼身の毛よだちてわれ僧の袖に縫りしトタン、だ、び、だ、び、だ、び、と咒する聲高らかに響くと聞えし、吠ゆるが如く唸る聲して、むくと起上りし女房兩手を立て、膝をつきて、白くふとりたる身の波立ちつつ、黒き蒲團の上にぞ這うたりける。

廁を求めけむ、病めるものやがて這ひさまに摺りいでて、ほのかに小山の如く室の内に満ちて、うづだかき裸身の顔を、外の方に突出せしが、足を引ずりて廊下に出でつ。のし／＼と響く音して、やがて見えすなりぬ。

僧 山 同時に額、鼻、頤など、幻は不殘消えて、四人が八ツの手、わが兩手、僧の袖に取縫れば、カラカラと打笑ひ、珠數をばらりと揉み果てたり。

「は、ゝ、ゝ、おもしろい、さながらの牛よ。」

僧は人に祕せよと教へぬ。われは家に歸りて其夜人知れず、女の顔にて其手足なる、ありのま
まの白き牛一ツ畫き得たり、いしくもせしかな。
いかに彼の木兎の頭巾着て、黄なる足袋を穿き、棗の如き顔して白き髻搔撫づる翁に見せむか。

笈摺草紙

眞先に立つたのは、黒と茶と鼠とを、縦に棒縞のお召縮緬の八尺袖、藤色の替裏、此袷に、藍鼠地に桃色と紅で牡丹を染めた友染の長襦袢を重ねて、派手な姿。唐獅子を白で抜いた緋縮緬と縹子を打合せの帯、鼠の平打のバチン留。髪は桃割に結つた、年紀は十六ばかりな綺麗なのが、右の手に端を持つた白地の手拭に、中指の尖を繋いで引張合ひながら後へ續くのは、二十一二の新姐で、一樂の袷の裾を端折つて、水淺葱の下ををしゃんと結んで、下長く、白い脛に緋縮緬の蹴出を纏つて居る。後から結城の衣服に淺葱の長襦袢を襲ねて、博多と黒縹子を打合の帯、丸髻の横顔を見せたのは、二三度素人に成つたといふ風、何處か所帯染みた俤がある。

右いづれも赤緒の雪踏、二枚裏で歩を惱み、五月霽で日のあたる坂の山路を登つて来る。「最ちつと急いでお歩行ッてば、焦れつたいねえ。」

と前に立つた一番少いのが邪慳に手拭を引いたので、片端に縋つて中に立つた、首へ環にして緩く手拭をかけて居る投島田の新姐は、煙の立つてる煙管を手にしたまゝ、ぐいと手繰寄せられ、思はず前へ出たので、いま吸つけようとして雁首を押着けてた殿の老妓は、不意に火皿を引手繰られたから、氣拔けのした状。姉さん被の口許に吸口をあてがつたまゝで立停まつて、

「あら、と云つたが黙つて見て居る。」
「亂暴ぢやあないか、酷いよ。」と、新姐はなぐれた身體を坂道で踏据ゑた時、腹立たしげに云つた。少いのは澄ましたもので、

「だつてさ、焦れつたくツて仕様が無いんだもの。」
「何が焦れつたんだよ。セッセツ云つてながら、何だね、お前、そんなに急がなかつたつて可いぢやあないか。」

慳貪に窘めると、少いのは笑ひながら、
「だつて、……」とうつぶむいて其手拭のさきを捻る。
「だつて何うしたのさ。」

「喜いちやんはね、そら何なんだわ、お前。」と老妓は考へついたやうに、口から其の拍子抜の煙管を放して、これを乳のあたりへ構へたとき云つた。

「早く行つてまた旦那に負ぶさらうと云ふんだアね。」
「あ、左様。……」と何か合點んだ顔色で、老妓と目配した目を振向けて少い顔を見る。

「だけど、今ぢやあ何うだか不知、ねえ喜いちやん。」

「何が、え、姉さん。」

「何がッて、お前、蓑岡の若旦那はお亡なり遊ばしたからさ。」

「は、だからお墓詣をするんぢやありませんか。」

「其だからの事だね、お前何時でも甘え散らして、初中あの若旦那に負つて貰つたらう。」

「喜いちやん惚れてたんだわ。」と背後から聲を懸けると、中又のが引取り、

「だもんだから、又今日も負つて貰はうと思つて、それで那樣にさつさと急ぐんだらう。だけれど、何うだかねえ、亡くなつた方のこつたから、もし負つて頂かれなないと、誠にお氣の毒様見たやうなわけのもんだからねえ。」

「それで、あの、一寸相談をかけて見たのよ。」

「喜いちやん、何うだい、ほら、こんな風に、」と背後から負はれかゝると、眞顔で眼を瞠つて聞いて居たのが、身もだえしてふりもぎつた。

「嫌だ、私。」

一一

「でもさ、信が籠ると恐しいもんだからね、また思召に合つて、幽霊に成つて出てお見えなさらないとも限らないから。」

「そんなに氣落する事は無いよ、喜いちやん。」と中のは背から負はれ懸つたまゝで居た。

「嫌なこつた。」

「あれ、急に薄情に成つたぢやないか、あんなに可愛がつて下すつたものを。お前、お亡なんなすつたつて、然う俄に嫌なこつたなんて言はうもんなら、それこそ眞個にお怨みなさうも知れないよ。」

「だつて晝間ぢやありませんか。」と、少いのは言消さうとする。あとの老妓は、すつと寄つて、
「でも山の中だし、御覽な、谷も、崖も、峯ン處も、青葉や、草で、一面に蒼青だ。赤いものはお前たちの襦袢位なもんぢやあないか。よならね時分だから、人ツ子一人居ようではなし。」

すつと奥山になれば、又丁々たる伐木の音も聞えよう。市から十町とは隔たらない、郡の境の一座の岳で、蓑岡山といふのである。持主であつた蓑岡といふのが、此を開拓して、我が名の附いた都にしようと、此處の谷間、彼處の峯へ、堂を建てる、寺を拵へる、思切つて小さな芝居小屋も築いて見るで、家も出来たし、茶店も出た。地ならした、棟上だ、建立だと、三個所の廓を狩催し、藝妓を勝つて、水いろ縮緬の襷に、緋縮緬の長襦袢で、一昨年の青葉の頃は、毎日玉を

「皆がをかく成つたぢやあないか。喜いちちゃん、お歩きな、何うした。」と老妓は開いて立直つた。
おつかなびつくりで、少いのは進みさうにもしないので、
「さあ、喜いちちゃん。」と背から離れて、新姐もまた急がし立てる。
「仕やうがないぢやあないか。世話がかゝるツたらない、先刻や、セツセツてセツつくし、何うしたのさ。」

と老妓はあたりを見ながら云つた。此時は實際少いのを遊ばうための申戯ばかりでは無かつたらしい。
「出ないとは限らないわ、何だか出さうだ。」と仕方なく断念めたやうなものいひ。此の新姐が手の煙管からは、煙が立つて、脈々と山懐の草の中にやゝ動いてゐた。

三

三味線弾いて歌つても居れば、現に三人の噂をして居る朋輩もあるのだけれども、三人は淋しくなつて、しばらくの間皆黙つたのである。
「だもの、晝だつて。」

と老妓はあたりを見ながら云つた。此時は實際少いのを遊ばうための申戯ばかりでは無かつたらしい。
「出ないとは限らないわ、何だか出さうだ。」と仕方なく断念めたやうなものいひ。此の新姐が手の煙管からは、煙が立つて、脈々と山懐の草の中にやゝ動いてゐた。

つけて練出させた。これが花で、押懸ける見物人が、田樂を焼いて騒いだが、彼が故人になつた後は、人口の少い、殊に一年の内四分の二以上までは、雨と雪と霰と、曇天とで持切つてゐる地方であるから、此山は開けなかつた。で結果は其すべての建物のあつたあとが、三年と立たぬ内、悉く扇ヶ原だの、題目堂だの、餅投松だの、禪ヶ岳だのといふ急拵へな稱ながら、もののあはれな古跡になつて、他につかひ道はないのであるから、いま女達が蹈んで居る土の中には、去年の秋土葬にした蓑岡の主人で、山下の寮の若旦那といつた美男子の、生々しい屍骸が、生前一時豪遊を極めて、其の驕奢の一手段であつた、此の蓑岡山の頂の下に横はつて居る。
麓は西北に展けて、裾廣がりに、左右へ果のない、六十萬石の田の淺翠。又海が渺として片帆が見える。空も拭つたやうではあるが、其年諸國に天變と地異とがあり、豫言が盛に行はれて、槍が降るわ、風が吹く、海嘯が寄せると恐れて居た。其の五月雨の頃なので、樹立一つで目の届かぬ、葉隠れの空、峯の裏、何處に、紫か、朱か、緑錆か、人を奪つて去るやうな恐しいものの色が潜んで居るかも知解らない。眼に映するものは、此時彼等の目に唯青葉、若葉、緑の草で、風もない、森として、此の單調な蒼いのが、あまり日が明いから暗いやうである。

「だつて、恐いもの、姉さん、いろんなことを言つて。」と聲も穩でない。

「さあ、お行なさらぬか、立つてなすつちやあ不可ませぬ。あ、馬だ。一條路でござい、前さまからお早く。」

と路をせき留められて立淀む。これは一足後れに同伴をして来た、壯い者で、半被、股引、白足袋の雪踏穿で威勢の可いのが、供養の塔婆を一本、山路と平行の、うしろさがりに長くかついで居て、

「え、もし、お前様方ア何をこ達はつて居なさるんだ。急いで行つてお上なさい。寮の若旦那お待兼でさ。」

老妓は慌しく一寸銀煙管でおさへ、

「叱。源どん、お前なほ不可なくしちまつたぢやあないか。お待兼だなんていふから、其で皆が窘んでるんだよ。」

「何だつてね。」

「い、え、幽霊が出やしないだらうかつて相談をして居たの。」と新姐は言つた。

「は、は、景氣の可いことを言つて居なさらあ。死んだ人が幽霊になつて出てくれりや世話アねえ。眞個でさ、旦那が幽霊にでもなつてあらはれて下すつて、おい、源的といふ聲が懸りや、

此方アい、目が出るんです。盆の心配なんぞ爲ないんだけれど、あ、仕方がないや、無駄は止して急ぎませうぜ。お前様方の歩行んぢやあ、いくら日が永えたつて追着きません、此頃のお天氣だ。」

と若い者は、眼をくるくるとやつて空を見て、

「曇ると雨だ、さあ、あよびなさい、どれ草分けをしようかね。」と塔婆をかついだ肩を入れかへ、路傍の叢を踏みながら、並んだ二人の横手を擦り抜けてツト前へ出る。これに誘はれて歩き出したが、皆滅入つた顔色、むだも言はないで神妙に後からついて登つた。

此の坂三町とは行くまでもない、松の葉の落溜る處、や、垣くなる坂の上り口、これから次第高な廣場で、例へば原を斜めしたやうな墓地にならうといふ、其の取着一軒、山番の小屋がある。

掘立の四本柱で、假屋のやうに拵へた、去年の雪垣はまだ取りはづさない、其儘で、雨風に曝された板戸の、隙間だらけなのが四枚。危く倒れさうになつて立つて居る。これが小家の正面で、向の峯から、まおもての日向で、撈つた紫雲英を一面に二坪ばかり透間もなく乾してある。

件の墓參詣四人の一行は、若い者がさきに立つて、此處まで来ると、珍らしい、莖がなえて白くなつた、此花の色の、干からびながら赤いのが見たが、恰ど淡雪で埋んだやう、戸口に行かう

とする路も無かつた。

見ると人の居る氣勢もしないで、板戸を透かす節穴の裡は皆暗い。

「え、誰も居ねえのか、こゝで鉄も借りようし、」

「お花も買はうと思つたのに。」

「はてな、何處へ行つたらう。」と四人立亂れて、姿を入違ひに、あとさきを見まはすと、小高い見晴の丘の裾で、時ならぬ人影を認めたが、小松原の中へぬつと立ちあらはれた親仁があつて、のさ／＼と上から下りて来る。

四

「親仁、おゝい、親仁や、」と若い者は廣々とある山の中へ、張上げた聲を懸ける。ト聞えたでもなし、聞えぬ？でも無い。親仁が少し前屈みになつた、脊の矮い形は、段々に近づいた。

草色のどんつく布子に、同一色の繼はぎの半股引、振れ／＼になつた小倉の固い帯を克明に尻の突さきに結んだのに、たがねた藁を一束、木剪刀を挟み添へて、小さな斧をいかつげに横へた、手には竹箒を持つて居る、何か、植木屋と、木樵と、馬方を一人で帯にしたやうな身ごしらへ。眼のふちが赤くたゞれて居るので、日向が眩いのを、眉毛が光線を遮る蔭から、細くしば／＼降

いて、間近になると、立停まつて、睨で嘗めるやうに一個一人瞻つた。

「え、ござりませ。」

「む、親仁、久瀧だ。」

「はい、あり難いことに晴れました。これは姉様達ようこそ。」

「旦那のお墓詣に來たんだよ。お爺さん達者で結構だね。」

「はい／＼、」と云つて、言はれた言をのみこんだ頷をする。

「一寸休まして貰はうねえ、」

「私、水が飲みたいの、」

「種々なことを言ふよ。」

「生憎茶はござりませぬが、水ならば今朝汲みました、澤山まゐりませ。」と跣足であつたかさうに、紅い草の堆いのを柔かく踏しだき、片手に箒をついたまゝ、皺びた赤黒い、掌の生白い、大きな固い手を戸の合目に掛けた、親仁は中腰に成つて力を入れると、板戸はかた／＼と鳴つたが、外づれて、音もしないで、生乾の草の上へ沈んだやうに黙つて倒れた。

「おい、」と懸聲をして、親仁はゆつたりと蹲み、板戸をわきへ搔遣りながら、箒を持つてるのに係はらず、手で草を押分けて、

「さあ〜、」

「御免よ、と若い者は一足ひよいと飛んで、廂へ彼の塔婆を立懸ける。」

板戸の内は横に長い平土間で、たゞきばなしの高低が多い。櫓を突込んで二ツ、薄暗い處にならべた花桶も、兩方へ傾いて居る。向う一杯の框、片端を四角に取つて、四疊ばかり、其へ筵を敷いてあるが、筵から芽をふきさう、誰もお客になつて坐るものはないのであらう。框の端は板縁の様になつて居る、こゝへ一列にならんで皆長襦袢を閃めかし、白い足を踏揃へて、赤い緒の雪踏を六つならべて、腰を懸けた。

「煙草の火でも進せましょ。どれ〜。」と親仁は身を起して入つて来て、片隅に据ゑてある黒煙りの土籠の下を覗く。

若い者は塵を拂ひながら笑ひ出して、

「何時焚いた火だ、親仁さん、朝の御飯を拵えたおきが正午過まであるものか。」

親仁は籠へ天窓から入つて居る、チト籠つた聲で、

「はあ、さうだつてか、御意ぢや。」

「は〜、は、さうだつたてえ奴もないもんだ、其ともありますかい。」

「見當りねえさ。」

「何うだ、此様子ぢやあ、汲立の水が湧いてさうだ。喜いちやん、冷めない内にあがんさい。」
「嫌だ、私、ぼうぶらが居さうだわ。」とうすツ氣味の悪い目をつける。煤だらけの天井裏の蜘蛛の囀を白く見せる光線がさして、ほこりで蓋の白い釜をかけた其の土籠にならべて、手桶が一個、流はないから、直こゝで煮焚をするので、土間のじく〜と濡れた處に置いてある。少いのはちつと見て、

「ねえ、姉さん。」

「今に蚊になるから御覽なさい。」と、新姐は手に持った銀煙管を前髪の上へ投げて、くるりと廻る處を宙で受けた。

「あい、来た、よい〜。」

五

「人の氣も知らないで憎らしいねえ、咽喉が渴いて〜、仕やうがないんだもの。」

「私も飲みたくツて〜、と、いま煙管の小手しらべを御覽に入れたのが、唇をゆがめて胸を叩く、

「そら、御覽なさいな。姉さんも飲みたいんでせう。」

「あゝ、だけでも、今朝御飯を焚いたおきを探すんぢやあ仕やうがない、此方アぼうふらが居たつて可いんだけれど、水で煙草はのめないしねえ。」

「何を言つてるのさ、つまらない。」と老妓は二人を制して、

「火打石でも借りようぢやないか。」

「そんたら早やお易い御用だ。」

親仁は蘇生つた心持になつて、漸く竈の中から天窓を出し得た。すぐ釜の蓋にのせてあつた、石、火打鎌、ほくちなど、大方かうして置くと濡らないからであらう。三つ道具を左右の手に取つて、

「待たつしやい、打つて進ぜます。」

こつりとやる。眼がたゞれてる上に細いので、カチリと打はつしちやあ、焦れもしないでまたカツチリ、果しがないので、若い者は焦込んで、

「私が打ちやす」と引奪るやうに道具を取つた。

折角筈まで下に置いて打ちかけた、かゝる好意を無にされた親仁は、手持無沙汰になり、眼をしばたゝいて空く指の先を眺めて居たが、

「どれ、水を汲みかへて来て進ぜよう。むかひの題目堂の清水は甘露ぢやぞい。釣鐘はあるけれどお住持はござらねえ、空寺だもんで、毎朝、日朝様へ俺お初穂を汲んであげる、其代清水は俺許のも同じことぢや。へゝゝゝ、中に釣鐘の影法師が映る山の井ぢや。まあ、飲んで見ツさりませ。」

と釣鐘の大きさは、身を反らして胸へ抱へる位にして見せて、威張つて手桶を引さげた親仁は、腰を屈めて足に力を入れて、獨言を云ひながら、てくゝと土間から出て行く。

「こんな處に一人住をしてる人だ。何處か變つてらな」と若い者は指のさきの火奴を吹いて、フツツと息をかけながら摘んで出した。

「はゞかり」と云つて吸ひつけた老妓は、一息のどかに吹いて、

「むかしから氣の可い爺さんさ。寮の若旦那が家に御先代の親御から奉公めた人だつて、もう七十餘だらうねえ。かうやつてお墓守までして居りや、大概な者ぢやあないやね。ねえ、忠義ぢやありませんか、まつたくだ。悪く氣の利いたものによ出来ない事だ。」

「はいゝ、畏りました」と新姐は莞爾する。

「馬鹿におしでない。お前けふは御命日だよ。ちと神妙に致すが可からう。」

と煙管をボンと落して老妓は兩膝に手をついたが、思ひ出したやうに、

「あゝ、ほんとに申戯いつてるんぢやあなかつた。喜いちやんお前水を呑むんなら、増さんとあ

とからおいで、私ア一足さきへ行つて、お座つきでも済まして置くから。」

斯ういつて帯を探り、四に疊んだ白紙の間から小さな珠数を出して、チヨイと頂いて手に取つて、老妓は立たむとして戸外へ向直ると、戸の外へ来てイんだものがある。

光の射す山の翠の中に、こゝに敷いた紫雲英に踵を入れて、恰ど此時来て、いま此方を見て立停まつた、同時にのツそりした、足の運び、たけの高い身體を大跨につかゝと来て、其の背後に成つて齊しく立停まつたのは、風のかはつた、見馴れない漢の、年紀は三十二三と見えた。

六

色の黒い、額の抜けあがつた、頬骨の出た、いかめしいのが、袴も丈も短い衣服から、二の腕脛のあたり、文身をしたのが露出れて居るから、此方の女どもは皆眼を睜つた。

男は背に居て揉手をして、
「お嬢様、お休になりませうか。」

嬢様と言はれたのは、無言で頷くと見え、菅の小笠が前に俯向いた。其足を、後に引いて、身を退らし、斜に心ばかり仰向く形で、淺葱の手甲を白い紐で手首に結んだのを上げる。と二の腕が雪のやう。翳して笠の縁を取つて透かしながら、いま若い者が此へ立懸けて置いた、新しい、墨色のまだ濡れても居さうな追善の塔婆を見た。表に、
「え、御一服、それが可うござります。」

と入交つて前に立ち、つかゝと戸口に臨んだが、四邊を見廻して猶豫つて居る。恚ういふ時は、何者か見て取つて、お掛けなさい、入らつしやいましを言はねばならぬ。

親仁は空寺の山の井を汲みに行つて居ないのに、居合はせたほどの者は、留守といふでもなく、いづれも勝手の知れぬのであるから、唯きよろゝするばかり。

取着が悪いのだ、入り兼ねたものらしい。
皆が黙つて思ひゝに、只管顔と顔を瞻つて、遣場に困つた眼の行く處、小松原の中を手桶を提げて、親仁はのそゝと歸つて來た。

「え、そら汲んで参りました。」

言ひかけて、件の嘗廻すやうな細い眼色で、少時の間行つて來た、少時の間に、天から降つたか、湧いたのか、珍らしい人が新らしく來て、自分を待つて居たやうに感じらるゝのを思ひかけず見たのである。

法華で、下總から出る中山派の巡禮は、團扇太鼓と小撥とを持って居るが、此の千箇寺詣の手は、空しく無意識に垂れて居た。扮装は同一で、脚絆手甲、草鞋、足袋穿。婦人と見え、爪さきが反つて、踵の可愛い、すらつとした立姿で、袷の下の乳のあたりを鎧つて、白の頭陀袋を懸けて居る。背には笈、真中に打つた劍形の御符の札は、頸あたりに真すぐに、しやんと立つて凜々しかった。

天窓のさきから爪尖まで、親仁はつくづくと視めながら、うつとりとしたやうであつたが、落すが如く、其手桶を下すと、身近に寄つて、紅い花の上へ、股引の足を折つて、片手を地について一膝すり出したが、顔をあげて、立つた人の向脛のあたりへ跪いて、笠の中を差覗く。

艶かな鬢のふツさりして、前髪の亂れかゝつた、薄暗い笠の中に、眉は鮮である。鼻筋の通つた、色の白い、めつきり瘦の見える、佛はやつれて居るが、氣高い、品の備はつた、緊つた、紅の苔のやうな口許が、此時わづかに弛むと見上げた。清い、凜とした瞳が動いて、うつむきざまに見おろした、少し曇つた月夜に肖た、憂を帯びた下向の顔を、親仁は何で忘れよう。世に亡き菫岡の主人が生命を賭けた戀女房で、山下の寮に住んで居た、紫と云つた美人である。と言へば顔は見ないまでも、聞いて知つて、こゝにあるほどの者は皆忘れはせぬ。

七

慶應元年、上野の戦争にさきだつて、江戸は修羅の巷となる由、豫め騒いだので、紫の一家は、兩親と、兄と嫂、嫂は江戸の生でない上總のもので、嬰兒を持つて居た。此の乳香兒と、犬張子と合乗で駕籠一挺。紫十六と云ふ時、厚裏の雪踏を赤い切で結へた旅装束のまゝ、横に乗つた一挺、都合二挺。兩親は老人で二人一ならびに馬に乗つた。兄は步行立で、妻のと、妹のと、交るゝ駕籠脇に引添うて、別に小荷駄馬一頭。大方の諸道具は前に三度から廻して置いて、これに積んだのは家の寶、金春流の能の大鼓打であつたから、シテワキに朱を打つた謠の本、家元から皆傳の巻物、鼓の類、ほかに紫が愛翫して、本陣へ泊まる直ぐ蓋を取つて見ようといふ内裏雛、五人の能人形、小さい洞燈、江の島貝細工の小屏風、箏、鏡立、足高の夫婦膳、蒔繪ものの對で掌に乗りさうな、一式取揃へて嵩張つた箱が二個。田舎源氏、大倭文庫、白縫物語、と其から小倉百人一首、大形の古代繪で、一枚毎に吉野紙で間をした歌がるた。紅猪口、白粉刷毛、鬢水入、玉くしげ、疊紙、桐壺黄金砂子の香箱まで、紫が袖の薰を留めた、指の爪紅のついた品物は、残らず荷作にして、直ぐ駕籠のあとについて居た。別に手廻の入用のものが多い。費を省いて小荷駄一頭なら、手遊や、慰物は措いて外のものを

積んだらばと。兄と嫂は不足をいつて澁つただけけれど、男五人、女四人、はじめから九人もあつた。紫は父親五十四、母親四十四の時の末っ子であつたから、喩にもいふ掌の珠、簪の花なり、

豫め兵亂を避けて、舞の舞臺のあつた、下谷黒門町の邸を開いて、田舎へ落ちようといふ時、

矢玉が飛ぶからと言つておどしても、雛の傍を離れないで、くさ草紙や、歌がるた、紅猪口と一所でなくツてはと、あどけないことをいつてむづかつたわがまゝを、可愛さに眼のない両親は、

唯莞爾々々顔で聞き入れて、好の衣裳を襲ねたまゝ、ピラ／＼の簪、高島田、胸高の帯。ふつくりした懐中から、箱せこ簪の紅の總がしつとりとしてうつくしい。袖のあつち、きりつとした、

武家の風に、品は能くつても藝人の好、町家の俵な處を取まぜた、眼さむる姿で、塗骨の銀地の扇を持ち、裾をば引あげもしないで乗つた、駕籠には花の枝をかざさぬばかり。猿若町へハツチ

ヨで飛ばす時と、さしてかはりはない。尤も最眞で抱へられて居た、江戸詰の藩主が内命で、其

本國へ落したので、手當はあるなり、派手な消光はして居たなり、控へ目ではあるが、さして不

自由もせず、江戸を卯月の八日といふのに。

泊り／＼も本陣で、袴穿いた男の給仕で夕餉をした、める。紫は、海道の波の音が淋しいから、

母親の内懐へ前髪をつけて抱かれて寝る。

さて鹿の鶴の聲、驛路の馬の蹄の音。おたちと云ふと、駕籠が二挺、乗馬三頭、小評が二頭。

蒼空の鶴に杖を翳し、夕日の波の眩いので茜を染めた顔は、銀の扇でかくしもした。暮ると、次の本陣へ乗つた駕籠を横づけで、兄の手に縋つて出る。湯に入つて、化粧を直す。十日あまり八十里の道中、鬢の毛も亂さなかつた。日和が続いて、親不知も、唯蒼い空から、黒い巖にさゝ波の白いのが、果なくさら／＼と寄するを見ればかり。珍しい貝殻を駕籠舁に拾つて貰つて、大事にはこせこの間に納れて秘藏したまゝ、駕籠から下りると、ハヤ指した地方の藩主の下邸の一室に着いたので。——恰ど今、山番の小屋へ来て、爰に立つた、十一年前のことである。

八

地方の手が違ひ、恰好が悪いとて、第一、母親が合點せず、人橋かけて捜しあてた、鳶の者の女房で、江戸から遁げて来たのがあつて、内職にはしませぬ、頼まるれば遊びがてらといふに頼んでは、紫の髪を結はしたといふ。嫂は子持だから餘り外出はせず、父親は出嫌ひ、兄はまた勤がある。母親と紫と、二三年さきへ来て、土地馴れてる其鳶の女房を連れて、觀音様だ、愛染様だ、大橋だ、池だ、といつて一寸々々出あるいた。

皆が錦繪より他に見た事のない、振袖、高島田、襲着の裾の軽い、木履穿で、紫の矢がすりに、繻珍の丸帯、猩々緋の羅紗に亂菊の縫のある箱せこを懐つた、襟足が雪のやう、耳朶のすき透る、

役者が舞臺から下りて来たやうな後姿を、生のもので、しかも往來で眼の前に。ともすれば、袖でも觸さうな處をぞろ／＼ついて歩いて人ばかり、驚いて、呆れて、眼を覺して、茫乎で、うつくしい、品の可い、さつぱりした、艶な、女の都風俗をはじめて見たのは其時で。

杜若の濃い紫なるを、雨の日蛇目傘の下に、地すりに提げて歩行くよりも、むしろ此の矢がすりの姿は、片田舎の眼に立つて仰々しく評判した。

何とやらいふ樓の高尾といふのが素人になつたのであらうか。梅曆の中なるが、洒落本の中から駈落をして来たのであらうか。對手は誰だ、それにしては、初心だ、威がある、おとなしい、じろ／＼見ると顔を赧うする、素人だ。皆がついてあるから、おもはゆげといふ状を見よ、うつむいてつゝ、ましげに急足でいつも歩行くわ。其癖澄まさぬ人懐しい、近からむものはおたふくども、一目なりと拜んで置き、一生の思出だ、髪の毛一筋でも背で見ろよ、と女房持まで騒ぎ立て、寄ると觸ると其の風説。何時の間にか素性も分つて、江戸の下谷から此方の下邸まで、土といふものは踏まないで乗打にした、金春金之丞といふ鼓打の秘藏娘だ。但長い道中の草臥休めに、親不知で駕籠を下りて雪踏で渚を踏んだと思へ。夕日がさすので扇を翳して、袂をふり絞つて肩にかけた。衣服は紫のおなじ矢舁。横には空駕籠に嫂が乗つてまた一挺、うしろに馬が三匹で、ならびにづらりと留まつた。佐渡から打通し青墨千疊敷へ、白紙が散つたやうな波頭で、サラサ

ラといふ風ぎた日に、夫婦貝だ、櫻貝だ、銀杏貝だ、子安貝だ、と雲助に拾はして、興にのり、遊山ではないものと、皆が促しても肯入れないで、海が黒くなつて巖が白くなり、夕日が沈んで紫の衣服の色も青すむまで、浪打際をあるいたとよ。海も名残を惜んだのだと、細いことまで探つて来て、誰いふとなく都落の、紫、紫といひ囃したものである。

で半年あまり経つ間に、身の上が悉しく分る頃は、本尊の姿がかくれてしまつて、あまり市人の目に觸れなくなつた。

が一年経つてあくる年の春、川一條市を隔てた山下の一構、流に臨んだ森の中の一軒家で、二階造の欄干のついた、葺岡といつて土地隨一の財産家の寮の裏、恰ど山の麓になる、薄ら寒い細道に、表門とは大違ひで、一枝折つてつけたばかりの門松の淋しい木戸で、また此矢がすりの姿を見たが。

九

こゝあたりには珍らしい、三四人の女中を對手に追羽子を打つて居た。白い手のしなやかなのが、撓みさう。其頃歌舞伎の大立物、二代目澤村訥升が白頭一人立、二尺ものの羽子板を軽々と取り、高く飛んで、やゝ風立つた、たそがれの空にきり、と舞うて落ちかゝるのを、カチ／＼と受留め

て、羽子の音訝々しく、松をめぐつて葉がくれに、人目もくれないで、静々としてまはる、裾袂に友染のこぼれた姿は、また八方へ吹聴をされた。

いよ／＼おもひものか、内君か、菘岡の持物になつたと、人の了簡が極つてから、程たつて、藤色の小袖を着せた嬰兒を乳母が抱いて眞先に立ち、下婢が日傘で小廁がつき、紫は鐵漿を含んだ詰袖の紋附、白襟で、丸鬚に鼈甲の筭であつた、一行の晴々しい宮詣が寮の表門から出たことがある。

五月には、吹流が天を蔽つて幟が立つた。

で最初が矢がすりの娘姿で、次が追羽子、それからあとが宮詣の紋附といふ順序で、紫の時代は過ぎて、騒ぎ立てた人の口も静になり、さしあたり皆が黙つた。いまに九年と十年と経つた後、縣で三美人の投票でもすることがあると、若いものの數が此地で投票する最高點、第一菘岡の寮の丸鬚といふことになるのであらうが、まづ其までは無事であらうと思つたが然うではない。

はじめて幟が立つた年から數へて三年、紫の兒は三歳になつたといふ年紀から、不思議に品行が可いと風説した菘岡の當代、三次郎といつたのが、せきとめた樋口を雄瀧ではづしたやうな崩れ方で、相場へ手を出す、飲續ける、女狂をする、路傍で寝そべる。といふ身持。

寮のお庭を拜見と云ふので、罷出でて、築山だ、泉水だ、唐橋だ、と平日見巡つて、晩方まで

居たものがある。打水をして、松葉一ツこぼれて居らぬ前栽の植込をすかして見ると、木隠れに斷續した長廊下を、夕餉の運で、左棲の婀娜もの、振袖の艶なもの、一列にならんで、奥座敷へかよひをするのが八九人、まだ／＼三味の音も奥深く聞え、太鼓も鳴つて居たが、皆廊で屈指の女だ、アノ驕方は恐ろしい、と舌を巻いた。

十二の藏も三萬畝の沃田も、本宅も此寮も、既に其頃は故人であつたが先代は、高利貸から仕上げたもので。

最初は濱でこぼれ魚を拾つて賣つたものだが、元日の朝だといふ、初日を拜みに千石船の持主が、船に乗込んで帆柱を禮拜した。朝霧のなかに、先代の菘岡の九平といふのが、烏帽子を被り、白丁を着て、あらかじめ帆柱の突尖に躡んで居て、自分の口から、善哉汝、冥福を得むとならば、松小屋に露宿してこぼれ魚を拾つて居る、九平に五兩小判を與へよ、渠は神慮に合ひしものぞと、いひ終ると、てつぺんからもんどり打つて、海中に白波を立てて没したが、すぐぬき手を切つて泳いであがつて、土地で首尾よく小判を頂いた。其が元で高利を貸したが、あれ／＼、とばかりに成りあがつたと、突拍子もない風説をさへした位なもの。

が、三代までは持ちあへず、初代が歿して二代目が、やつと部屋住から直つたばかりで、紫と、森の中に蔓の聳えた欄干づきの總二階で、清い大川の流に臨んだ、寮の内に住んで、五年とは持

堪へず、家も藏もありのまゝで、藻抜になつた主人のからだは、こゝに、其頃寮番であつた親仁に守られて、空しく墓に眠つて居る。塔婆の面の、信士と書いたのが其である。

十

あれまでの分限だつた蕨岡の身上が、五七年の間に微塵に成つた。其よりも寧ろ怪むべきは、若い主人の身持である。恰ど崩れ出した前あたりから、寮に紫の姿が見えなくなり、何處へか行方が知れなくなつたが、仔細は分らない。若い主人の放埒は何か其故ではあるまいかと、人々はいひ／＼する。去年なくなつて一週忌、紫が所を去つて七年目で、笈を負ひ、頭陀袋をかけた、變つた千箇寺詣の扮装で、恰も命日、暮番の親仁が小屋に来て現在在んだのである。おもかはりはして寔れて居るが、其清い、情深い、優しい、しかも威の備はつた眼と、笠の裡で下から見上げて眼を合した親仁は、紫が門で追羽子をした時も知つて居る、宮詣に出た時も知つて居る、居間にならべた其の内裏籠の階下に跪いて、爺や、一杯おあがりよ、白酒の酌をされて、餘りの勿體なさに、いける口ながら咽入つたこともある。爾時は、五壇に積んだ雑壇の燃立つやうな緋の毛氈を敷いた、白と紅と、桃の花瓶に亂れ咲いた中に洞燈の灯がともれて、蠟燭の影に玉のやうな雛がまた／＼下で、こゝに寝て、お雛様とおはなしをするの、と言つてたあどけない人であつた。

ある時は絹夜具をかけた炬燵に凭れて、前裁の梅の古木が三ツ五ツ苔んだのを、櫛子窓から眺めながら乳香兒を抱いたまゝ、件の二尺ものの羽子板で、曲づきをやつて、一度つきあげたのを片膝も立てないで半日落さず、女中どもを驚かした名人で。或は二百枚まいた歌留多を讀みながら取つて、五人の車がかりを單身で突崩したこともある。一時は爺やが嘆願に因つて、倭文庫の講釋をして聞いたこともある。ありがたい方だと思ふと、爺やの鼻は源氏にある、山科が館に紅といつたお腰元のおとつさんで、門番をして居たのによく肖て居るといつた口の悪いお方なり。怨めしくもまた懐かしく思つて、高樓から、また枝折戸から、書院の窓から、また湯殿の口から、おいやと一聲かゝると齊しくぶる／＼震へるまで、いつでも太く身にしみた、寮番であつたもの、何しに其の俤を忘れよう！

親仁は足を折つて片手をつき、這身で笠の内を覗いたまゝ、海鼠に藁をさしたやうに、べとべとと小さく、圓くなつて、額を千箇寺の婦人のつまさきにつけて、草鞋をなめるやうに突伏して蹲まつた。其まゝ消えても失せさうである。

笠傾けてちつと見たが、千箇寺の婦人は、額をつけられた足をのけようともせず、其まゝ胸を伏せて片膝ついて、屈んで搔抱くやうに片手を其背にかけて、其時、かなぐつて笠を取つた。いまさらながら見まもらるゝ、氣高い顔で斜めに覗いて、鷹揚に、もの優しい聲で、

「爺や息災でよかつたね。」と一言さういつたばかりで、眼をねむつて涙をおさへた。親仁は附着いたまゝ、離れない、布子の背を二ツ三ツ撫でて、

「もう可いよ。爺や、さあ、もう可いよ。」

「御免なされまし、御免なされまし。」とばかりで突伏した切り泣いて居た。

戸口に立つて腕を拱き、無言で此體を見て居た同伴の漢は、背高い身體を折屈めて、むずと親仁の襟を攫んだ。

「とつさん、まあ、これ頭を上げなせえ。」

十一

「あなた様、あなた様ア御機嫌ようござります。旦那はハヤ申譯かござりません。」と啜泣にいふことは紛れるけれども、真心はよく知れた。其人が留守の間に、若い主人の失せたのは、自分が殺してもしたやうに親仁は悔をいふのであらう。

千箇寺の婦人は、平伏した親仁の背に手をのせたまゝ、其領のあたりをしめやかに見て、何にもいはないで頷いて居る。

「これさ、起きろよ。まあ、何てえこつた。そんなに附着いてちやあ、お足が擦つてえやな。え

え、おい。」とこつくと其帯の上を叩いて云つた。

「はい〜。」

「まだ、放れねえや。しやうがねえ、山蛭のやうだ。これ、申戯ぢやあねえ。人が見て笑ふぜえ。」と男は持て餘したか引立てようとした、手を放して苦笑したが。取継られて素直になつて居る、氣高い人のおもやつれた、束髪、艶かなのも櫛の齒を入れないで、こつくりと黒く頭に懸つて居る、領脚も垢つかず、額も清らかに、手さきも細く白いのに、荷に餘る笈を背にして、色のあせた袷の袖の、膝に垂れかゝつて重さうな、あはれにも殊勝な姿を見て、ぎよろりとした目にこれも暗涙を湛へて居た。

千箇寺はまた、搔撫でて、

「爺や、何うぞしたか。」と問慰めるやうな言でいつた。これに、漸とむすくと天窓をあげて、

「何ともござりませぬ。はい、爺は何ともござりませぬ。餘りのおなつかしさに、えゝ、勿體ない。」と親仁は身を起したが、屈んだなりで手を合はせる。

婦人は笠を片手に、袂を拂つてすつと立つた。

がホツといきをつけて、傍にあつた手桶に目をつけて、

「清水かい。」といつて親仁を顧みる。

「え、題目堂のござります。」

「あ、日朝様の、然う。」

ちつと見て、唇をキツと結び、片手を胸にあげて、婦人は伏拜むが如く、たてに掌を開いた。

「爺や、一杯飲みたいがねえ。」

「召あがりますか。おいさん、おい、嬢様があがるとよ。」

「え、く。」

「え、ぢやあない、かう、何ぞ持つて来ねえ。」

「柄杓は」といひかけて、親仁は腰をのして急いで立つ。

「杓呑が出来るか。茶碗々々」と言つて、漢は、親仁が土間へ飛込んで、藝者どものならんだ前をきよろつて廻るのを見てまた苦笑。

「おいさん、此かい。」と先刻から一寸々々、少いのと二人で耳打して居た老妓は、傍を向いて、手近にあつたのを見附けて取つた。

「お、く、其だ、其だが、待つてくだつしやい。え、此處へあがつて、まあ、ゆつくりとま

るりませ。」と何かそはくして、件の筵を敷いた上を、跣足で框から伸上りながら、手拭で拂

て居る。

漢は千箇寺を見返つて、

「お休みなさりますか。」

婦人はちつとも猶豫はないで、

「此ま、でお墓へ参ります。寄るのは後にしようね。」

「それぢやあ親仁あん、おい、茶碗を。」と聲を掛ける。

「ま、ま、こゝへござらつせえ。」

「疾く」と云つて、男はつかくつかくと跨いで入らうとする。ト老妓は、ツト其框から離れて出た。

「もし、それへ上げませう。」

十二

「あ、私も飲まうや。」

といま思ひ出したのでもあるまいが、先刻から變つたことに見惚れて居た少い妓は、此時立つ

て出ようとした。

「お待ちよ。」

「だつて、」

「い、えさ、まだ貴女がめしあがらないぢやあないか。葦岡の御新姐様だよ。よく見てお置き。アノ紫様といつた方だ、叱！」と囁き留めると、顔に手を置いた。

底に少しばかり汲取つて、白い縁の茶碗を含んだ。紫は、紅にぬれ色を見せて、唇を濡ぼした

が、うつとりとしたやうである。ほつと息をついて、

「ぢいや。」

「え、」とむかうで振向いて、手を膝に垂れてお辭儀をした。

「七年前にお國を出た時分、寮の井戸が濁つたから、あ、もう此地の水は飲まれぬか、せめて餘所の水はのむまいと思つて、川だの、池だの見る毎に、どんなにほしい時も堪へて居た。峠を越す時だの、濱邊をあるく時だの、あ、何うかして、御國の水を、もう一度飲みたいと思つて居たから。」

漢は言を引取つて、

「何よ、さつきもの、此處へ行らつしやる道で、舊の寮だとかおつしやつた、山下の邸へお寄んなすつて、主あ門のわきにかくれて待つてお出でなさる、俺あ玄關へ行つて、頭をさげた。恐れ入りますが此方様のお邸のお庭の、唐橋の傍にござります、アノ井戸の水を一杯下さいましと、然ういつて頼んだらう。」

「ぢいや、アノ水は最ういけないとね。」

「え、もう何の故か。水晶のやうでござりましたが、お前様お留守になつた時分から、濁りました。旦那様がおかくれになります前から、ぶツ／＼叱言をいふやうに泡が立ちます、溝のやうな臭がして一滴もいけません。はい、其ま、で、いま居ります者も貰水だと申します。」

「がつかりしてお出なすつたが、お口に合ひましたか、お嬢様。」

「あ、おいしい水なの。ぢいや、寮のとかはりはないね。」

「はい。」といつたが、親仁は腰を屈めて立つて居たま、す、りなきして、古手拭を目にあてる。紫も愁然と顔をそむけた。

漢はとみかうみて、腕を拱いて黙つて立つて居たが、フト思ひ出したやうに、

「およろしくば。」とばかりいつて、そつと紫の顔を見た。

瞳を返して、

「飲みますか。」とやさしくいはれて、何うしたのか、わな／＼とふるへた。

紫の手から、おづく／＼しながら茶碗を貰つて、目を眠つて頂いたが、忘れたやうに一息にあふいで呑んだ、其顔の色も變つて居る。

「もう、一生の思出でござります。」と氣ぬけがしたやうになつて、ぼつたりと、地に手をついて、

がツくり首垂れたが頭を擽げ、
「へい、これで、歸れならば歸りますが、こゝまでおともをして参りましたから、お邪魔でござりませねば、おまるりになりますお墓まで、もう一足、おともがいたしたうござりますが、」
あふいで云つた目に涙を湛へて居る。
紫は答へなかつた。

三人が情に迫つて、人目を忘れた此のありさまは、少い妓がのんどの渴いたのも忘れさしたであらう。皆が唾をのんで見て居たのである。此時、藝妓に附添の男の、土間にしやがんで膝の上へ手を拱いて居たのが、獨で頷いてツト前へ出た。

「え、御免なすつて、此處へ出まして慥う申しましては、可いのか悪いのか存じませんが、御免なすつて下さい。此處に参りましたのは、皆廓の者で、旦那には大層御眞眞を蒙りました。今日ア御命日と云ふので、まあ皆がまた多勢、お参詣をしたいなんで、へい、そんなこと申しますけれど、どれも親方持、また勤の事でありますので、まあ、一人が五六人づゝのことづけを持つて來たんでございますが、あなた様、御参詣の御様子、こりや私等が出ます處ぢやあござりませぬ。最も名高いので、一人も其何か、妙な、かゝりあひのものは無いのでござりますけれども、故つと御遠慮を申上げませうと存じます。で、同伴もいらつしやりますから、次手にハア眞に何です

が、かうやつて持つて参りました塔婆アおことづかり下さいまして、御氣に入りましたら、あなた様お口から、こんな奴等ア参りましたと、おことづけが願ひたう存じます。いえ、そりや最う然うおつしやるのは知れてますが、故つと御遠慮をいたしますことで、ねえ姉さん何うだね。」
と、くるりとうしろ向いて老妓を見ると、これも幾度も頷いた。

「まあ、何分。へい。」と一ツ天窓をさげて、
「何處か、ま、ぶらついて歸るとしませう。」

皆が顔をあはせて合點をしあひ、帯に煙管をしまふ、袖を引張る、裾を拂く、鬢をなでるなど、ざつとあり。ぞろ／＼と、綺麗ないろ／＼の衣は、小屋から、ばらりと出た。

紫の前で小腰を屈めて、皆が行きかけると、身を開きながら片寄つて、
「失禮を、」と言ひながら見送り果てた。

紫は振返つて、

「お前さんも歸つておくれ。」

「でもござりませうが。」と立ち兼ねた、——これには何ぞ仔細があらう。

「何うした、お新發意。」

しつかりした聲、濱の摩耶寺の鐘樓の前で、背後から天窓を撫でたのは、此の邊の漁師と見える。毛脛に組のやうな杉の柁、棕櫚の繩鼻緒のたつた、厚い齒の下駄を穿いた漢である。うつかり空を見て、何か幼いものながら、習はずに經を讀む、此の境遇にある男の兒の、跣足で胡坐かいて砂いぢりをするのでなく、剃立の可愛い天窓圓々とうつくしく、襟の白い、耳朶の大きいのが、無垢の布の、洗ひざらしではあるが汚の見えぬのを着て、黒い服綸のくけたのを背からまはして前で占めた、あかぎれのない、象牙のやうな小な踵に、穿きあまる縁下駄を引かけたが、恰で臺つきの雛の立つた形。手を額に加へて、寺の棟に横を向いて、むく面で羽虱をつゝいてる、大な鳶を見ながら澄ましてイんだうしる姿、年紀には似ないで、宛として、唐畫の山水の中の人物である。

背後から不意に天窓を撫でたので、新發意は驚いて振向いたが、仰いで漁師を見た。らふたけた十ばかりの、あどけない顔に日があたつて、白いのにあかりがさし、一ツの目が腫ぼつたく、臉が赤くなつてやゝたゞれて居たが、日光をうけて炫ゆさうである。

「は、は、は、お新發意、和尚は寺かね。」

「また參詣に見えたの、」と新發意は大人びたものの言ひやう。恚ういはれて、漁師は何か行話つたが、チヨイと頷いて、

「む、そんなものよ、何は、和尚様はお寺かの。」

とあらためて言ふ顔を、まばゆさうな目でのぞいて、ふつくりした片頬に笑み、

「あの、あんまりお前、無理を言つてねだるから、それであの困るんだつて、お上人様は、昨夜から出てまだお歸りぢやあないよ。」

「何か云はあ。」とまた笑つて天窓を撫でる。ト痒いか袖口で目をこすつて、

「何も岡藏が、アノ雲助をして居た時、紫色の衣服を着て錦繪のやうなお嬢様に、櫻貝を拾つてあげたからつて、お上人さん御存じの事ぢや無いのなもの。アノそれから女房も貰はないで居るからたつて、それも何もお上人さん知らないこつた。そんなことはあのお經には書いて無いから、どんなにねだられたつて分りやしないよ。それなのに、むづかしい、苦い顔して、お前來るとは、お上人さんをせめるから、それだから、あの、今日は居ないんだよ。ほんとうに、うるさいつて言つておいでだつた。」と云ひながら、莞爾する。岡藏と云ふのは、堪らないやうな面相で苦笑をして、

「あんなこと言はあ、何時聞いたよ、お新發意。え、誰に習つてそんなこと覺えたよ。む、何、

おらあ何にもそんなことは知らねえぞ。いやほんとうに、和尚め、留守か。」

「あい」と頷いてまた目をこすつた。新發意は忘れたやうに、こんどは眞面目である。

「ぢやあお新發意、お前さん、昨夜また一人だな、む、知らせば可い。おらあ、また泊に来て、足藝ぶツて、踵の上でお前を躍らせて遣るだけなあ、淋しかつたらう。狸和尚め、い、年紀をからげて、拂子のやうな白いやつを生やしてながら、畜生、何處へ芋を掘りに行きあがつたか。」と苦い顔をして、緊つた一文字の大口を弛めてまた微に笑つた。

十四

岡藏はフト思ひついたやうに四邊を見たが、鳶はまだ屋の棟に居て、日向で此折から羽づくろひをした。が、けろりとして嘴を腹毛にさして静とした。

「のんきな状態。」と投げたやうに云つて、岡藏はまた俯向いて、新發意が目をこすつて居る顔を観き、

「そりや、然うとな、お新發意、誰かお寺にお客があらうな。」

「どんな。」と袖口を引張り直してあをむいた。

「何んなつて何よ、六十六部よ。え、ぢやあない、巡禮が、そら、何よ。アノ何とか言はあ、御題目を書いた御札をしようつて、箆かついでる、何、千箇寺か、む、それだ。」と頷くと、新發意も意を得て黙つて合點々々する。

「何よ、女ばかりのよ。」
また頷く。

「え、二人連だ、婆さんと少い二十八九な、む、然うだ。」と一言毎に、岡藏は身に力を入れて、

「来たか、お寺へ、え、居る。然うか、何處に居るの。」

と何かそはくして、其の組を穿いた毛臍もがたくしさに、むくつけない顔の目も眉も働いて、寺をすつと見込んで、爪立つばかりにあたりを見た。片折戸から遙に卵塔場をすかしたところを、

「何だい、」と新發意に然う言はれて、激した赤い顔で、背いて屋の棟に眼をそらした。

「何うだい、鳶ア野面だなあ、お新發意。」

とつかぬ事を言つて、また顔を見合はせた。

「は、は、は、は。」

「お客様が何うしたの。」

「何よ、え、何でもねえがの。さつき磯でもつて其の二人づれに、俺あ此處の此のお寺の名を聞かれたわけよ。二人とも笠をかぶつて居たがな。カラ、まあすつと砂道を真直に一町ばかり行つた處だつて教へたがな、何か、土地は初めてのやうだ。殊にハヤ日にあぶられちやあ居ねえ。弱々しい、心許ねえ。あつち此方、笠の中から、え、何よ、其少いのがすかして見ながら行つたわけよ。一條道なり、近所に家あねえ、一棟だ。あの松の中の寺だつて、砂原見通しの此森へ見當まで着けて教へたから、見はぐして迷やしまいと思つたけれど、何處か心許ねえ。何の一足だ。ついて行つて案内して、次手に和尚に一番驕らしてやれ、女同志だ、母娘のやうだと然う思つてな、あとからついて来ようとする、え、お新發意、居合はせた奴どもが、むねんぢやあねえか。見や、見や、岡ア千箇寺の女のあとにくつつかあ、道中の何かを狙ひやあがつて、汝ア山鳩だあ。谷の庵のお比丘尼をおツばらしましたのもお前だらうつて、汚らはしいことを言ふからの、俺もむくれ切つて見合はせたが、何だか懐いやうで堪らねえから、我慢が出来ねえで、實あ皆の目をかくれて来たのよ。何か、顔を見られるやうで、子供のお前にも極が悪いと云つたやうな次第のものよ。つまらないわけだ、なあ、お新發意。」と来た方を振向いて、岡藏は心咎めがするらしかつた。

新發意はいたいで、

「あの、然う、二人とも先刻来たの。摩耶夫人様にお参をして、本堂に坐つておいでだつたから、お上人さん、留守だつたけれど、休んでござるが可いッて、お位牌堂のわきの小座敷へ通したんだ。」

「え、不思議だ。本堂に坐つて、小座敷に通つた。む、お新發意よくしてあげた。」

十五

「然して何か、お小僧様とか、お新發意とか、はいとか、難有うとか、ものを言ふか。え、ものを。何、え、誰だつて。然うよ。啞で無くツてしやべらないと云ふ奴もねえけれど、其處が何だ、チト其、ものだからよ。それ、千箇寺の女はまた云ふことが此方人等と違ふだらうかと思つてよ。え、何、坐つてたつて。矢張あたりまへの、袖をトやつて、足をトやつて、坐つたか。え、む、然うかな。あんな人でも矢張然うかな、坐つたり、立つたりするだらうか。でも、何處か違やしねえか。あたりまへか、何んな聲だつた。む、なるほど眞似られめえ。はてな、それだが、何だ、え、おらあ、こりや、何うかして居らあ。」

しきりにあせつたが、岡藏はホツと息をついて空を見て、
「見ねえ、お新發意、狀あ、野面だぜえ。」 鳶はけろりとして居たのである。新發意は黙つてし

まつて、聞くといふよりは、むしろものを言ふ岡藏を見て居たのであつた。

「む、そして何か、番茶でものましてくれたか。」

「あ、土瓶で出した。それから、いり豆があつたから其を持つて行つたの。」

岡藏はほたくして、

「旨えな、其のいり豆にやあ花が咲くぜ。お新發意あ伶俐だ。む、よくしてあげてくれた。と然も嬉しさうである。あまりの様子ツたらないから、新發意も怪しくなつたか、

「あの、知つた人。」

「何、何、別に何も知つた人と云ふのぢやあないが、その、何よ。」とこんな幼いもの前ながら、岡藏は口籠る。トちつと其顔を見て居て、

「あ、錦繪のお嬢様か。」と禪心あつて、圓いもの、五本の指、個中物有これ什麼で、突拍子もないことを一喝したやうに、附かぬことを打つけにいつた。

岡藏吃驚した。

「申戯を言はあ、勿體ねえ。」

「それだつて、うつくしい人だから。あの、モ一人、お婆さんの方は、何かいろんなことを話すけれど、きれいな人アそんなに云やしない。私、傍へ行きたいけれど、遠慮してるの。本堂の佛

様、やさしい顔して、拜むと、少し莞爾しておいでだけれど、何だが勿體ないもの、傍へ寄ると。でも、叱りさうぢやあないけれど、恐いやうだ。尊いのだつて、お上人さん然う云つた。」

とおぼろげなことをいふ。岡藏は聞いて案じて居て、

「む、そりや人品よ、威があると云ふものだ。え、と、小座敷に二人か。」

「あ、然してびつしやり閉切つてあるの。先刻もソツと行つて見たら、分らないんだけれど、泣いてたやうだ。だから、何うしようと思つて、お上人様アお留守だし、こゝにアノ、それでここに居るんだよ。」

とたよりなげな風情である。此兒も人なつこい、愛くるしいので。

「待ちねえよ、泣いて居たつて。はてな、待ちねえ、小座敷に居ると云やあ、何だ、ソツと行つたら、前裁から様子が知れよう。何うかしてモ一度見たいもんだが、え、お新發意、お前さんも何なら一所に連れて行きねえ、そつと見よう。」

「だつて悪いから。」

「可いやな、こんな野郎ぢやあ悪からう。氣味を悪くされると悪いで、おらあ、遠くに居て内證で見らあ。お前さん小兒だから女の兒は構はねえ。えい、おい、然うしねえ。だから叱られたらあやまることよ。可か、さあ、さきへ行きねえ。ついてかあ。あ、小兒を出に……小恥かしく

もなく……畜生……」

「何うしたの。」

「野面なもんだぜ。」と岡藏は、容んで鳶を見た。

十六

小さな身体に縁下駄を引摺つて、青く伸びた芝の上を、新發意は黒い帯で無垢の姿で、ソツと小座敷の庭にうかゞひ寄る。

岡藏はずつと離れて、木戸の中へ片足を跨ぎ、半身を庭の隅へ入れながら、片足は境内に浮かして居、横になつた顔を出して、構はぬ、開けい、小兒だから大事な、氣に逆つたらあやまるこつた。と両手を出して、……見返つちや猶豫ふ新發意の身体を遠くから掬つて押すやうな、仕方、手真似をして居る。

微笑みながら頷いては、少しづつ前へ出て、いま小座敷の前と思ふと、障子の裡に人の氣勢。また猶豫つて、岡藏を振り返る。ト焦つて押すやうに手を上げ下げして煩かしがる。頷いて、またコツリと寄つたが、極が悪かつたか、庭前を直角に切つて筋違につつと外れた。新發意は小さな築山の下、根世隠れに二坪ばかりの池があつて杜若が咲いて居た、其ふちに立つて、手のも

のを落したやうな、呆れた岡藏の顔を遙に見返つて、所在なく莞爾した。

「不可え〜。」と口の内で呟いて、岡藏は伸上りざまに手を振つた。

新發意はあどけなく、いや〜をして、また莞爾したが、其まゝ池のふちに屈んだ。圓い臀は縁下駄の上へちやんと据ゑられた。

むかうで岡藏にます〜焦せられて、新發意は俯向いたが、遺瀨なささうに指のさきで長く伸びた杜若の葉のさきを撮んだ。ト葉摺れがして、一葉サラ〜と動いて、新發意の踞つてちつとして居る姿が、チラリと揺れるやうに見えた。途端に、

「あれ！」と叫んだ、障子の裡で魂消る聲。吃驚して、新發意の姿は白い兎が飛ぶやうに築山のうしろへ流れて隠れる。岡藏もハツとして小蔭へ蹲む。

十七

障子の透間に手が懸つて、急いだ如く其半ばを開らく、ト板縁に載せてある小笠の紐を結へて附けた笈の上へ、色のあせた衣ながら、衣紋の正しい、威のある美しい顔、束髪をつやゝかに耳にかけて、手甲のまゝ、親指のさきを少しく開けかけた障子にかけて立つたのは、——昨日の其時、摩耶寺に居た紫である。

蒼海原は銀のやう、砂の濱にさら／＼と日かげがさして、池の中は晝の最中で、水に根笹の蔭が暗く、濃紫の杜若の花が沈んで、葉さき幽に戦いで居る、その一面の庭をちつと見た。眉は憂はしげに、清い目がうろ／＼して居た。

「何ぢや。」と取續いて、背後から慌しげに立つて来て、笈の傍へこれは片膝ついて、一枚障子を右へ開けて、齊しく庭前を見廻したのは、母親と見えた、七十あまりの老女である。

消えも入りさうな現下の叫び聲、あなやと見る間に立つて出で、其庭を見廻しても、海原の方を見遣つても、濱松の中を透かしても、右を見ても、左を見ても、目につく蟲一匹這つて居らぬ。あまりの仰々しさに顛動した胸の轟くのが耳について、肉が動くやうな。女はト見れば、ちつと目を睜つて居るが、陸にも海にも何事も無い。うっかりした様子であつた。どぎまぎしながら笈の竹を一ツ拍つて、

「これ。」

「はい。」とはつきり答へた。

「何うぞしたかの、けたましい。何ぢやつたぞ。」 吻と息を吐いて、おなじく手甲したので胸を撫でる。

立つた紫もといきをつけて、

「母様、御免なさいまし。」

「え、何にあやまることも何もないがの。ま、ま、無事でよかつた。お前つひぞない、何うしたのぢや。癪のせるでか、恐しいものでも見えましたか。」

「い、え、堪忍なさいまし。つい何でございます、寺のお小僧さんでせう、彼處の杜若を引きましたのが、障子の間から見えたもんですから、私はもう吃驚いたしました。」

「お小僧様が杜若を撮んだつて、其が何の吃驚ぢや。をかしいではないか。案じられる、聞かせておくれ。」

「可うございます、母様。」と云つた時は、顔の色も常であつた。

「何も祕すことはないに、はなしてお聞かせ、氣に懸ります。」 疑の色は解けぬ。

「祕しますのではないの、母様。お氣に懸りますならば申ませう。あの、山下の寮に残して参りました坊やが三歳になりました。あ、恰ど今時分。」と言ひかけて、つく／＼と空を視めて、

「唐橋の下に池がありましたのに、杜若が咲いて居て、ちよこ／＼あるきましたもんですから、乳母のさきへ立つて駈け出します。アレと云つて飛びつきました、水の中へ落ちましたの。私は、秋と千代と三人で、恚うやつて、縁側に立つて見て居りましたが、吃驚いたして氣が遠くなつたのですよ。坊やは蟲も起らないで何ともございせんかつた。私はそれから一月ばかり寝ま

したの。をかしようございますこと、其からはもう、小さなのが水のふちにをりますと、何時でもはら／＼思ひますのに、杜若も咲いて居ますし、池も池で、恰ど其時のやうな気がしましたから、落ちませぬか、危い、と其で聲を立てたんですよ。ちかごろこんなに吃驚したことはありません。嗚、お驚きなすつたでせう。私さへあんまり！」と云つて紫は笑つて居た。

十八

恰ど此折、新發意は築山の蔭から根笹越に、最と其愛くるしい顔を少し傾けて出した。炫い眼で、これは驚かされた聲の成行を伺つたのであつた。

が心づかひをして居た千箇寺は、少いのは立ち、老いたるは膝をついて、二人ともあからさまに縁側に笈がくれに見えたので、悪いことでも見着かつたやうに、あわてて、かくれようとする。トいま紫の話すのを領き／＼、目をしばた、いて、堪へ得ない風情だつた老女が、目疾くこれを認めて、

「あの、もし、お小僧様。」と聲を懸ける。

呼ばれてかくれあへず、新發意は間の悪さうにまた顔を出して覗いた。

「おいで、おいで、こゝへおいでなさい。」と老女は手招きする。少し進んだが、傍に凍として立つて居る、先刻、懐しいが遠慮がある、叱られさうにはないけれども恐いと云つた、紫に憚りあつて、新發意は、さうなく、近づき兼ねるのである。

一人見をするかの。」と老女は紫を顧みた。

「遠慮をしますのでよ。」と云つた紫は、其威のある目を和らげながら、口許をやさしく、頷くやうに傾いておつと新發意を遙に見た。

然うすると齊しく、大な縁下駄をやりちがへ、踏みかへ、芝もしどろにばたくと驅けて来て、縁前で留まると、

「あい、と云つて嬉し／＼な目色をする。

「いろ／＼御面倒で難有う存じます。あなた、幾歳になりますえ。」と老女が聞く。

「十一。」

「あゝ、お十一かい。何時此お寺へおいでなされたの。」

「去年、お父さんが亡つてから、」

「おゝ、まあ、其はお可哀相に、そして母様はえ。」

「存じません。」

「御存じないのか。それはまあ、そして何は矢張り此處のお生れかい。」

「然うぢやないの、彼處からアノ海を渡つて、お上人様と船に乗つて來た。」と云つて、うつむいた。襟の白い、耳の大きな、つむりのすつぱりと蒼いのを、紫は瞬もしないで瞻つて居る。

老女はすり寄つて、

「いろ／＼なことを聞きますが、お小僧様、あなた、母様は御存じないが、父様は知つておいでなさるか。何といふお方だつた。え、お小僧様。」と顔を覗いてうら問ひかけた。紫は思はず聲をかけて、傍から、

「母様、そんなことおよしなさいませよ。思ひ出してお泣きです、悪うございますよ。」とおさへて云ふ。

「あ、左様だつたか。左様だつた、左様だつた。」とこれは口をつぐんだ。新發意は不審げに、こすつて居た、たゞれた赤い目で振仰向いて、うつとりしたやうに紫の顔を瞻る。ト心着いたものであらう。

「お目が痛みますか。」とやさしく然う云つた、紫は極めて機嫌のいゝ面色である。

「痛かあないの、痒い。」

「痒いの。」とあうむがへしに云つて、紫はしとやかに出て、縁に屈んで、手早く一ツほどいた手甲をはづして、新發意の頰にかけた、手は暖であつたが、少しふるへた。顔を背けて母親を見返

りながら、

「目もらひですよ。」

十九

「それではお小僧様、禁厭をしてお貰ひなさい。目もらひと云ふものは、一寸仕方をして、人の末の女兒に結んで貰ふと治ります。恰ど可い、この女は私が一番末の女ぢや。お役に立ててあげませう。つひぞ未ださせたことはないで知りますまいがの、む、よく利く、現當に治ります。仕方は私が教へますよ。お小僧様、まあ、此處へお上りなされ。」

「あい。」といつた、が猶豫つて、そと紫の顔を見た。目の所爲もあるか、おもはゆげである。

「此方へ」と云つて、紫も指で縁側を教へたが、なほしりごみをして居たので、莞爾笑つて手を入れた。脇の下へ兩手を挟んで、紫は、ツト白衣の童を抱きあげたが、似げなく活潑に、しかも迅速な仕方であつた。板縁へ抱下して、

「軽いな。」

新發意は日向の板縁で、瞻られる顔をやるせなげに笈の裏へ押かくして、嬉しげな微笑の見え、ふつくりした横顔を見せながら、極悪げに横すわりをして居る。うしろむきに圓い臀の乗つ